
俺と雷と幻想郷!?

ふれいむ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

俺と雷と幻想郷！？

【Nコード】

N6838X

【作者名】

ふれいむ

【あらすじ】

ただの平凡な中学生一年生、かみいさきしらい神依崎祠雷は突然幻想入りしてしまう、外の世界の未練もなく、そのまま幻想郷に住むことにした祠雷は、強くなりたいという思いを持ち、騒がしい暮らしを送っていくこととなる。

雷を操る程度の能力（前書き）

文章に読みづらいところが多々あると思いますが温かい目で見てくださいと助かります。

若干のキャラ崩壊、オリキャラありますがそこはスルーの方向でお願いいたします。

雷を操る程度の能力

俺の名前は神依崎祠雷^{かみいさきしらい}、名前のせいで厨二だのなんだの言われるが立派なサッカー好きの健全な人間でアニメとかは興味ない。

サッカー部の一年レギュラーなのが唯一の自慢、中体連では出れたけど負けた、折角のツアーアシストなのに無駄だった。キック力は自慢できるか。

勉強は絵に書いたような理数系＋体育と技術家庭な感じ、人がよりにくいオーラがあるらしい。そのせいででもないぜ……友達も少ないし家庭の事情も問題あり、正直いやになってくる。

日常はつまらない、それが俺の認識だった。

そして俺は今とても混乱している。原因は今の状況にある。

3

目が覚めたら見知らぬ天井＋布団で寝ているという経験はあるだろうか。

「ここは何処なんだ？」

確か公園のベンチで寝ていたはずなのだが？

少し状況を整理しよう、俺はコンビニで雑誌を立ち読みした、そして公園のベンチで鳩の群れを眺めているうちに寝てしまったのだから。温かい夏の日差しは眠気を誘うから困ったもんだ、特に授業中。

じゃあこんなところに誘拐？いや、そしたら誰か周りについてるだろ、周りの様子を知るのが今は先決だ。

起きあがって探索を試みる、畳に障子とかなり和風の造りだ、賽銭箱もあるしどうやらここは神社のようだ、500円くらい入れてみようかな、ただでさえわけわからねえ状況なんだし神様に助けを求めても罰は当たらないはずだ。

外にでるとかなり長い階段がある。境内を一通り見て回ったが誰もいなかった、神主さんか巫女さんの1人くらいいてもいいと思うけどなあ。できればかわいい巫女さんきぼ……なんでもないです。外にでるとかなり長い階段がある。少し降りてみよう、神社には誰もいないみたいだし。長い階段の下には人が住む街が、と俺の中では相場が決まってるんだ。

……とはいっても降りても降りても先が見えない、どんだけ長いんだこの階段は。家の近くには絶対ねえぞこんな神社は……

それよりもだ、今ある理由で足を止めている。それは……

脇の林の中がゴソゴソ言ってるがなん……!!？

「なんだよこれ！化け物か!？」

なんだか熊みたいな得体のしれないものがある、こんな生き物動物園でも見たことないぞ！というかいたら困る、幼児とか絶対泣き崩れるに決まってる、そう、だってあいつは頭が二つあるんだから！しかもそのほかにもういるおかしいところ盛りだくさんだし！

しかも迫ってきてる、完全に狙いは俺だ、やっぱりこうゆう化け物には食べられるって感じなのか？そんな人生の終わりがたは御免なんだけどな！

となれば選択試は一つしかない。そう、神社へとにげること。

「なんなんだよこれは！」

必死に階段を駆け登る、いや、降りたほうが良かったかな？行き先がわからないよりは安心できるけど……

息が切れてきた、階段を登り終わったがもう走れない。俺はその場に崩れ落ちた。あの化け物も境内に入ってきてる。

奴は迫ってきてでかい爪のついた腕を振りあげた。もう絶体絶命だ……これで終わりか……

畜生！なんでもいいからあいつを吹っ飛ばせ！もうやけくそだ、どうせなら最後に神風特攻隊やってやらあ。

俺は無謀にもほどがあるが奴に殴りかかった、（チキッて目をつぶっていたがそれは内緒だ）

腕に奴の感触が来た……なんだかものが焦げる音がする、その前に俺は死んでない、いや痛みを感じる前に死んだのか？恐る恐る眼を開けるとそこには黒こげになったやつ死体がある…… why？誰がやったんだ？しかもどうやって、まさか俺……のはずはないよな。それよりもなんだか疲れた、すべてを出し切った感じがする、俺は猛烈な眠気に襲われた。意識がブラックアウトしてきた……もうだめだ、おやすみなさい。

目が覚めるとさっきと同じ部屋で同じ状況になっている。夢じゃなかったのか。

「何なんだよもう……」

「あら、目が覚めたの？」

起きたら巫女さんがお粥をもってこっちに来るところでした……待って待って、この人は誰だ？誘拐犯か何かか？

「あの……あなたは誰でしょうか？というよりここは何処なんでしょ……」

「私は博麗霊夢、この博麗神社の巫女やってるわ、あなたは？見たところ外来人みたいだけど」

外来人？なんだそりゃ、いろいろ聞きたいけど名乗るのが先だ」

「俺は神依崎祠雷です、ところであの化け物から助けくれたのはあなたですか？」

「霊夢でいいわよ、あとかしこまらなくていいわ、話しづらいし、それよりも助けけるって何？私は森の中で倒れていたあなたを寝かせた、そして帰ってきたらあなたが妖怪と倒れてた、私はあの妖怪の片づけと祠雷の看病しかしてないけど」

「じゃああれはいつたい何だったんだ？……っーかあれ妖怪なんだ。」

「もう一つ聞くけどお賽銭入れてくれたのって祠雷？」

「そうだけどもずかつた？」

「……いや目が輝きだした、お粥に卵が乗ったぞおい、態度がガラッと変わったな。」

「外の世界のお金は高く売れるし、もしよかったら来るたびに素敵なお賽銭箱に入れていっていいわよ」

「はあ、通貨違うんのか……というかここ何処なんだ？」

「ここは幻想郷、やっぱりあなた外来人だったのね」

「幻想郷？」

「あなたたちの住む世界とは別の世界、パラレルワールドというわけじゃないけど要は別の世界と考えるもらっていいわね」

「……戻れるのか？」

「戻るわ」

さらりとおれの希望になること言っな。

「じゃあ」ところでさあ「っ、何でしょうか？」

「祠雷は能力持ち？」

能力？なんのことだろう？サイコパワー……なんてな。

「だから、あの妖怪黒こげにした能力よ」

「人の心読むなよ、というか俺は何も知らん（チキって目閉じてたし）」

「私は神社のほうが一瞬光って、何事かと思えば祠雷が倒れてたんだから、間違いなくあれを倒したのは祠雷なわけ」

俺が倒したのか？よくわからんが今のが事実ならそうなることになる。

「面倒だからおんなじ状況作って調べるわ、さあ、外に行くわよ」

今さらりと恐ろしいこと言いませんでしたか！ちょっと……

言われるままに境内に来てしまったが、いったいどうやって調べるんだ……！霊夢が空飛んでんだよ！もしかしてここは常識のかけらもない場所なのか？もう早く帰りたくなってきた……

「今から私が弾幕放つから、とりあえず抵抗しなさい」

弾幕？だめだ、もう思考がおいてけぼりくらってる、というか弾幕つてどんな……

「おわ！なんだこれ、これが弾幕なのって人の話聞け！」

「いいから抵抗する、なんかしようとすればいいはずだから」

「はずってなんだはずって！」

あんなもの直撃したら腹に穴開くぞおい！いまはなんとかよけきってるけど霊夢あれ絶対本気じゃないから！

「手っ取り早くいくわよ、霊符「夢想封印」！」

「ちよま、あかんからそれ！」

もうどうでもいい、そうだあの時はやけになって殴りかかったから助かった、でも空飛んでる相手なら殴れない、そしたらやることは一つ！

俺は霊夢に向かって思いつきり両手をかざす、そうすればなんとかなるかもしれない、というかそれしか手段がない！

……今、俺は手から何を出した？まるで雷みたいなビームだったけど。

「やっぱり私の勘は当たったわ、あなたは雷を操れる、「雷を操る程度の能力」といったところかしら？」

手がバチバチ言鳴って電気が通ってる、雷だけじゃない。

「霊夢みたいに言うなら雷だけじゃない、「電気を操る程度の能力」ってとこかな」

程度のはつける意味あるのか？疑問だけどまあいい。

「ねえ祠雷、強くなりたくないかしら」

俺も中学一年生、力だのなんだのには憧れる年ごろだからだろうか、言ってしまったんだこのとき。

「ああ」

「外の世界に戻れなくなるかもしれないけど？」

それは困る……と思いつつも俺がいた環境はそこまでいいものだったか？

- ・ 1つ、両親が絶賛離婚中
- ・ 2つ、外見のせいなのか友達は極端に少ない
- ・ 3つ、今までの暮らしは特別楽しいわけじゃない
- ・ 4つ、つーか思い返せば未練0

「今思うと戻る必要すらないかもな」

「帰らなくてもいいって言うこと?」

「ああ、いまさら帰る気も起きなくなってきた」

「決まりね」

こうして俺の幻想郷での暮らしが始まったわけである。

雷を操る程度の能力（後書き）

まず1話、読んでくださりありがとうございます。

誤字脱字、その他もろもろあれば指摘してくださるとうれしいです。

学生という立場もあります。が更新不定期です、特にテスト前はそうなるでしょう。がその点は容赦してくださると助かります。

これからもよろしく願います。

スペルカードを作ろう！ (前書き)

！？ の後に空白入れてみました、ちょっとは見やすくなったかな？

スペルカードを作ろう！

あれから3日ほどたった、博麗神社に住まわせてもらっている俺は家事全般+雑用という面倒事を押し付けられる羽目になった。まあただ飯よりは確かに気は楽なんだけどさ。

……とはいいつつもこの暮らしにもすぐに慣れてきた、霊夢のスパルタのおかげで生傷の数に比例して能力の使い方も成長しているのは自分でもわかる。まだ弾幕は出せないけどね。

昔から「強くなる」ということには昔からあこがれていた、サッカーだっけ始めたころは日が暮れるまで練習したものだ。

親戚は父さんに似た、なんて言ってくるがどうなんだろうか？俺の父さんの記憶は剣道柔道空手合気道etc何でも来いの格闘家で、母さんいわく、なんでも国が持つてる武力団体にお呼びがかかってたらしい、そんなこと公にしているのかわからないが、一応戦争しないんだろ？日本は。

離婚して蒸発したのはそれにかかわることらしいけど詳しくは知らない、知る気もない。

ただ俺の性格は父さん似なのは確からしいが。

魔理沙っていう人にもあった、最初はここは魔法使いまでいるのか！なんて思ったがよく考えると、空飛ぶ巫女さんと妖怪がいる時点で何でもありなのは変わらない。

俺も空飛べるようになったら便利だろうな、速く飛べるようになりたいな。

魔理沙も「特訓に付き合っただけだ！」とか言って弾幕ごっこ（かなり一方的な）をする羽目になったけど、ここは戦闘狂の集まりなのか？ って霊夢に聞いたら大体あつてるとか言ってきたし。ほんとに何なんだよここは。

それはさておきだ、俺の能力についてわかったことがある。まず、電気のほかに強力な武器が見つかった、それは「光」だ。閃光手榴弾みたいな使い方ができる便利なもんだ。それに電気なら携帯の充電から雷落とすまで、ほんとに何でもありらしい、もちろん限度はあるけどな。

「さてと、そろそろ霊夢が返ってくるかな？」

今日の特訓の始まりだ。

あれからさらに1週間がたった、結構忙しい一週間だったと思う。まず俺は人里に初めて行った、確かに俺の格好は目立つみたいで色々ジロジロ見てくる人もいた。イメージは上下黒ジャージにトレシ

ユーはいて江戸時代の町にタイムスリップした感じをイメージしてほしい。霊夢がいなかったらどうなっていたか……

能力の成長は霊夢いわくとんでもない速さらしい。弾幕もある程度出せるようになってきたし能力も上手に使えるようになった。そして霊夢に一発当てることができたのだ、それでも袖かすっただけだったけど。

そして今日はスペルカードたるものに挑戦するらしい。霊夢が返ってくるのが楽しみだ。そろそろ買い物から帰るころだし、今日の特訓が始まる。

「ただいまー」

噂をすればなんとやら、でっかい袋を抱えて霊夢が帰ってきた。

「なあ霊夢、スペルカードって何なんだ？」

気になって聞いてみた、これから習うことだしね。

「とりあえず外に行くわよ、話はそれから」

縁側に座りながら霊夢が説明を始めた。すると霊夢は白紙のカードを10枚ほど渡してきた。

「スペルカードっていうのは簡単に言うと必殺技みたいなもんなの」

「と言いますと？」

「たとえば私の夢想封印もスペルカード、見たことあるでしょ？」

「あれがスペルカードなんだ」

「それよりもまずはスペルカードルールについて知ってもらいましょう」

口調がいつの間にか先生っぽくなってきてるな。

説明が長いので俺が要約しよう。スペルカードルールとは要するに戦いのルールみたいなもので、みんなはそれを「弾幕ごっこ」と呼ぶらしい。

・まず勝ち負けの決め方、それはどちらかが被弾するかスペルカードを全部攻略されてしまうとそこで勝負がつくらしい。

・基本的に絶対によけられないようなものは反則で、それは普通の弾幕にもスペルカードにも当てはまる。

とりあえずこれだけ知っておけば大丈夫らしい。細かいことは後回しらしいが。

そして1枚のスペルカードにも弾幕ごっここのときの弾幕を出す使い方とそれ以外の能力を活用した使い方、たとえばおれだったら電気を使って高圧電流をばらまいたり、光を使ってフラッシュ！なんて感じらしい。

とにかく今日、俺のスペルカードを作るらしい、今はどういうものを作ったらいいか会議中だ。

と、そこへお客の登場だ。

「おーっす霊夢、遊びに来てやったぜ」

魔理沙が遊びに来たのだ。

「今忙しいの、手伝ってくれるんなら大歓迎だけどそうじゃないんなら適当にお茶でも飲んでて」

「忙しいって、二人して何してるんだ？」

俺は魔理沙に事情を説明する。

「なーんだ、そういうことならあたしも手伝ってやるぜ」

「いいけどパクるんじゃないわよ」

「失礼な、魔理沙様がそんなことするはずねーじゃないか」

「はいはい」

パクるって何だ？つーか前科ありみたいな話し方だったけど。

俺の弾幕は直線的だが、スピードもあって角々と曲がる、本当に雷のようだ。それをうまく使おうというわけだが、それだけじゃ物足りないのじゃんとほかのバリエーションのものも作るらしい。おれには光も扱えるので好都合なんだそうだ。

こうして3人で俺のスペルカードを作ることになった……………

そうして俺達は4枚のスペルカードを作った、魔理沙も帰ったしもう辺りは暗くなっていていたので夕食とすることになった。本格的な練習は明日から、明日が待ち遠しいな。

そして俺の光の能力は暗い所を照らせるために重宝されている、電灯も何もないため基本蠟燭とかだったらしい、金銭的に助かるらしい、そこまで家計は火の車だったのか……確かに参拝客見たことないけど。

まあ家計の事情を俺が気にする必要もない、俺まで養ってるんだから問題ないだろ。

さあ、明日が楽しみだ。

スペルカードを作ろう！ (後書き)

スペルカードの方は次回にださせていただきます、しばしのご辛抱を。

魔理沙との出会いを省略しました、ファンの皆様ごめんなさい！
うまく書ける自信がないんです、いやほんとに。

誤字脱字、その他もろもろありましたら指摘してくださいと助かります、どうか次回も見てくださると嬉しいです。ではこの辺で。

スペルカードを作ろう！その2（前書き）

今回は結構展開飛ばしてましたね、正直やりすぎた感があります…
…いや、ちゃんと反省してますよ。

今回はスペルカード一挙公開です。

スペルカードを作ろう！その2

朝起きたら霊夢は出かけていた、机には『魔理沙のところに行つて
るから待ってて』という置手紙、まさかギャラリーに入るのか？
緊張してくる、霊夢も初めてスペルカード作った時はこんな感じだ
つたのかな？ たぶん違う気がしてきたけど。

スペルカードの名前ってやっぱり厨二っぽくした方がいいのかな？
若干それ要素入ってるけど。個性が出ると思っただよね、いや、
俺個人の感想なんだけども。

テーブルになんかメモがある、内容は……「魔理沙のここに行つて
くる」

「ps、言い忘れたけど、今日は本気出すから覚悟してね」

……おいおいちょっと待て、本気出すって言ったって今まで手抜き
だったってことだろ。本気んな出されたら俺しんじやうぜ？

いや、こんなこと言ってる暇があったらさっさと霊夢に対抗する方
法でも考えなきゃな。

お賽銭入れとこ。

「ヤッホー祠雷、晴れ姿を見に来てやったぜ」

魔理沙だ、晴れ姿も何もぼろぼろになって雑巾もどきになった姿しか見れないと思うが。

「ん、ちよつと待て、霊夢はどうした霊夢は」

「置いてきたぜ」

「いや置いてきたじゃなくて」

「ちよつとばかり飛ばしたんだぜ」

「魔理沙ってそんな早いのか？」

「幻想郷の中でも天狗の次に早いぜ」

「そうなのかー」 「キャラが被るからやめてほしいのだー」

「今何か聞こえた？」

「いや、それよりいいもんやるよ」

そう言つて魔理沙はスペルカードを取り出した。

「マスタースパークをちよつくら改造したんだぜ、祇雷にぴったり

のカードなんだぜ」

「もらっていいのか？」

「そのために昨日徹夜したんだし、特別にタダなんだぜ」

「普通なら金とんのかよ、まあとりあえずどんなもんなんだ？」

「使ったらわかるんだぜ」

なんか不安だな、おい、使ったら花火が出るとかいう落ちはごめんだけど。

「そんなことはないんだぜ、信用していい物だぜ」

何でこの連中は声に出さないことが聞こえてんだよ！

「秘密だぜ」

「だ〜、もういい……！ 霊夢が来たぞ」

霊夢が飛んできた。

「二人して何してんのよもう、魔理沙も本棚倒すなんて古いやり方してまで来たんだからなんか二人してたくらんでんのはわかってんのよ」

本棚倒した？まさか下敷きにしたのか……魔理沙も鬼だったな、これ。

「それはいいとして、祠雷と今日は本気の勝負よ、たぶん怪我しないと思うけど」「いや絶対無事じゃ済まないからね!」「気をつけるように」「スルーかよ!」

「さあ準備はいい?」

そう言って霊夢は高く飛び上がり、スペルカードを構える。

「畜生、もう何でも来い!」

俺もやけくそになってスペルカードを構える。

先に手を出したのは霊夢だった、俺だって伊達にスパルタ受けてない、このくらいなら……

「本気で行くわよ、覚悟はいい?」

……! 一気に弾幕が早く、厚く、複雑になる。けど大丈夫、俺には見える、この一週間チヨイで練習したんだから。

こっちからも反撃だ、いけ! 俺の雷弾幕。

霊夢は軽くよけながらいった。

「様になって来たんじゃない、でもね、まだまだ甘いわよ」

そう言って霊夢のスペルカード発動。

『霊符「夢想封印」』

なんちゅう弾幕だよまったく、こんなの避けれなんて鬼畜にもほどがある。

さて俺も行きますか、スペルカード。目には目を歯には歯をだ。

『雷光「稲妻柱の大封絶」』

霊夢を取り囲むように弾幕の雷が落ちる、そこから跳ね返るように霊夢に向かっていく弾幕……畜生、造作もなく避けられた。

どっちもスペルブレイクだ。

「次は俺からだ！」

『光撃「スタンフラッシュ」』

「ッ！」

閃光がほとばしる、目がくらんだ霊夢に祠雷が全方位にばらまいた弾幕が襲いかかる。

霊夢は作るのに協力したが中身は知らない、完全に意表を突かれた。

「もういつちよ、『雷符「雷様の大名行列」』！」

意外と行ける、そう祠雷は思った。尤も勝つのは望み薄なのも理解していた。魔理沙のスペルカードを気にかけてはいたがイレギュラーで得を得るのはもともと勝ち目の薄いこちらであるのは確かだが。

周りに弾幕を降り注ぎながら直進する幾つもの大きな弾幕。上と
う上のあらゆる方向からくる弾幕は大きな脅威であった。

「これは手ごわいわね、『夢符「封魔陣」』！」

弾幕が消える。そのすきに霊夢の弾幕が来る。

こっちに向かつて曲がって来る、これはよけるのつらいな、けど俺
だって腹に穴開くのは御免なんだ！

「当たればいいが……『電撃「ボルトナックル」』」

正直無謀なスペルカードだ、自分が直接近距離まで寄って弾幕をほ
ぼゼロ距離で叩きつける。

弾幕消しの効果をつけてみたが（魔理沙の入れ知恵だけど）どうだ
ろう。素直に通るかな？

俺は飛び上がる、少しなら俺だって飛べるんだ、すぐ落ちるけど。

「この状況で突進ねえ……やられるつもり？」

あっさりよけられる。けど本命はこっちじゃない！

「馬鹿言つな！ 喰らえよくわかんないやつ！」

「言い方がひどいぜ、せつかくのプレゼントなのによくわかんない
やつ扱いされたぜ」

今自分でも驚いてる、使っておいて何が起きてるのか分からない。
いや、全力で使ったから疲れてきた。それどころじゃない。体の力

が抜ける、あの妖怪と戦った時と同じだ。うっ、意識の混濁に逆らえない……もうお休みだ……

「まったく、あんなに強力なの作ってやったのに全力出すからこうなるんだぜ」

空中で祠雷を受け止めた魔理沙はため息をつく。

「もう少し信用してほしいんだぜ」

「あれ作ったのあなたなのね、まったく、どういっつもりなの？」

「ちょっと祠雷に肩入れしただけだぜ」

「私も疲れたし、休みましょうか」

お茶を用意し始めた霊夢、ふと気になることが頭に浮かぶ。

「そっいえば、あのスペルカードの名前はなに？」

「決めてないんだぜ」

「無責任なんだから……」

こうして俺の地獄は終わった……

スperlカードを作ろう！その2（後書き）

今回も読んでくださってありがとうございます。

ああ、文章力がほしい……読みずらかったらいつててください。これから生かしたいと思います。

スペルカードを作ろう！その後（前書き）

紅魔館フラグ立ててみました、テスト前なのにこんなことしてていいんだろっか？

スベルカードを作ろう！その後

「僕、将来お父さんみたいに強くてかつこいい人になる！」

これは……俺の夢か？ また懐かしい夢だ。あの頃は俺も純粹だった。ただ憧れしかもっていなかった。

「そうか、なら父さんと一緒に特訓だな」

覚えてる、あの笑顔、思えばあの頃からだった、強くなって、誰よりも上に立って、父さんみたいになるって思い始めたのは。なんだかんだいって好きだったんだな。ひねくれてんのは俺のほうか。

今の俺が父さんに似てるってのは確かにあってるのかもな……

「いつか父さんより強くてかつこいい人になれよ」

いつから嫌いになったんだろう、いなくなってから？ そうかもしれない、誰だつて勝手にどっかに消えてった、自分の都合で放り出したやつを好きでいられるか？ 俺は無理だ。

何自問自答してんだろ？ 今はあいつより強くなって見返してやるうとしか思えない。

だから頑張れてんのかな？この天の邪鬼は……

……頭が割れるように痛い、ここは博麗神社か、たしかスペルカード使って、力使い切って。

「あら、案外早く目覚めたわね」

「霊力使いきつといて、立ち直りの早いやつだぜ」

「俺はどんくらい寝てたんだ？」

「3時間くらいかしらね」

「以外に気絶してたんだな。つーかどんくらいが普通かわからんけど。というか解りたくもないけど。」

「それはそうと、祠雷に決めてほしいことがあるぜ」

「決めてほしいこと？」

「あのスペルカードの名前だぜ」

確かに名前決めないとかつこ悪いしな。

「それにスペルカード使うときは使うスペルカードの名前を宣言するんだぜ、それがルールなんだぜ」

「つまり決めとかないと使えないわけか」

「そういうこと、魔理沙があんたに押し付けただけなんだけど」

「まあ、とりあえず名前だが……なんか参考にできないかな？」

「マスタースパークを改造したんだぜ」

一回だけ見たことあるな、初めて会った日に。
あれを改造して……

「その前にどんなもんなのか俺もよくわかんない」

自分も理解できなかったわけですよ。何が何だか。

「マスタースパークの規模を小さくしてとりあえずそこらじゅうに
所かまわず撃つんだぜ、あと若干軌道修正したり、曲がったり移動
したりするから、結構よけずらい用になってるぜ」

やっぱり改造したんなら本家の名前を入れるのが筋だよな。

「やっぱりマスターかスパークのどっちか使うのが礼儀か」

「とりあえず魔理沙さんには秘密兵器があるんだぜ」

そう言つて魔理沙が取り出したものは……外の世界のゲームの攻略
本、見たことないようなマイナーなゲームだなおい。

「っ！かなんで持つてるんだらう？」

「何それ？どっから盗んできたの？」

「盗むとは失礼な、パチュリーから死ぬまで借りるだけだぜ」

それ盗むのと同じだよな、っ！かパチュリーって誰だ？

まあそのうちわかるとかしか言われないうんだし、別にいつか。

「とりあえずその攻略本から名前をパクると」

「何かかつこいい名前がたくさんあるぜ、ほら」

そう言われて中を覗く、手始めに魔法一覧でも……おつ雷属性一覧か、期待できるかも。

「サンダー」敵一体に雷を落とす

「ライトニングボルト」激しい雷が敵一体にダメージ

「スパーク」敵一体に雷属性のダメージ

……手抜き臭すぎる。もうチヨイましな名前はないのか。とはいいつつも俺だってサンダーサンダラサンダガしか言えねえけど。

「シャイニングスパーク」周りの敵に放散するような雷攻撃

何かぴったりなのがある！

「これなんかどうだ、効果までぴったりだ」

「よくわかんないけどかつこいいからいいぜ」

そうか、こつちにはゲームがないのか。

「あら、以外に普通のが出てきたわね」

「いや、何かわからんけど強そうだぜ」

「『雷符「シャイニングスパーク」』 なんてどうだ？」

「いいと思っせ」

「まあ、かぶってるのはこの際どうでもいいのかしら」

「気にしたら負けだぜ、霊夢」

かぶってる？ 誰とだ？ まあそれよりも今は重要なことがある。

「なあ霊夢、腹減ったんだけどなんか作るもんなるか？」

「それならお昼ごはん残ってるから適当に食べなさい」

「センキュー……野菜しか残ってねえ、まあいいか」

紅魔館では。

「咲夜、なかなか面白い外来人がいるみたいね」

「面白い外来人といいますと、この前魔理沙が言っていた博麗神社に住んでいるという人でしょうか？ 名前は確か……」

「神依崎祠雷、なかなか見込みがあるわ、今すぐにも見に行きたいんだけど」

「すぐに用意をいたします」

そうやって咲夜はどこかに消えた、レミリアは。

「少し手合わせしてみたいものね」

そう言っつて紅茶を飲みほした。

「で、あんたはいつまで居座る気？」

「もちろん、気が済むまでだぜ」

「あきれるわね」

「あら、こんな時間にお客さんだわ」

「こんな時間って……まだ昼間だぞ」

「だからよ」

だからよって、どろいづことだよ。

「まあ、直ぐにわかるぜ」

どうも納得できない。ここでは常識のかけらもないのは知ってるがどうもなじめん。

「遊びに来たわ、霊夢」

そう言って入ってきたのは……幼女？

「どーせこいつが目当てなんでしょ」

「あら、鋭いわね。まあ当たり、だって面白そうじゃない」

見た目と反するしゃべり方だな、まあ人じゃないんだろう。

「お嬢様」

「わかってるわよ、私はレミリア・スカーレット、あなたも予想がついてると思うけど人間じゃないわ」

「祠雷、こいつは吸血鬼よ」

吸血鬼……ここはほんとに何でもありだな。

「あの……そちらの方は？」

なぜメイド服なんだろう？ お嬢様とか言っただしでっかい屋敷に

でも住んでるんだろうか？

「私は十六夜咲夜と申します、紅魔館のメイド長です」

紅魔館？ それがこの人たちの住んでる所か。

「ずいぶんと丁寧ね」

「あら、初対面の人には丁寧に話すものよ」

「あんたが言えることか。で？ 何の用で来たの」

「なかなか面白そうな外来人じゃない、能力もちだって？」

「まあそうね」

「なかなか見込みはあるぜ」

「何の能力かしら？」

「あっはい、「電気を操る程度の能力」です」

びっくりした、いきなり話を振られたな。

「電気ねえ、香霖堂につれてったら喜ばれそうじゃない」

「それは考えてるわ」

「あいつんとこの機械動かしてやったらどんな顔するか楽しみだぜ」

何か蚊帳の外なんだけど……どうしよう。

「咲夜」

「はい」

！ 咲夜って人も能力もちなのか、瞬間移動としか思えない、一瞬で出てきたな、今。
しかも紅茶……やっぱりメイドらしいことしてんのかな。

「そう言えば祠雷に何の用なの」

「ただ顔を見に来ただけよ、あとはどのくらい強いのか聞きに来たってところかしら」

「あんたのこの門番ならいい勝負になるかもね」

「そう、わかったわ。今日はもう帰りましょう、咲夜」

そう言ってレミリアは出て行った、思ったんだけど日傘だけで日の光が平気になるなんてチートだよなあ。持ってるのは本人じゃないけど。

「そのうち紅魔館に来てね、いつでも招待するから」

これは俺に向けたメッセージか。吸血鬼の住む館ねえ、どんななんなんだろ。

「おっ、咲夜のやつが珍しい、ティーカップ忘れてってるぜ」

「明日にでも届けばいいでしょ、今から行くのだからいいじゃない」
祠雷も連れてけばいいじゃない」

また俺だけ蚊帳の外のまま話が決められた……早速行くことになり
そうだなこれは。

スペルカードを作ろう！その後（後書き）

次回から紅魔館編です、変なところあったら指摘お願いします。

ちなみに本編に出てきた攻略本は適当に作ったものです、ソースは
ありませんww

紅魔館へ行こう(前書き)

結構読みづらいかも。まあよろしくお願いします。

紅魔館へ行くころ

俺は今、とてつもない恐怖体験をしている。それは……

「魔理沙！ もうちょイ、もうちょイ速度落とせ！」

「こんなんでビビってちゃ幻想卿最速になれないぜ」

「なる気ないから！ほんとに頼むって！」

「箒に乗った時点であきらめるんだな」

俺は今魔理沙の箒に乗っかっているわけだが、どうしてこうなったのかということ

話は20分前。

「さて、そろそろ行きましようか」

そう言って霊夢は飛び立つが。

「ストップ！俺まだ飛べないから。そりゃあ20mくらいは飛べ

るけどね」

「ああ もう、面倒くさいわね。仕方ないから歩いて行くわよ」

「おい霊夢」

あれ？ 何で魔理沙がここに？

「何であんたが来るのよ」

「こんな面白そうなことほっといたら一生後悔しそうですぜ」

「あんたらしいわね、いいけどこれから歩きよ」

「は？」

「いや、俺が飛べないから」

「なるほど、ならば話は早い、尊に乗せてやるぜ」

尊ねえ、いや、乗ってみたくないわけじゃないけど。

「いいのか？」

「別にいいぜ」

「それならお願いしようかな」

「よし、だったらとっとに乗った乗った」

乗ったのはいいけど仮にも女の子の肩につかまって、とかはど
うもなあ。同性と手をつなぐこともめったにないのに。話すことだ
って。

「覚悟決めなさいよ」

ん？ 今の霊夢の言葉は一体どついつ意味

「落っこちなよ」

そして今に至る。

「おっ、見えてきたぜ」

「だったら落とせ！」

「いけねえいけねえ、今日は図書館じゃねえんだ」

地獄が……終わった。

「祠雷、生きてる、意識ある？」

「なんとか」

「そう、よかった」

改めて周りを見渡してみる、あるのは門だけだけでも。つーかあそこで寝てる人誰？

「美鈴ったらまた寝てるのね」

そう言つて霊夢は美鈴さん？ の額を突つついた。

「……ふああい、！ いや、今はですね寝てたんじゃないんです
その」

「あんたは何言つてんの？ 正気に戻んなさい」

「あつ、何だ、咲夜さんじゃなかったんですか、いや〜びっくりさせないで下さいよ」

「だったら居眠りやめなさい」

「厳しい……あれ？ そちらの方は？」

「あ、神依崎祠雷です」

「私のところの居候」

「じゃああの噂の外来人さんですか」

噂って、もしかして俺のこと結構広まっていたりするのかな。

「あつ、一応外来人です。ところであなたは……美鈴さんでいいんですか？」

「あつ私は紅魔館の外回りを担当してます、紅美鈴と申します」
何か中国人みたいな名前だな。

「何か失礼なこと考えてませんか？」

「いえ、別に。ところで噂ってどんな風なうわさで……」

「ああ、博麗神社になかなか強い外来人がいるって、人里でも広まっていますよ」

根も葉もないうわさが広まっているな、おい。俺のこと見たらがつかりするぜ、きつと。

「で、噂の話はいいからとっとに入れてほしいんだけど」

「そう言えば今日はどうしてここに？」

「咲夜が忘れ物してつたのよ、届けに来たわ」

「は、それは珍しい、咲夜さんもそんなことあるんですね」

そう言つて美鈴は門を開けた、よくよく見てみると紅魔館つてすんげえ立派な建物なんだな、外の世界じゃめつたに見れねえぞ、これ。

「行くわよ、早くしないと片づけちゃうじゃない。」

「何を？」

「何のためにお昼時に来たと思ってんのよ」

「たかるのか」

「何か悪いの？」

いやな予感がしてきた……

「いや、別に文句とかはないけど」

そして俺は美鈴さんに聞いてみる。

「あの、美鈴さん。もしかして霊夢って結構昼飯たかりに来てるんですか？」

「さんなんかつけなくていいですよ、まあそうですね、特に冬場は多いかもしれません」

常習犯か。つーかそれでいいんだろうか、もしや本命はそっちとか。

「あつ霊夢に置いてかれる、それではまた」

「大変ですね、祠雷さんでしたっけ」

そして玄関の前で俺は気づいた。魔理沙がない。いつの間にか行ったのか。

「霊夢、魔理沙は何処行った？」

「どうせ図書館に本盗みに行ったんでしょ」

盗みつて……あいつは何やってんだか、まあ何となく本性わかってきた気がする。

どうせ死ぬまで借りるだけとか言ってるんだろう。

「おい霊夢、勝手に入っていいのか？」

「別にいいのよ、いつつもそうなんだし。咲夜ーいるんでしょー」

「あら霊夢じゃない、今日は何の用？」

うーん、どうもこの突然現れるのには慣れない。

「ほら、あんた忘れ物してったわよ」

「あら、気付かなかったわ」

そういつてまたすぐ消えていく。時間を止めてるらしいが。率直な感想を言つとこの人は従者の鏡だな。苦労してる姿を誰にも見せない、どことなく懂れる。

でも霊夢と話するときには結構普通の話し方なんだ。仕事モードとかあるのかな？

「咲夜、お昼ごはん余ってるんでしょ」

「やっぱりそっちが目的なのね」

うちの巫女にも見習ってほしい。

結局ご馳走になってしまった。おいしそうなものを見るとついっにお腹の音が……
そういう問題でもない気がする。

「おつす祠雷、昼飯は済んだのか？」

魔理沙だ、手に持つてる本は図書館とやらの本か。

「まあ、もう食べたけど」

「よし、ご馳走になるとしますか」

思考回路を見てみたい。

でも図書館……やっぱりでかいのかな？ 興味はあるけど

「霊夢、図書館ってどこにあるの？」

「咲夜にでも案内してもらいなさい」

「それは悪いだろ」

「あら別に構わないわよ」

いつの間にいるんだよ、もう。心臓が悪い。

「いいんですか？ そんな道さえ教えてくれればいいんですけど」

「私がついてった方が話が早いだよ」

「じゃあ私は魔理沙とくつろいでるから、あっ、そうそう今日はここに泊っていくことにしたから」

……話について行けない。

「お嬢様があなたに興味があるらしいのよ、帰ってしまったら後が怖いわ」

興味があるねえ、どんな意味でだろ……ちょっと寒気がしてきた。

「まあそれだけ時間があるんだし、図書館でも探検してきなさい、外の世界の本もあるみたいだし、結構広いから退屈はしないはずよ」
それは魅力的だな。

「案内するわ、ついてきて」

「あつ、はい」

一言感想、広い。

いや、この大きさの図書館なんて外の世界にもねえよ、全部読むのに千年単位でかかりそうなくらいの大量の本。どうやって集めたんだろうか？

「パチユリー様、例の外来人でございます」

「ああ、レミイが言ってた人ね。どっかのコソ泥ネズミみたいなことしないんなら別に好きに見ていくといいわ」

「じゃあ、伝えておきますわ」

「そうね、小悪魔にでも案内させたらどうかしら。もっじき戻ってくることだし」

「わざわざいいんですか？」

「いいのよ、迷子になられても困るし」

「パチユリー様、お茶ですよ」

「ほら、言った通りじゃない」

「あれ？ お二人で何の話ですか」

そう言つて小悪魔はティーセットと抱えた大量の本を置いた。

「これ頼まれてた本です」

「そう、小悪魔、今暇かしら？」

「はい、何か用ですか？」

「レミイが言つてた外来人いるでしょ、図書館を案内してあげて」

「はい、いいですけど」

「じゃあお願いね、レミイのお気に入りらしいから迷子になって全員で探す、なんてことないようにね」

咲夜さんにはここで待つてつて言われたけど……あ、戻ってきた。

「祠雷、もう少ししたら案内してくれる人が来るから、もう少し待つてて」

「案内の人？誰ですかそれ」

「正確には人じゃないけど、まあこの司書ね。それと私に畏まる必要はないのよ。霊夢だってそうじゃない」

「はあ、じゃあありがとうございます、でいいのかな？」

「その方が楽だわ、それじゃあね」

そう言ってどっかに消えてしまった、でもため口ってなんかなあ。

「あっそうそう小悪魔」

「なんですかパチュリー様」

「一通り案内する前に私の所に連れてきてちょうだい」

「わかりました」

ん、誰か来た。

「はじめまして、私はここの図書館の司書をしております、小悪魔

と呼んでください」

……小悪魔ねえ、漫画の世界から出てきたような悪魔だな、羽とかなんか可愛い形してるけど。

「こちらこそはじめまして、神依崎祠雷といいます」

「あの、案内する前に、突然なんですがパチュリー様に先に連れてくるように言われていて」

「パチュリーさん、ですか？ そちらのかたは誰なんでしょうか？」

霊夢とかがちよくちよく名前だしてたけど。

「まあ、私の主だと思って下されば」

「そうですか」

ますますどんな人かわからなくなった気がするけど。その前に人なんだろうか？

「あの、一旦パチュリー様のところへ……」

「別にいいですけど」

「でしたらこちらですので付いてきてください」

「はい」

これは変なフラグとかじゃないよな……突然お呼びがかかるなんて。
なんか不安になるよな、この状況。

紅魔館へ行こう（後書き）

テストが2つの意味で終わりました。

うちの国語の先生に伝説があるんですよ、前の学校で平均点28点のテスト作って保護者から苦情来たっていう無駄に要らない伝説がww80取ればヒーローですよ、ほんとに。

私情失礼しました。

紅魔館編に突入しました。実は咲夜さんファンなんですよ。関係ないです。

もちろんただでは済みません。でも次はいったん主人公のプロフィールとかまとめてみたいと思います。

ですが感想でもあったんですが主人公の家族関係とかはあまり触れないようにお願いします。あとから詳しくわかっていくんで、特に父親との関係は。

回想で少し出てきたと思いますが気になるところがあっても気にしないでください。

プロフィール(前書き)

オリジナルですのぢやあらうしはまよめしはうじ。
とらうかはず。

プロフィール

主人公プロフィールです。

・名前 神依崎祠雷 ・性別 もちろん男です。

・年齢 13歳

・身長体重 155cm 43kg

・特技 木登り サッカー ブラインドタッチ

子供のころから父親に格闘技は教えられていたので柔道、空手、剣道は一通りできます。

プロレス技もある程度は。

・趣味 ガンマニアでほとんどの銃は見ただけで特徴その他が言える。

父親仕込みの射撃の腕前。一通りの実銃は使いこなせる。何気に気に入っているものは設計図まで暗記しているほど。自分好みに改造するのはお手の物。

・外見 目つきが悪いため睨んでいると勘違いされがち、そのせいかクラスメイトもあまり寄りつかない。

問答無用で人を近付けないオーラがあるが本人はそんな気

はない。

顔つき自体はかつこよさで言ったら偏差値55程度。

・性格 自問自答が多い、勘はかなりいい方で本人も自覚している。誤解されがちだが別に冷めた性格でもなく冷静にものを見られるだけ、客観的なところも。

しかし一度取り乱すと戻れないところもしばしば。

空気を読むことに関しては一級品。その場の雰囲気から何も言われなくてもある程度は読み取れる。

・服装 黒い服しかもっていない、それは明るい色が似合わないのを自覚しているため。

ジャージにトレシューは標準装備。

・能力 「電気を操る程度の能力」

電気なら携帯の充電から雷まで。さらには電気信号まで。

本人が気づくのは少し先だが。

光に関してはそこまで複雑には扱えない、せいぜい付属品程度。

理数系に関しては独学で教師をも圧倒する博学で能力も本人とは相性がいい。

スperlカードに関してはまだまだ修行が必要。

弾幕もまるで雷のように動かせるが、まだまだ修行不足。

プロフィール（後書き）

こんな感じですよ。ちなみにですが友人関係はほぼゼロです。

これからどんどん新しいことが分かっていきますので本文の内容だけではありませんが。

次回からは本編に戻ります。

弾幕ごっこですか……（前書き）

紅魔館編の続きです。

流れとかちよっと無茶してるかも。

弾幕ごっこですか……

「パチユリー様、よろしいですか？」

「入って」

小悪魔に連れられてパチユリーという人？ の部屋まで来たが……見かけは普通の女の子だな、パジャマみたいな服装をして本を読んでいる。

「パチユリー様、こちらが神依崎祠雷様です」

「あの、様なんていいですから普通に名前で呼んでくださると」

「ああでしたら私のことも霊夢さんたちとおなじように話しかけて下さい、祠雷さん」

でもさんはつくんだ。まあいいけど。

「もういいかしら」

「あつ失礼しました、祠雷さん、こちらがパチユリー様です」

何か淡々とした話し方だな、俺ってこんな風に見えてたのかな？

「はじめまして、あなたは祠雷でいいのよね」

「はい、こちらこそはじめまして」

「早速だけど少しいいかしら、これが終わったら好きに図書館の中を探検していいから、小悪魔、もういいから後でまた来て」

「はい」

そうやって小悪魔が出て行ってしまった、正直気まずい。

「あの、俺に何の用でしょうか」

「あなた外の世界から来たのよね」

「ええ、まあ」

「外の世界の本で調べ物をしたんだけど、専門用語が多くてね、解説してほしいところとかがあるのよ」

「ああ、でしたら手伝いますよ。どんな本ですか？」

「これとこれとこれなんだけど」

そうやってパチュリーが見せてきたのは、理科関係についての本だった、これなら俺の専門分野だ、確かにいきなり言われてもわからない言葉もあるだろう。お任せあれだ。

「じゃあまずこの本からお願い」

「ああ、まずここですか？ これはですね……」

「そういうことね、ありがとう、もう大丈夫だわ」

「じゃあ俺はこれで」

……待てよ、いつの間にか友達みたいに話してるんだけど、まあこれ1時間話してたらそうなるもんなのかな。

しかし懐かしい、昔は勉強大好きでこういう本でよく勉強したもんだ。

そして本のページをめくっていくと気になる単語が。それは

『電気信号』

これは、もしかして俺の能力で電気信号を操れば動きを封じたりと
かできるんじゃないか？

修行できる機会があったらしてみよう。当分先になるかもしれない
けど。

「もうじき小悪魔が来るから、まってて。」

「わかった」

やっぱり普通にため口になってる。まあ親善の証というところで。

「祠雷さん、おまたせしました」

お、小悪魔が来た。

「じゃあなパチュリー」

「それじゃあね」

そうやって俺はパチュリーの部屋を後にした。

「ずいぶん仲良くなりましたね」

「結構真剣に話し合ってたからなあ」

「うらやましいです」

「そうか？」

「はい、私なんて最初は全然相手にされなかつたんですよ」

そうだったのか、皆いろいろ大変なんだな。

「それはそうとどんな本が読みたいんですか？」

「やっぱり外の世界の本とか」

「じゃあこっちはです、ついてきてください」

気がついたらもう夕食時だったのか、咲夜が迎えに来てくれた。

俺がテーブルに着いた頃にはもう皆揃っていた。

「最後のゲストの登場ね」

霊夢なんか早く食べたそうにしている。レミリアさんって普通のもの食べるんだ、吸血鬼なのに。

「それじゃあいただきますしょうか」

やっぱり今まで食べたことない味だ、霊夢がたかる気持ちも今ならわかる。

「そついえばお嬢様、今日は何で私も一緒なんですか？ いつもは門のところで食べてるのに」

美鈴さんって門の所でご飯食べてるのか、仕事熱心なのかわからん。

「ああ、それはあなたにも関係ある話があるっからよ」

話って何だろう？

「霊夢、あなた祠雷の実力をうちの門番ならいい勝負にはなるかもって言ったわよね」

「ん？ 現にやりあえる実力はついてると思っつわよ」

いやな予感しかしねえ！

「祠雷はまだ素人よ、でも実力を見ておきたいのよ。だから二人の弾幕ごっこを見たいてっわけ」

「え、あの、ちょっとm」

「いいんじゃない」

いや霊夢、簡単にいいとか言わないで。

「あら、面白そうなこと言っつわね」

パチュリー！ 頼みの綱は……小悪魔くらいか。

「そんな、大丈夫なんですか？」

ナイス小悪魔！

「祠雷なら大丈夫だぜ」

……

「私は別にかまいませんけど」

これは……逆転不可だろ。

「決まりね」

場所は紅魔館玄関前、ギャラリーは夕食のメンバー。

「ところで祠雷さんはスペルカードとかあるんですか？」

「あ、5枚ほど」

「うーん、それじゃあ勝負になりませんねえ、どうしましょう」

「スペルカード無しでいいんじゃない？ 5枚はさすがにギリ貧よ」

「それだ！ そうしましよ祠雷さん、そうしたら公平です、いいですよお嬢様」

「別に構わないわ」

「では始めましょうか」

「はい」

しかし、そんなルールは意味がなかった、なぜなら……

「ハア！」

美鈴の上段蹴りを両手をついてしゃがんで避ける、そしてそこからの足払い。

それを美鈴は後ろに避けて、起き上がりかけている俺に強烈な右フックを繰り出した。

俺はその手をつかみ背負い投げへと派生させる。しかし美鈴は途中で俺の手を振りきり地面を転がって距離を取る。

そこへ追い打ちをかけるように踵落としをするが、横によけられ顔面狙いのストレートで返される。

俺はバク宙で後ろに跳びつつ美鈴の拳を蹴って距離を取る。

「やりますね」

「それは俺のセリフだ」

そう、途中から弾幕関係なしの格闘勝負になってしまったのだ。

「うーん、ガチで殴りあったら勝てる気がしねえぜ」

「それは私のセリフよ、あんなに動けたなんてね」

だめだ、やっぱり体力が違う、でも俺だって伊達に鍛えてないぞ！

俺の十八番の決め技をかける、空中回転からの踵落としだ、とはいっても素直に当たってくれるほど甘くはない。

美鈴も着地の隙について正拳突きをしてくる、横に回って回避する、まわってばっかで目が回ってくる。

「咲夜、どう見る？」

「とても13歳の人間には見えませんね、能力抜きに美鈴とやりあえるのは。ただ……」

「手がもう少し長ければもう少し選択肢も広がるのに、もったいな

いわね」

「それでも格闘技に関してはかなりの英才教育を受けていますね。種族を超えた実力を持っていますし、見ていても隙と呼べる隙がありません」

「なかなか面白いじゃない、本当に見込みがあるわ、私のものにしてしまいたくらい」

「だめですよ」

「わかってるわよ」

牽制変わりのパンチを入れる、美鈴はフックで返してきたが読み通りだ。

空を切った美鈴のパンチは体重を大きく前に傾けた。

「隙あり！」

低い姿勢のまま両手をつき、腹に蹴りをれた。

「ッ！！」

苦しそうに顔を歪ませる美鈴に追い打ちの回転蹴り。勝負ありか。

「勝ったわね」

「美鈴も格闘技だったら十分な実力はあるはずですが、手を抜いたわけでもないみたいですし」

「本当に面白いじゃない」

「ううー、さっき食べたご飯全部出しそう」

「疲れた、汗だくだよもう」

「今日はいいもの見れたし、ついてきて正解だったぜ」

「紫も多分どっかで見てるんでしょうね」

「どっかの天狗に隠し撮りとかされてたりしてな」

「あり得るわね」

その後、俺は風呂に案内され、部屋にも案内された。

そして高級ホテルみたいな豪華さでビビって逆にくつろげなかったりした。

そして就寝。

ベットがふかふかだー、とかやってるうちに寝ちゃったらしい。
疲れてたのかな、やっぱり。

ああ、今日も一日大変な日でした

弾幕ごっこですか……（後書き）

フランちゃんは自室待機です。

いや、出したかったんですよ、ほんとは。

まあ次の機会に。

なんとなく次の回の冒頭が見えてきてる方も多いのではないでしょうが。

まあ、テストも終わったので早めに出来上がるとは思っていますが…

…

いろいろある日(前書き)

風邪ひいてもうた、初雪もあったし寒くなってきたからかなあ。

サブタイトルはそのままです、はい。

いろいろある日

『噂の外来人、紅魔館の門番に勝利!』

どうしてこうなった。

「撮られてたのね」

この文々。新聞というものは天狗が発行している新聞らしいのだが。

「この内容はオーバーすぎるだろ」

「半分はでたらめなのは皆知ってるから大丈夫よ」

紅魔館から帰ってきて一息ついていたところの全然好ましくないニクスである。

「でたらめにも程がある」

「いい勉強になったじゃない、この新聞は信じてはいけませんって」

「なんだかさつきからひどい言われようですね」

ん？ 今のは誰の声だ？

「どうも幻想郷の清く正しいブン屋こと、射命丸 文です。今日は

噂の外来人さんに取材に来ました」

……

……

「はあ」

「あつ、今溜息つきましたね、聞きましたよ！」

そこには黒い羽のペンを持った女の子がいた。

「帰りなさい」

「ひどいですよ、お話くらい聞かせてくれても」

「祠雷、こいつの笑顔は営業スマイルだから騙されたらだめよ」

「私の印象どんどん悪くしてませんか」

「よくわかったわね」

いまいち展開について行けてない。要するにこの人は何なんだよ。

「それでお話を聞かせてもらえないでしょうか」

「あの……とりあえずあなたは射命丸さんでいいんですよ、とりあえずお話とは？」

「取材ですよ取材、明日の文々。新聞に載せる記事にするんですよ」

こいつが犯人か。

「あんなでまかせ書いたのはあんたってことか」

「失礼な、ちゃんと現場にいたんですからね、写真もちょうど蹴りが決まったところじゃないですか」

「誤解される書き方を止めて下さい、あれじゃあ俺がとんでもなく強い人みたいになってるじゃないですか」

「はいはい、いったんストップ。今日は何の話を聞きに来たの？話はそこからよ」

確かに、それが先だ。

「ああ、今日はその強さの秘密と、あとはどうしてここに来たかです」

「そして話したことに上乘せされて乗るんだろ、いやです」

「そう言われて黙って帰ると思いますか？」

「俺じゃなきゃだめなのか？」

「もう記事は決めてありますから」

はあ、何でおれはこついうのに弱いんだろ。

「わかりました、もう折れます」

「では早速お伺いいたします」

「いいの？ 祠雷」

「俺は押しが強いのは苦手なんだよ……」

「なるほど、小さい時にお父様から」

「そう、他にもいろいろ仕込まれた」

「それでここに居るのは強くなるためと」

「まあ、そう言うことかな」

今思つとんでもない理由だな。

「お話ありがとうございます」

「へえ、じゃああなた小さい頃から物騒なもん扱ってたわけね」

「まあ小学生のうちから実銃扱ってたしそうなるわな」

「以外に修羅場超えてんのね」

「あんまり触れてほしくないけど」

ちなみに次の日の新聞はまともだった。

それから1週間。

俺は、飛ぶ練習の真っ最中である。まあ射命丸が飛んでるの見たら飛びたくなるのもわかるだろ？ な？

「そうそう、よく飛べてんじゃない」

「あー、何となくコツがわかってきた」

(美鈴との勝負から伸びが早いわね、やっぱり自信がついただけでも違うのかしら)

慣れてくると本当に簡単なもんなんだな。空中回転お手の物、急降下とかもできちゃう。地味に怖いけど。

「これで今度からあんたもお使いにだせるわね」

「最初からそれ目的だろ……」

(これくらいできたらお使いに行かせても食材は安泰ね)

「もしもしあんたは心の声のつもりかもしれないがバツチリ口に出てるぞ」

「ハッ！ しまった」

「何がしまっただよ、おもいつきしさぼる気満々じゃねえか、ここ1週間、弾幕ごっこにも妙に熱心に特訓してくれると思ったらそう言う目的かよ」

「最初に助けたのは誰だっけ？」

「ごめんなさい……(尻に敷かれるってこんな感じなのか?)」

その様子を影から見る人影が一人。

「あやややや、完璧にパシル気満々ですねえ。1枚撮るときですか」

そのあとの射命丸の運命は言うまでもない。

「しかしねえ、祠雷もそろそろ人里に慣れてもらおうと思うわけよ」

「はあ」

「あなたの実力はここ1週間で本当に伸びてるわ」

「そしてその間の霊夢のお茶タイムが増えるわけですね」

「そうそうよくわかったわね」

「言っちゃいますか」

「祠雷もいつまでも独り立ちできないのはいやでしょ」

それはそうだけど俺は何にも知らないのに……

「地図の通りだから、お願いね」

「いきなりは早すぎるだろ」

「親切な人も多いし大丈夫よ」

……恨むぞ霊夢。

どこが地図に書いたとおりだよもつ。さっきから迷いっぱなしだぜおい。

……もしかしてあの姿は？ やっぱりだ、助け舟登場だぜ。

「おーい、魔理沙ー」

「おお、誰かと思えば祠雷じゃねえか、ちよつどいい、用があるんだよ」

「用？ とりあえず買い物手伝ってからにしてくんね？ 迷っちゃつてさ」

「おしわかった。じゃあ先に買い物手伝ってやるから、まずはごんだ？」

「助かったよ魔理沙」

「いってことよ。困ったときはお互い様だぜ」

「そんで用事って何？」

「ついてきてほしいんだぜ、報酬も弾むぜ」

報酬もあるのか、何なんだろう？

「早く行こうぜ」

そう言っただけで飛び立つ魔理沙、けどすぐに引き返ってきて……

「あっちゃー、飛べないんだっけ？」

「ああ、もう大丈夫、なんとか飛べるようにはなったから」

「おお、いつの間にか進化してるぜ、まあとりあえずこっちだぜ」

そう言っただけで魔理沙が飛んでいったのは……魔法の森か。

グズグズしてるとおいてかれそうだ、全速前進！

「……おい、ちょっと待ってー！」

速度ではかありません、はい。

何とかついて行ったらそこには1軒のお店があった。

香霖堂。それがお店の名前だった。

「霖之助ーいるんだろー」

中にはいろんなものが置いてあって何の店なのかいまいちわからないんだが……

「やあ、魔理沙じゃないか、何か用かい？」

「あの話、覚えてるだろ？」

「ああ、ここにある機械を動かせそうな人に心当たりがあると」

「それがこいつだ」

魔理沙と話しているのはメガネをかけた男の人で不思議そうな眼でこつちを見ている。

「えっと君、名前は？」

「神依崎祠雷です」

「僕は森近霖之助、こここの古道具屋の店主をやっている」

古道具屋だったのか。

「それで君は本当にこここのものを動かせるのかい？」

「えっと、具体的にどんなものをでしょうか？」

「とりあえずここに置いてあるものなんだけど……」

「祠雷なら動かせるだろ、電気を使えるんだし」

「もしできたのならお代は弾むよ」

そう言っで見せてきたのはパソコン、テレビ、その他e t cの電化製品だ。これくらいなら動かせそうだけど……

「多分できると思います」

「本当かい！？ だったら手始めにこれから頼むよ」

あれ？ いつの間にか手伝うこと前提になってるような？ まあ別に構わないんだけどさ。

えーと、このパソコンはここから充電できるんだな。

指から電気を出して充電していく、直流交流なんでも来いだけ。

スイッチ、オン。

一通りのものを動かすと霖之助さんは感動のあまり。魔理沙は何がどうなっているのかわからないという顔をしている。

「あの……どうしたんですか？」

「いやー今日はいいもの見せてもらったねえ」

いいものだったんだ、まあ電気がないのも事実なんだし電化製品が動いてるのを見るのも貴重な体験なんだろうな。

「あっそうそう、これはお礼だよ。」

そういつて霖之助さんが渡してくれたのはお金、どんぐりの価値なのかは知らないが。

「すげえ！ こんな大金持ってたのかよ」

「失礼な、僕だって金銭面では余裕があるよ」

「魔理沙、どんぐりの金なんだ？」

「そんだけあつたら2年間それなりの食事ができるぜ」

「僕の長年の夢をかなえてくれたんだ、このくらい軽いものだよ。ここにあるものが動くのを見るのはね」

「じゃあ時間とらせたな、悪かった」

「僕からもお礼を言おう、また暇な時にお願いできるかい」

「ああ、大丈夫です」

ああ、俺こういうことしたら親しくなれるスキルとかあるのか。

「じゃあお邪魔しました」

「いつでも歓迎するから」

予想外の収入があつたな、霊夢を待たせても怖いし早く帰ろう。

いろいろある日（後書き）

文編、こーりん編、成長編の急展開を無理して詰め込んだ回です。

作者に、もう少しゆとりを持ってと期待してもいけません。
文章力分けてくださるのなら別ですけど……

決闘！〜そして永遠亭へ〜（前書き）

すぐに終わるバトル回、もう少し長くした方がいいかも……

なんか淡々としてるし。

決闘――そして永遠亭へ――

「ああ、もう日が暮れてきた、霊夢に怒られるよもう」
帰路が渋る。

「霊夢、宴会開いてくれよ。最近全然ないじゃないか」
話し声が聞こえるな。

「私も暇じゃないの、地底でお仲間と飲んでなさい」

「霊夢がグレた」

「何がグレたですか」

「でも最近少ないわね、あの外来人さんのお世話にしても程があるんじゃない？」

知らない声が2人ほどいるけど、誰だろう。

「霊夢、帰ったぞー」

「あら、ずいぶん遅いじゃない、何かあったの？」

「いや、その前にその二人は誰？」

「ああ、知り合いよ知りあい」

「言い方がひどいわね」

「それよりもこいつが霊夢ぞっこの外来人啊」

「次言ったら殺すわよ」

えーと金髪のお姉さんと角が生えた子供ねえ、幻想郷らしい。

「まずは自己紹介からかしらね、私はアリス、あなたのことは知ってるわ」

周りの人形はどうやって動いてるんだろう？ 気になるとこだけど。

「あたしは伊吹萃香、鬼の四天王だ」

「神依崎祠雷です」

「そんな畏まらなくてもなあ、仮にもこれから決闘するんだし」

ん？ 今さらりと恐ろしいこと言っただような。

「あの……決闘って何？」

「強い強いと言われてる奴と戦わないわけにはいかないからねえ、あつもちろん弾幕ごっこじゃないからね」

「おい霊夢！ 何か言ってくれ！」

「あら、いろいろお酒も土産にくれたんだしいんじゃない？」

買収されやがった。

アリスさんは笑顔でこっち見てるしどうしよう。打つ手なしかよ。

「大丈夫、医者になら運んであげるから」

「俺の中では十分それでも手遅れだよ！」

「霊夢、あんまり無理いってもよくないんじゃない？」

「大丈夫、美鈴に勝ったやつなんだから」

「そう、ならいいけど」

良くありませんから、もう少し粘ってほしかった。もういい、死亡フラグは十分に立った。

「そつだ、とりあえず買ってきたもの置いとくから」

ああ、なんでこんなに冷静でいられるのか。俺の七不思議。

遺書書いておけばよかった。

「よろしくね、祠雷」

「ああ、鬼って言うくらいだからすんげえ怪力なんだろう？ もう死んだ」

「あら、これあんまり日の当る所に置いておいたらだめなんじゃない？」

「あら、忘れてたわね」

「上海、おいてきて」

「シャンハイ！」

人形に命令したらやってくれるのか、便利そうだな。その調子にこの勝負までどっかに運んで行ってもらいたい……

「じゃあいくよ」

「畜生、なるようになれ！」

宣言したとおり、萃香からかかってきた。

萃香のパンチをかわすと地面に突き刺さる。地面に大きな穴があいているところを見ると相当な力であるう、まともに食らったらやっ
てられない。

隙をついて蹴りを入れてみても何にも動じない、本気の一撃でないと通用しないか。

迫ってきた萃香の横をくぐって後ろからふくらはぎを蹴り飛ばす。軽い膝カックンだ。

そのままもう一発、というわけにもいかずすぐに立て直される。

フック、回し蹴り、叩きつけるような連撃だけど……

俺には全部見えてんだよ！

萃香のパンチを腕を全力で引くことで受け止め、衝撃をすり抜けさせる。これを食らったやつは面食らって動揺するもんなんだけど……

決まった！ 驚いた顔してる。そこで腹に蹴りあげを入れる。続けざまのひじ打ちで叩きつけ……られない、さすがに甘くない。けど収穫はある、萃香がいくら怪力だからって当たらなければ意味がない。そう、あくまで当たらなければの話だけだ。

「なかなかやるねえ、それでこそ腕が鳴るってもんさ！」

「そいつはどうも」

「本気で行かせてもらおうよ！」

ツ！ 今までののがお遊び程度に感じ入るくらいの速さ、比例して威力もさつきまでの比じゃないだろう。

ブレインシェイクの一つでも決めさせてもらえればいいんだが……
というかそれぐらいしないと効果がなさそうだ。

中段蹴り、受け止められる。顔狙いのフックをマトリックスで流す、その手を掴んで投げ飛ばす。飛び蹴りで追い打ちしてもダメだった。素早く起き上がって回避される。

「あら、本当に強いわね」

「それよりおいしいわねこれ」

のんきに饅頭を食べている。

「仮にもあんた同居してるんだから応援ぐらいしてあげたら？」

「あいつは大丈夫よ、そう簡単に死にはしないわ」

「そう言う問題なのかしら」

「それに萃香も能力使ってないでしょ、そのくらい熱中させる力があるのよ。」

「なるほど」

拳同士がぶつかりそうになる、インパクトの直前でパーに変えて横に払う。

萃香が右手を大きく開く不格好な格好になる。腹に蹴りこむと以外に吹っ飛んで行った。

それでも全然ダメージは通っていないようだが。

しかしもう体力的にもう限界が近付いてきた。

その結果は甘い一撃を繰り出す。完全に胸がガラ空きになる。

そこを見逃してもらえないほど甘くはない。

華麗にパンチが決まって……

「ッ！」

声にならない悲鳴が出る、そのまま遠くに飛ばされる。

だめだ、もう意識がもちません。ああ、名前を呼ぶ声が聞こえる……

「やりすぎよ萃香」

「悪い悪い、つい熱くなっちゃって」

「これは永遠亭に直行かしらね」

目が覚めると博麗神社ではなかった、ここはどこなんだ？
部屋は割と散らかっていて、よくわからないものもたくさんある。

今の状態を一言で表すと、全身が痛い、打ち身でもしたんだろうか？
萃香に吹っ飛ばされて相当強く打ったし。治療の跡があるけど、
とりあえず部屋の外に出てみよう、誰かいるかもしれないし。とい
うかなんでこんな所にいるんだろう？

ガラッ。

障子をあげようとした時に鉢合わせしてしまった時の気まずさを体
験したことがあるだろうか？ 俺は現在進行中で体験している。

「あら、目が覚めた？ 本当にタフなのね」

「あなたは誰ですか？」

「八意永琳、ここで医者をしているわ。あなたのことは霊夢から聞
いているから」

「じゃあこの治療の跡は……」

「私よ、別に気にしないで。霊夢とは面識もあるし」

「はあ、それより霊夢は？」

「ご飯食べてるけど」

「心配もなしか」

まあいつものことだから別にもう気にしなくなってきたけど。

「それよりあなたも起き上がれるなら何か食べたら？」

うーん、霊夢とも親しいみたいだしお言葉に甘えましょうか。

「じゃあ、お願いします」

そう言って通されたのは居間のような所で、霊夢が堂々と食事中だった。

「あら、起きたの」

「大丈夫もなしか」

「失礼ね、誰がここまで運んであげたと思ってるの？」

何となく予想してた答えが返ってきた。

「ほら、あなたの分も用意してあるから」

「あっ、ありがとうございます」

食事が終わると診察室に通された。

「一通り見たけど大丈夫そうね、しかし鬼の一撃を受けてそれなんて、あなたなかなかタフね、本当に」

「ちゃんと受け身は取りましたから」

そう言う問題でもない気がするが。

「まあとりあえず痛み止めとか渡しておくから。うどんげ、持ってきてちょうだい」

そう言うって奥のほうに呼びかけるとうさ耳ブレッザーの女の子が出てきた。

「紹介するわ、私の弟子の鈴仙・優曇華院・イナバ。みんなはうどんげって呼んでるわ。」

「師匠、初対面の人にあだ名を紹介するのは……まあとりあえずよろしく願います」

「こちらこそ、神依崎祠雷です」

そのあとはほとんど雑談になった。

泊まる部屋まで用意してくれたらしい、夜遅いし助かる。

「じゃあ案内してあげて」

「はい、こっちですよ」

通されたのは和室だった。建物に比例する広さで一人では持て余す

くらいだ。

「じゃあ私はこれで」

いつの間にか俺までうごんげって呼ぶようになっちゃった。まあ気にしないでおう。

「眠い、今日は早めに寝とくか」

永遠亭での1日目が終わった。

決闘！〜そして永遠亭へ〜（後書き）

もう少し一つの話長くしようかな？
的なことを考える作者。

次回も永遠亭です。もこたんの口調は原作口調でいいかな？
たぶんそうなります。

宴会デビューだぜ！（前書き）

すいません、もこたん出す的な感じ出してましたが出せませんでした。

また今度です。

宴会デビューだぜ！

「霊夢なら昨日のうちに帰ったわよ」

「あの薄情者……」

いつものことだし気にしないけど。ああ、このセリフ何回目だった？

「ところで今暇？」

「暇じゃないわけではないですが」

「確かにそうね、悪いけどうごんげを呼んできてくれない？ たぶん部屋にいると思うから」

「部屋の場所知らないんだけど……」

「廊下の突き当りの部屋だから、間違えることはないと思うけど」

廊下の突き当りね……

「うごんげ、入るよ」

「あれ？ 部屋教えたって？」

「永琳が教えてくれた」

「なるほど、入っていいですよ。しかしあなたもなじむのが早い…
…出会って2日で師匠を呼び捨てですか」

なじむのが早いねえ、外の世界ではそんなこと全然なかったけどな
あ。一方的に避けられてる感じもしたし。

「それより呼ばれてるけど」

「ああ、それで」

部屋に入ると真っ先に目に入ったものがある。それは……

「この銃本物だよね、どうしたの？」

「それは昔私が月にいた時代のもですよ、というか見ただけで本
物かどうかわかるんですか」

「いや、雰囲気です」

しかし月にいたねえ、兎なんだし幻想郷では普通のことなのかな？
どっか聞いてほしくないオーラもあるし、スルーするか。

「聞かないんですか」

「聞いてほしくないんだろ」

……やっぱり凶星か。気まずいし話題を変えるか。

「外の世界では見ないタイプだ、形からするとアサルトライフルか」

「詳しいの？」

「7つの頃から実銃扱ってる」

かなり微妙な顔されたな……

「ちょっと触らせて」

「いいけど」

わざわざ投げてよこしてくれた、マガジンを抜いたら弾は十分に残っている。

「撃ってみていい？ 実力には自信があるんだ、こっちのものも使ってみたいし」

「別にいいですよ、私にはもう無用のものです」

「何か的になるもの無い？」

そういうとうどんげは机の中を探り始めた。

「余ってる仕切りが」

15×30くらいの木の板だ、久しぶりだけどなまってるのかな？

思いっきりその板を空に投げつけた、うどんげは驚いた顔をしてる

けど気にしない。

その板をイメージしたとおりに撃ち抜いて行く……うまくいったか？
落ちてきた板を手に取る、成功だ。

「ほら、兎だ兎」

兎の顔の形に形を抜いた。若干ずれてる所もあるけど気にしない。

「年齢ごまかしたりしてない？」

「いや、まだ二十歳にもなってないひよっこだよ」

「私何年もかけて練習してもそんなことできないのに、これが才能とか……」

「俺だってスパルタされてきたんだから変わらない……そういえば
永琳」

「！ いけない、師匠のところに行かなきゃ」

どたどた走って行った。そんなに急ぐ必要があるんだろうか。

永琳と二人きりの診察の時間だ、とはいってもほとんど必要ないらしいけど。

「随分と立派な腕をお持ちね」

「見てたのか」

「ええ、新聞に書いてある通りの射撃じゃない、兎の顔なんて」

「これでも外の世界には俺モデルもあるんですよ」

「なかなか凝ってるのね、紫にでも頼んだら持ってきてくれるんじゃないかしら」

「誰ですかそれ？」

「あら、まだ面識はないの？ まあ明日の宴会に来ると思うから、たぶん会えるわ」

「宴会？」

「最近はあまりないけど、博麗神社では結構頻繁に宴会があったのよ、3日に1回くらいね」

宴会って、萃香が言ってたのはそれか。てか明日なのか。

「じゃあお世話になりました」

「気をつけてね」

ああ、懐かしの博麗神社……ちと大げさすぎたか。けど何とか帰ってこれた。

「ただいま霊夢」

「あら、一人で来れたのね」

「心配するんなら待っててくれよ」

「いやよ、面倒臭い」

やっぱりそうなるのね。

「そつだ、明日の宴会のことは」

「永琳から聞ってるよ」

「もう買い出しとかは終わってるから、あとは会場作りね」

「会場作り？」

「普段はそんなことしないんだけど、プリズムリバーが来ることになったの」

「プリズムリバー？」

「外の世界で言う音楽団みたいなものね」

幻想郷にもそんなものがあるのか。

「ほんと何で来ることになったのかしら？ 不思議でたまらないわ」

俺に聞かれても困るような気がする。

「まあうだうだ言っていないで始めましょう、宴会は明日の正午から、それまでに作るわよ」

つまり昼間からどんちゃん騒ぎするってことか、さすがに俺だって慣れてきた。週間とかって怖い。

というか皆未成年だよなあ。俺は赤ワインとかちよくちよく貰ってたから飲み慣れてるけど……でもそれもおかしいんだよなあ。

「よし、とりあえず日が暮れる前に終わらせよう」

結局夜までかかるんだけどな。

次の日。

一番乗りは魔理沙だった。

「おっす、今日は早めに来たぜ、いっつもそうだけどな」

「まだ3時間もあるぞ」

「魔理沙は早めに来てお茶でもたかる気なのよ」

霊夢さん、嫌がってるけどあんたも同じことしてるんだよ。

「まあ、とりあえず時間まではゆっくりしようぜ」

ここは図々しい連中が集まるところなのか。

日が昇るにつれて集まってくる人数は比例してくる。
今は30人くらい、見知らぬ顔も増えてきた。

「プリズムリバーも準備ができたし、そろそろ始めましょうか」

霊夢が宣言したら5分とたたないうちに騒がしくなった。

「祠雷、お前も飲めよ」

萃香に絡まれた。

「俺だってこれから飲む、残念だけどワインしか飲めないからな」

「贅沢だねえ、まあ1本くすねてあるから飲みなよ」

「悪いな」

騒がしいのも悪くない、外の世界でも楽しめていたら俺はもう少し違っていたのかな？

「祠雷、プリズムリバーの演奏がが始まるぜ」

萃香に言われて気が付く、昨日作った簡易ステージに3人の人影がある。

「しかし魔理沙も手当たり次第に声掛けてるな」

「魔理沙が連れてきたのか」

「お代は酒と食べ物らしいぜ」

「いろんなところから食べ物が集まるからな、魅力的に映るのは確かだろ」

「そうだ、この前は大丈夫だったのかい？」

「今頃か、まあ永遠亭の治療が良かったのかもしれないけど、五体満足さ」

「それは良かった」

プリズムリバーの演奏が聞こえてくる、確かに呼んで聞く価値は十分にあるな、さすがは幻想郷、というのはあまり関係がないか。

すると萃香がきよろきよろし始めた、そして何もないところに向かつて突然……

「紫、隠れてないで出て来い」

「おい、そつちには誰もいな」あら、ばれちゃった」本当にいた！」

「あれだけ気づけオーラ出しておいてそれはないだろ」

「まあいいわ、用があるのはあなたじゃないの」

誰だこの人は？萃香の知り合いか？

「はじめまして、私は八雲紫。一応あなたの恩人なのよ。祠雷さん」

この人が永琳の言っていた紫さんか。しかし恩人とは……？ とうか俺の名前も知ってるのか。

「あなたが幻想郷に来た日、私はあなたを見つけた。能力もちだったしなかなか可愛い顔してるから、霊夢に助けるようにそそのかしたのよ。彼を助ければ後々いいことがあるってね」

それつまり霊夢が現金なやつってことじゃあないのか？　というか可愛い顔って言われたの初めてかも。

「まあ、とりあえずお礼は言ったほうがいいのかな？」

「そんなものいらないわよ、それよりもお願いを聞いてくれたほうがありがたいんだけど」

「祠雷、ろくな願いじゃない確率のほうが断然高い、裏があるかもしれないから気をつけるよ」

「まあ、今は宴会を楽しみましょう。終わり次第神社の前で待っているから」

「待っているではないんじゃないかな？　それは。もろ目に入るところじゃねえか。」

「まあ今はせっかくの宴会を楽しもうか。」

「夜も更けた頃、俺&霊夢と紫が向かい合っているという外の世界ではかなりシニールな光景になるであろう情景である。」

「で、祠雷にお願いがあるってのはなんなの？」

「ええ、ちょっと外の世界に一緒に来てほしいのよ」

宴会デビューだぜ！（後書き）

次回、外の世界へ！ お楽しみに。

主人公の射撃の腕前は相当あります、俺モデルというのは祠堂が自分でカスタマイズしたチーと性能の銃です。ただ曲者ぞろいで素人どころか並大抵の人は使いこなせない代物です。

近いうちに出すつもりです。これで皆さん出すタイミングがだいたい分かると思いますけど……。

あとタグに主人公若干無双とありますがそれはまだまだ先のことでございます。

能力的にももう少し……いやかなり目覚めてからですよ。

外の世界で（前書き）

かなり現代ものになってます。

次からまともになるでしょう（天気予報風に）

外の世界で

「外の世界？」

「ええ、外の世界はあなたが一番詳しいでしょう、まだこっちに来たばかりだし」

「紫、なんか裏があるんでしょう」

「ないわよ、もちろんタダでは言わないから」

「タダでは言わないと言われても……危ないことはしたくないしまだわからない。」

「あなたの宝物をこっちに持ってきてあげてもいいのよ」

「宝物ってまさか……」

「ええ、あなたが自分好みに改造したものが」

「乗った！」

「切り替えが早いわね……」

「あら霊夢、あなただってお饅頭1年分あげると言われたら食いつくでしょう、同じよ」

「そんなもんね」

饅頭1年分でも引き受けるのか、本当に食べ物に関する執着心があるといえますか……

「そうだ、俺は何をすればいいんだ？」

「まあ順番に説明するわ、まず最近外の世界の妖怪たちが組織化してきているのよ」

「外の世界にも妖怪はいるのか」

「ええ、もちろんいるわ。もともと幻想卿ができる前は外の世界で暮らしていたんですから」

「確かにそうだな」

「まあそいつらが厄介なことをしてくれているわけよ」

「厄介事？」

「ええ、それも何の偶然かわからないけどあなたの住んでいた町でね」

「霊夢も無関心ではいらなくなつたようだ、しかし俺の町で起きている？ そんな話聞いたことがない。」

「あなたも知っているでしょう、連続通り魔事件。少し調べさせてもらったけれど、あなたの唯一の親友が第一被害者みたいね」

「……俺に声をかけたのもそれが理由か」

その事件については俺が一番知っている、俺が幻想入りする前の約2か月前から始まり、被害者は10人を超えている。周りが山なので俺の町はある程度隔離されているから、直ぐに見つかってもおかしくない状況で犯人は見つかからない。

「全員の手口が違うことは確認済みよ、彼らはそんな大所帯にも関わらず、私も見つけることが出来ないくらい隠蔽にかけてるわ。あなたは街の様子を一番知っている。隠れ家になりそうなところの目は星は付くでしょう」

「要するにあんたは妖怪の存在がばれるのと、こっちの脅威になるのを恐れている。それでいいのかしら」

「まあ一番の目的はそれかしらね、被害者を出したくないのはここにいる小さな復讐者さんの思いでもあるでしょう」

(私としてもね……)

「まあ、一緒に来てくれるんでしょう」

「あそこまで挑発しておいて言うセリフか？」

「あら？ 何のことかしら？」

さつき霊夢に説明してもらった通りの人物だ。

「乗ったよ、復讐者にでもなんでもなつてやる。俺だって仇打ちに走るくらいの友情意識はあるさ」

「向こうのあなたとはだいぶ違う印象ね」

「勝手に勘違いしてたのは他の奴らさ」

(本当に彼にそっくり、あながち外れてもいないのかしら)

(私と初めて会った時と全然違う。これが本当の祠雷なのかしら?)

霊夢の素朴な疑問は当たらずとも遠からず

「それじゃあしばらく借りるわね」

「ちゃんと返してね」

「心配しないで、あなたのものを取ったりしないわ」

「誰があんなもの所有物に置くか！」

「あんなもの扱いされた……」

「しかし、あなたは私を胡散臭がったりしないのね」

「信用しちゃだめだけど存分に頼って大丈夫って言われたからな」

「霊夢らしいわねえ、さりげなく傷つくこと言ってくれるじゃない」

「そついえば紫は？」

「あら、お目覚めかしら」

「いきなり後ろから抱きつくのは女としてどうなんだ？」

「つれないわね」

「ここはどこのホテルだ？ 俺はこんな建物知らないぞ」

「新築の安物ホテルよ、あなたは高級ホテルよりもこっちのほうがいいでしょ」

「何で俺の趣味を知ってるんだか」

「秘密よ」

しかもこの匂いは風呂上がりか、まあここまで来たらどうせ俺に色仕掛けが利かないのも知っていると思うんだけど。

「それよりもどうやって妖怪どもを探すんだ？」

「襲う瞬間を狙うのがベストなんだけど、こっちから仕掛けるわ。昼はどうせ隠れていると思うから日が暮れてからが勝負。あなたが知っている限りの人気のないところで拠点として使えそうなところを片っ端から探るの」

「襲う瞬間だったら確実なんだな？」

「妖力は絶対に隠せないはず、けれども確証は絶対にない。それに全員で来るとも限らない」

（それに私の予想があっっていれば相手は……そんなへまをするとも考えられない。）

「そうか、一人二人犠牲になってもらう方向で検討しても無意味なんだな」

「あなた、本当に人かしら？」

「闇雲に探しに行つて仕留められない、それプラス犠牲者が増えるよりはそっちのほうがいいさ」

「小を捨てて大を取る、あなたらしいと言えばそうかもしれないわね」

しかし、何でこいつは俺のことを知っている？

「あなたは顔に出やすいのを自覚したほうがいいわ」

「そうなのか」

（まるで彼と同じ、本当にそうなのかもね。疑問は確信へと確実に傾いているわ）

「とりあえず今は戦力を増やすわよ、あなたの家に案内して」

俺の家？ どういうことだよ。

「何で俺の家なんだ？」

「あなたは能力よりも自分の得手で戦うほうが良くなって？」

……理解した。

「妖怪に銃は効果がないと思うが？」

「私が妖力を込めれば、どんなものでも魔法の道具に早変わりするわよ」

なるほど、それなら頼む価値もあるかもしれない。

しかし何で俺のためにそこまでするんだ？ 何か裏があるとしたか思えないけど今は素直に話に乗っておくほうがいいか。

それに向こうに戻っても使えるなら……

「弾はどうする気だ？」

「河童に頼めばマガジンごと作ってくれるわよ。設計図を見せたら楽勝の一言で返されたから」

「どこでそんなもの手に入れた？」

「気にしてはだめよ」

「そこまでできるんなら俺はいらない気がするけどな」

そんな奴だと思っておこう。

「さて、話がわかったならさっさとあなたの家に忍び込むわよ」

「ちょっと待て、今日は何曜日なんだ？」

「木曜日」

「だったら夜まで帰ってこない、正面突破で大丈夫だ」

「なら正面突破するわよ」

「でもこの時間に子供がうるつくと怪しまれる、それに俺を知ってる奴に出会つと厄介だ」

「なるほど、だったら直接送ってあげる。準備はいい？」

「侵入成功ね」

「スキマって便利だな」

しかし俺がいなくなつてから何一つ変わらない部屋だ。本当に何もかも。

そしてこのクローゼットの中に作つてある隠し部屋（家族公認）もそのまんま。

親父がオーダーメイドしてまで作ってくれたロングコートもそのまんま。

これに関しては本当に感謝している。俺に銃という世界で生きさせてくれたことに関しては……

「さあ、あなたが使うもの全部持ち帰るわよ」

「その前に着替えたいから一回出て行ってくれ」

「あら、その格好も似合っているわよ」

「服にも細工してあるものがあるんだよ」

「なるほど」

ずいぶん素直に出て行ったけど……

「覗くなよ」

「覗かれないんならもう少し大人になっけてきなさい」

「もう大丈夫、送ってくれ」

「あら、随分と印象が変わるわね」

「防弾仕様なんだからしょうがないだろ」

今思い返すと何であるのかわからないけど。

「さあ、あれだけの量なら時間がかかるわ、早めに帰りましょう」

久しぶりのワルサーWA2000の感触が懐かしい。

しばらく手を当てるだけで済んだらしいんだけど本当に効くのかどうかはやってみないとわからない。

他にもいろいろこれからお世話になるだろう、実際にこういう場面で使うことになるとは思わなかったけど本望と言えば本望かもしれない。

暗視用に切り替えとくか……

「しかし、あなたもこんなもの好きになれるのね。やっぱり男の浪漫なのかしら」

「知らないね、ただ自分の片腕のように感じるだけだ」

「本当に好きな証拠よ。ほら、もうひとつ」

S&WM500（3点バースト）を渡された、1発1発の威力と反動がそのまま、3点バーストを実現した俺の努力の集大成である。

もちろんポンポン打てるような代物じゃないが。そんなことしたら
手首おかしくして病院行きになる。

「これで終わりだな」

「ええ、夜まで待ちましょう」

外の世界で（後書き）

さあ、主人公の銃がどれだけおかしいものか、好きな人ならすぐにわかると思います。片方はまともですけどもう片方は明らかにおかしいですww

え〜と、読んでるうちに多分引つかかるところがあるでしょう。

今回はわざとです。狙ってますから悪い点には書かないください

（汗）

まあ紫が目的を素直に全部話すかってところです。

活動報告に質問板を用意したので何か気になるところがあれば其方のほうに。

銃の解説なんかも頼まれれば軽くやります。

次回からバトルに入ります。銃もたくさん出てきます。でも解説は用意するので大丈夫です。

殴りこみ（前書き）

遅くなりました、すいません。

今回、いつもよりは長いです。1・5倍くらいあります。

まあ今回は描写不足が致命的になるところも多いのできちんと確認してたりします。遅い理由には含まれています。決して言い訳ではありません。

殴りこみ

風が冷たい、自分の相棒が少しだけ音を鳴らしている。今はこの音が何だか頼もしい。

夜、ホテルの屋上からスコープで奴らを探す、傍から見れば暗殺犯みたいなことをしてのではないだろうか。こうしている間にも知らないところで事が起きているのかもしれないけれど。

ただ暗闇を闇雲に探しているわけではない、俺がこの町で人気のないところを片っ端に探す。地理に詳しくなければできない。子供のころの町中かくれんぼ（範囲は町全部、要するに狭い町だからの芸当である）でこの町は1日中歩いてるリーマン以上に詳しいつもりだ。

「見つかった？」

「また外れらしい」

この作業を延々と繰り返すとすると正直つらい、見つけてしまえばこちらのものらしいけど本当にそうなのだろうか。

ワルサーWA2000、どういうものかわからない人はこいつはライフル銃だと思ってくれればいい。後期型なのでフラッシュハイダーもちゃんとしている。これはとりあえず射手に優しいものだということだ、発砲音で耳を傷めることもない。

改造して、製品版と違うのはスコープに暗視用があることくらいだ。まさかこんな場面で役に立つとは思わなかった。というかだれが思うか。

「紫、わかってるな」

「ええ、妖力を見つけたら距離と方角を言えばいいんでしょう」

幸い高いマンションがないため死角があまりない。これは好都合である。

1日目で見つければ苦労はしないが、早く見つかるのも問題な気がするな。

あれから3時間、俺だけ緊迫、紫はなんら変わらない。
今はその精神力がうらやましい。

「……来たわ、距離は2キロ半、北東。赤と茶色のマンションのあたり」

「了解！」

……見つけた、人型か、でも俺だって区別くらいはできる。ただ近くに人がいる。

狙いは人間の急所でもいいのかな？ 面倒だから頭を撃ち抜くことにする。

「当たれ！」

発砲音が夜空に響く、弾道は風もない空間をまっすぐに飛んでいく。音よりも早く飛んでいく、音が聞こえてからじゃ間に合わない。自分の腕を

……当たった！ のはいいけど完全に仕留めたわけじゃない。けどあたりを見回すあたり効果は十分にあるのだろう。

もう2発当てても結果は変わらない、まあ足取りフラフラでもう少しでしとめられる気もするけど。

「当たったのはいいけど仕留められてない、直接殴ろう」

襲われている人も心配だ。でももうそんな余裕もない雰囲気だな。案外小物か？

「まって、泳がせましょう」

……理解した。

「見失わずにすむか？」

「あら、追いかけるのはあなたよ」

……俺が目になるのか。とりあえず。

「わかった、ついてきて」

「期待してるわよ」

スキマの便利さを痛感する……待てよ？ 別に俺いらんない気がするけど。

まあ理由があるんだろう。

向こうも移動し始めた、鬼ごっここの始まりだ。

空に向かって飛び出す、全速力でなきゃ追いつけないだろう。しかしスコープ覗きながらも追いかけていられるのは傷が深い証拠であろうか。

一番心配なのは素直に帰ってくれるかどうかだ。

（奴にとっては正体不明の相手なんだ、逃げることに専念すると思っけど……）

結果としてその心配は杞憂に終わる。

「計画通りね」

俺でもわかる、妖力こそあまり感じられないものの大量の数がある。無駄に緊張してくる。

場所は山の中の豪邸、もはや都市伝説化したくらいのものである。何故かしら嚴重に封鎖されていると一部の心霊マニアには知れ渡っ

ているらしいけど詳しいことは知らない。

ただ、雰囲気はやばい。なぜか変換できないとか言ってる場合じゃない。

これは心霊スポット扱いしても文句は言われないうらう。現に妖怪がいるんだし。

「この中にいるんだな」

「ええ、さあ。夜が明けないうちに終わらせるわよ。朝になったら面倒なことになるし」

（まさかこんなに早く見つかるとは思わなかったけど、しかしここまで上手くいくのもなにか怖いわね。まるで必然だというように）

「能力も惜しみなく使いなさい。じゃなきゃ死ぬわよ」

「この年で死ぬのは御免だ」

さあ、突っ込むぞ。

中は殺風景なつくりだ。

早速気付かれたらしい、戦闘開始だ。もう少し落ちつけよお前ら。

弾幕ごっこなんかじゃない本気の殺し合い。背筋を何かが走るが気にしない。焦ったやつから死ぬのは最早お約束だろう。

「別れましょう、私は右」

「俺がどうなってもいいのかよ……まあいいけどさ」

こういうときには弱いほうにボスが来るんだよ、まあ大抵助けは間に合うフラグも立つものだけどここは現実だしなあ。

「生きてまた会いましょう」

2人はそれぞれ違う方向に飛び出す。せいぜいあがかか。

俺のほうについてきたのは4人、面倒なので何人と数えることにする。人型だし。

俺のほうが弱いと踏んだ奴らか。挟まれると面倒なので先に倒すことにする。

もちろんここでやられるパターンもあるだろう。

「ハアアアアッ！」

体中から電気を放出する、決して無差別ではない。きちんと狙っている。そうしないと大惨事だしね。多分そのうちそんなこと言っただけならなくなると思うけど。

1人撃ち落としたか。でも言い換えれば1人しかでもある。

3対1の分の悪い勝負ではあるけれど従うしかない。

2人が飛びかかってくる。避ける、振り向く、電撃、避けられる。残りの1人が不審な動きを見せるけどかまっている余裕なんてない。まずはこの二人をなんとかしないと

何度か打ち合いが続く、相手方も本気で潰しにかかってくるようだ。

1人の足を掴んでもう1人に殴りかかる。そこで遠くの1人が動き出す。

俺の行動を制限するように飛んでくる、おそらく妖力を使って作られているであろう針。

しかし同士打ちの気配はない、まるでお互いを信用しているように……そうか、こいつらは連携が取れているんだ。お互いに信用しつつて相手を確実に追い詰める。

2人の相手で手一杯なため、背後に迫る気配を頼りに避けるしかない、こんな綱渡はやっているこつちが一番ひやひやする。正直今現在も死ぬかもしれない。

知らないうちに負の連鎖に引き込まれるわけか。紫は大丈夫だろうが自分が危ない。

不自然に空いている逃げ場は罠ではなく1人欠けている結果であるう。つまり潰せば弱くなる。けれどもそろそろ他の連中が来てもおかしくはない。

確実に各個撃破するしかないのか……

まず接近戦の片方を狙って連撃の手を止めさせよう。

まずはこの針をなんとかしなければならぬ、一瞬だけでも攻撃を止められたらペースはこっちのものになる。おそらくほんの少しの間だろうが

「ッ！」

考え事をさせてくれる程甘くはない。手っ取り早くけりをつけよう。思いついたのはスペルカード。

スペルカードを取り出し高々と宣言する。

『光撃「スタンフラッシュ」』

閃光

それとともに襲いかかる音と風圧。

弾幕ごっこ以外の時にスペルカードを使うのは初めてだが、殺傷能力もある凶悪なものに変わるらしい。ためらっていたら死ぬのは自分であるから何とも言えない気持ちにはなるが。

しかしひるませるのは十分な効果があった。3人そろって攻撃の手を休ませる。

まずは針使いに高圧電流をたたきこむ。次は近くでもろに閃光攻撃を浴びた1人。

最後に残りだが……残念、ギリギリで立ち直って仕留めそこなったけれどもあわてて避けたから隙だらけで笑えてしまう。容赦なく飛び蹴りを入れて床に沈め。止めをさす。あっという間に3人沈めた。

「ふう、最初からこうしておけばよかった」

今になって少し後悔、まあいいけど。

「しかしこれだけの騒ぎがあつて全然他の連中がこないな」

それは紫のほうにほとんどの勢力が引つ張られているからであるが
祠雷には知る由もない。

「これは拍子抜けするかもしれない……！」

噂をすれば何とやらというが本当に新手が来るとは。

通路に身を隠す、来る方向は大体分かる。懐からM500を取り出す。

不意打ちでこれを喰らえば妖怪といえどただでは済まないはずだ。

あの後紫に一番上手くいったとまで言われたんだから。

このS&WM500は注意書きにでも「人間の限界に迫ったスペック。安易にこの銃を撃つた場合、射手の健康は保障できない」と書かれた。いわばモンスター（俺解釈）である。

撃つと手の中で何かが発射した感覚がするというがまさしくその通りであんまり調子に乗っていると手がしびれてとんでもない目にあう。しばらく字が書けなくなる人もいるらしい。しかしその分威力は世界最強と言つていいだろう。

ただ俺はこれを3点バーストにするといふかなり馬鹿なこと……つまり3連射であり言い換えれば無謀なことをしている。装弾数はもとも5発なのを12発まで引き延ばしている。その分巨大化は免れないがそこは気合いである。

良くわからない人はロケットランチャー（小型版）的な感じで見れば大体は会っている。

更に要約するとすげえ威力、でいいだろう。

まあ隠れて射程距離に入ってくるのを待つ。

足音が聞こえるあたりよほど警戒はしていないのだろうか？　しかし複数人であることはわかる。まさか油断している？　だとしたら器が小さいな。

しかし感じる気配からはさっきよりは強いのが俺みたいなた素人でもわかる。やはり奥に行くほど敵が強い法則はここにも通じるらしい。

軽い騒ぎが起きている、どうやらさっきの死体を見つけたようだ。

少しは動揺するかと思っただが逆効果らしい。しかし声の聞こえ方からしてもう近いようだ。

3 2 1で飛び出そう。 3……2……1……0！

GO！

飛び出して目に入ったやつを片っ端から撃ちまくる。

マガジンを捨て、新しくする。

畜生、全部打ち終わったのはいいが手がジンジンする。これじゃあしばらく格闘も銃も使えない。今更だけどやめておけばよかったかもしれない。

しかも更に後悔することになった、そう。人数がなんと……

「9人もいるのかよ！」

よくこんだけいなから紫に見つからないな。なにかトリックでもあるのだろうか？

しかし出てしまった以上戦わないわけにもいくまい。あくまで被弾

した5人を覗く9人だ。

もしかすると5人減らせたのはかなり上々なのではないか？

まあとりあえず相手が来る前にスペルカードを使っておこう。

うう、手が震えて掴みにくい……

『雷光「稲妻柱の大封絶」』

1回だけ跳ね返る雷が無数に落ちる。これは間違いなく騒ぎになるのではないか？ 気にもしていられない。

しかしこれで一網打尽にできるといいんだが……そんなに簡単には死んでくれない。

「畜生！」

「お前がもう一人とやらか！」

その中のリーダー的なやつはあいつか。だけど大本はほかにいる霧
囲気だな。

こいつより大きい気配をかすかに感じる……

スペルブレイクだ、残っているのは6人。一方的な攻撃もこれが限界である。

もちろん反撃の手は来るわけで……

「ハア！！！」

「逃がすか！」

さすがに6人から逃げ切れるわけがない。リーダー格の攻撃を受けそうになる。

そこで飛びのいて半分やけくそで雷撃……をするとまさかの命中。まさかこいつ残りの6人で一番弱い？

まあ運が良かったってことでいいだろう。残り5人は完全にやる気である。

しかし幸運は続くもので……

バン！ と壁が異様な音を立てて吹っ飛んだ。もちろん5人を巻き込んで。

そこには何と……

「紫!？」

「あら、こんなところにいたの？ 首尾は順調？」

「まあ、一応生きてるし」

あんたがいなければ死んでいたかもしれないとはあえて言わないでおく。

「まあとりあえずお互い生きているみたいだし、いいとしましょう。私はあっちに行くわ」

「じゃあ俺はこっちで」

紫は通路を、俺は広間にある大きな扉を指さした。

「じゃあまた会いましょう」

すぐに紫は行ってしまった、俺も大きな扉を開ける。すると……

ここは中庭か？

とりあえず奥に進んでみる。天井がなく、星空が見えるあたりは口マンチックだけど今はそんな場合じゃない。それに寒いだけだ。

東屋を抜けると、というか何であるんだろうとか思いながらも。とりあえず抜けるとそいつはいた。

青年の様な顔つきをしていて、服は意外に現代のものを着ている。ジーンズにロングコートの男だ。そいつは俺を見てこういった。

「ほう、スキマ妖怪ではなかったか。まあ当てが外れたな」

こいつは紫のことを知っている？ どういうことだ？

「しかしお前を見ると懐かしい顔を思い出すな、どこか似ている」

「何を言っているのかは知らんがお前はここの親玉でいいんだな？」

「ああ、本当に似ている。まあ質問には答えてやろう、その通りだ。俺はここの妖怪どもをまとめている、最初に人間を殺し、ここで組

織として成り立たせたのは俺だ」

最初に殺し……まさか。

「てめえが陽泉を殺したってことか」

「誰だそりゃ？ 俺が殺したのは最初のガキだけだ」

よりによってか……不幸なめぐり合わせもいとこだ。偶然か必然なのか、今この時わかるというもの。

「あんたをぶっ飛ばす理由が増えたな」

「そうか、事情は察した。では全力で相手してやるとするか」

なかなか大物らしい、けれども俺には関係ない。

悲しくはない、けれども正義感よりも違う、大切な何かを俺を後ろから押している。

たった一人の親友の仇打ちという大義を掲げて全身全力で戦い抜いてやるんだから

殴りこみ（後書き）

今回もバトル回、次回もバトル回です。

銃の説明は誰にしてるの？ みたいな突っ込みは無しの方でお願いいたします。

簡単に要約しましたがわかりずらかったら本当に聞いてくださいね。活動報告に返信0人というのも悲しいですし。いや、本当に遠慮はいいりません。むしろされると困っちゃいます。

友人にはwiki見た方が早いといわれてしまいました。が僕の説明は言葉が簡単なので初心者もわかりやすいですよ（必至）

陽泉については過去話で出そうと思っています。まだ当分先の話ですが幻想入り前の主人公の様子を書く時にでも一緒に出すつもりです。

まあ活動報告で過去話についてはまとめておきますので。

第二の決着（前書き）

すいません、前回のやつ見直しの前のやつです。本当に誤字が多いと思います。

よりによって消した後に気付いてしまいました、今度書き直して再投稿します。

では今回もバトル回です。

第二の決着

戦いの火ぶたは切って落とされた、先手はこちらに譲ってくれたらしい。どこまでが意図なのかわからないやつだ。

「喰らえ！」

あらゆる物を伝う電撃が四方八方から青年を襲う。それでも軽々しく避けるあたり実力は申し分ない。自分より段違いに強いことがわかる。

妙に力が入る、体が軽い。まるでこの舞台を後押しするかのような追い風のような、もとい高揚感、何かの恩恵でもあるのだろうか。しかし自分でも信じられないくらいの力が出せる。

「おっと名乗ってなかったな、俺はレイ＝シャドウ。名前通りの奴だと思え」

(しかし電撃とは、これもスキマ妖怪の差し金か?)

名乗られてこちらも名乗らないのはさすがにダメな気がするな。しかし自分から名をばらすのはどういう意図がある?

「俺は神依崎祠雷、ただのガキだ」

レイは一瞬驚愕の顔をした、何が心に当たるんだろうか。

「では名乗りも済んだところでお互い全力で当たろうじゃないか、俺もこうやって誰かと戦うのは久しぶりなんだ」

(祠雷の名だと……それが本当ならこれは単なる復讐劇ではなく、あの女の幻想ができた頃からの因縁ということか？ しかもしそうであるならばなぜ電撃なんだ？ 俺の考えが正しければ紫電を使つてこなければおかしい。いや、考えても無駄なことか)

向こうも本格的に仕掛けてくる気になったようだ、手に何か持っている。

まるで車輪のようなもの。刃のついた15cmほどの輪を両手に1つずつ持っている。

それを投擲してきた。しかしすぐにおかしい事に気が付く。

そう、車輪の進路がおかしいのだ。

レイの能力か何かは知らないが進んでいる道が安定していない。非常に避けずらいものになっており。連続で投げられると避けるだけで手一杯になってしまう。

それだけじゃない。本体の方もどこにいるのかわからない、本当に今見えている場所にいるのかどうかかわらないという錯覚を見せられてしまう。

どうしてそれがわかるのかもわからない。まるですべてが曖昧で境界線などないように感じてしまう。それがレイの能力であるのか。

こちらの攻撃もろくに当てられないので非常にやりづらい、紫と一緒にすればよかったと今になって後悔している。何もかもが謎の中に恐怖まで覚えてしまう、しかしそれに負ければ終わりなのもわかってしまう。

けれども戦うしかない、勝つことしか残る道はない。全力を出して、後のことを考えていたら持たないであろう。

そして自分の持てるすべての力を引き出した、なぜこんなことが突然できるのかもわからないけれど

勝負の展開は意外に平行線をたどっていた、そうどちらの攻撃も当たらないのだ。

このままでは体力のない自分が負ける。それは解りきっていた。

そこで1枚のスペルカードを取り出し、決着へと一気に畳み掛けることにした。

『雷符「雷様の大名行列」』

雷雲が召集される、これはもう隠蔽の仕様がないくらい。

とにかくどこににいるのかわからないならどこにいても避けられないように攻撃すればいい。単純な質量作戦である。

ただ効果はあるはずだ、まさか実体化してないわけではない。そんな芸当できるのならわざわざ姿を見せ続けるはずがないのだから。

なんだか自分でもびっくりなくらい次々と戦略が思い浮かぶ。けれども成功させるのは俺だが。

雷撃の行進が始まった、この建物を壊すつもりで放っているので威力は申し分ないはずだ。

すばしっこく動いているけれどすぐに追い詰められる、スペカと俺の雷撃を同時に相手にするのはきついはず、いつか必ず追い詰められるはず……だが。

「なかなかいい攻撃じゃないか、これだけでできれば俺も全力の出しがいる」というもの」

簡単に振り切ってきたやつ……これはもう笑うしかないだろ。

しかしこいつの力は何なんだ？ さっきから全く読めない。

もしや能力ではないのか……それとも応用が効きすぎて俺がついて行けていないのか。どちらかしかないだろうが

「しかし今思うとあの女も来なくて良かった、ただでさえあいつと

は相性が悪いのに2対1なら本当にわからないからな」

紫と相性が悪い……紫は境界を使う。相性が悪いのは境界線を定められること＝曖昧な何かを使うこと。さっきまでのあいつははつきりしないことばかり……もうわかったぞ。

「あんたの能力見切ったぞ、おそらく何かを曖昧にする能力だろう」

「ほう、俺の言葉から答えにたどり着くか。案外一番頭の切れる奴かもしれないな。まあいい、その通りだ、誉めてやるう。その功績をたたえて人生で二番目に本気で闘ってやるう」

それまた微妙な待遇だな、しかし奴の全力はどこまで強いのか……！ 消えただと、気配も周囲に散りばめられている。これじゃあとここから来てもおかしくはない。

どこからくるんだあつ！

意表をついて正面からきやがった、これは冷静に対処すればなんとかなる。

しかしこのままではじり貧だ、何か手を打たないといけない。こちらから持続的に仕掛けるしかないというのか……

今見えている奴に雷撃を放つ、避けられる、撃つ、避けられる、撃つ、避けられる、こっちに来る！

「畜生！」

身を翻して避ける、続けて投げられた車輪を側転で避ける。しかしそれだけではない、攻撃方法はそれだけではない。鋭い針が飛んでくる、霊夢のより早いんじゃないか？

なんとか避ける、しかしその時には後ろに回られる。短い小太刀の様なもの切りかかってきた。

何とか避けるも脇腹に蹴りを入れられる。喧嘩っ早い町の不良どもよりかは威力があるけどもそれほどでもない。おそらく力はそこまですらないと踏んだ。

正面からの力比べではこちらに軍配が上がるであろう。

しかし冷静に分析できたとしても、仮に弱点がわかったとしても。こちらにはそこまで持っていく手段がない。案の定奴はヒット&amp;mp;アウェイの戦法を取ってくるので奴の居場所を掴むことすら難しい。そんな中でどうやって……ひとつだけ案が思いついた。

こちらがわざと攻撃される、その隙をつけばいいんだ。

かなり綱渡な戦法だがこのままやられるよりは十分にましであろう。紫が来てくれればそれこそ形勢逆転だが、それに期待するほど愚かではないさ。

さあ考えている間に来たぞ、後ろから小太刀を振るわれる、しかし同じ手が通用するほど俺も甘くはない。

振り返り、今にも俺の頭に突き刺さりそうになっている物を、右手で掴む。実は今の自分の反射神経は自分でも信じられない。だって

真剣白刃取りよりも難いんだぜ。

しかしこれで両手の動きを本当にほんの一瞬だが封じることができた。

この隙を見逃すほど俺も弱くはない。

『雷符「シャイニングスパーク」』

あらゆる方向に延びる電撃はまるで人工的な雷が自分から発せられている光景が目には浮かぶほどだった。

そしてその中心にいて無事ですむはずがない、当然全身に雷を浴びることになる。そして現にその通りになっている。

「グ……ツアツ！ やるじゃねえか、だけどこのくらいで倒れるほどやわじゃないんでな」

そう言っただけでまた消えた、右手が使えない今、下手に不意打ちをされるわけにもいかない。

壁に背を預ける、これで壁をすり抜けないと背後は取れない。この壁を破る力はおそらく残っていないだろう……

その時、上から小さく何かかぶつかる音が聞こえる。

「上か！？」

上を見上げるもそこには誰もいない、その代わりに投げつけられた針が落ちてくるところだった。まさか……

しかし気付いた時にはもう遅い、飛んできた針に右肘が壁に縫いつけられる、もろ貫通しているが痛みを通り越して何も感じない。もはやそれが異常なのか。

そして勝ち誇った顔でレイ「シャドウは針を構えていた。

「随分と粘るじゃねえか、だがこれで終わり。人の身でよくここまで来たな、誉めてやろうじゃないか、けどもう俺の勝利は揺るがない。ここでお別れだ」

そして針を投げつけてくる。だめだ、もうここで終わりなのか？

ここで死ぬのか？ 嫌だ、俺にはまだすべきことがある。絶対にここでなんか終われない。

ああ、すべてがスローに見えてくる。さあ、最後の力を振り絞れ。この枷を吹っ飛ばして一矢報いるんだ。さあ！

「死んでたまるかあああああつ！」

これが俺の全力だ、見ろ、俺を縫い付ける針が吹っ飛んだ。同様に投げつけられた針も吹っ飛ばす。

はは、飛んだ驚いた顔をしてるぜ。見せてやる、人間の底力がどんだけすごいものなのかをなあ！

そして俺の全身全霊をかけた雷撃を繰り出す。しかし自分でも驚愕する。そう、なぜなら空間を走るのはただの青白い電光ではなく……

迸るは紫電、すべてを貫くようなきれいなものだった。思わず自分でも見とれてしまうような。なぜそうなったのかもわからない。けれども確かに自分が発したのだけはわかった。

レイ＝シャドウは驚愕に満ち溢れていた。頭の中は疑問符で満たされた。なぜあいつが？ 浮かんだのはそれだけだった。

「馬鹿な、なぜあいつが紫電を使う。俺は確かに殺したんだ。こんな輪廻が俺に回ってくるというのか。ははっ、なんだか笑えてくるな。事実であればこれはあらかじめ決められていたことだ。必然だ。俺は殺した本人に仇討されたんだ。そうか、すべてつながった。これが運命というやつなのか……俺は、とんでもない相手を背負っていたわけだ」

すべてを見透かしたような表情で、レイ＝シャドウはとても静かに紫電の光に吞まれていった

気がついた時には自分の意識が飛んでいく寸前だった……

「ああ、何もかもがうまくいきすぎて怖いくらいね。何か裏があるのではないかと思ってしまっわ、あとで何かが返ってきそっで怖いわね」

そして紫は何か懐かしいものを見る眼で祠雷に駆け寄って行った。

「律儀に約束を守ってくれたのね、けれどもそのおかげであなたにまた会うことができた。本当にうれしいわ」

さて、どちらの彼もお疲れでしょうし。休ませてあげなくてはならないかしらね。

彼は彼に確実に近付いているわけだし

第二の決着（後書き）

新しいオリキャラについても過去話を考えております。2つの種類の過去話含め、それで全てがつながるようになってありますので。

ちなみに祠雷の紫電はバージョンアップみたいなものなので普通の電気は出せなくなりました。

能力も「紫電を操る程度の能力」に戻ります。皆さん、あくまで戻るですよ。

次回、ゆかりのターンです。

悠久ぶりの再会（前書き）

一人語り会です。見ててもつまんないかもしれません。

けど大事なこともちゃんとやっているんで我慢して見てほしいです。そうしないと後でこいつ何言ってるん状態になっちゃいますから。

一応紫のターンですよ。信じてもらえないかもしれないですけど…

…

悠久ぶりの再会

「今すぐにも目を覚ましてくれたらどんなにうれしいことかわからないわ。でもね、今こうして入れるだけでも私は幸せなの」

ホテルの一室にて、紫は決してひとりごとではない会話をしている。紫はベットに寝ている祠雷の頬をなでた、そして窓の方に歩き。何か遠いものを見るかのような顔で景色を眺める。

そしてどんな考えを持っているのかわからない顔で笑みを浮かべた。

「おかえりなさい、レディーをこんなに待たせるのは失礼じゃない」
振り返ればベットに腰かけているもう一人の彼に、まるでいたずらがばれた子供のような顔で笑いかけた。

ベットに寝ている祠雷と腰かけている祠雷。そこには2人の祠雷がいた。

「ああ、悪かったね。けれども僕はこうして約束通りに帰ってきたんだ、結構大変だったんだからね。けど、またこうして話せるかと思うとそんなもの関係ない。十分に満足な結果さ。姫」

祠雷であつて祠雷ではない、けれども確かに祠雷である彼は確かに紫を姫と呼んだ。
紫はこう返した。

「あなた、一度死んでもそうやって呼ぶ気力があるのね」

「ああ、紫だつて悪い気はしないだろう。あんなにうれしそうに僕の死に顔を見届けてくれたんだからさ」

二人は少しの間見つめあつた後、紫が照れたように目をそらし。祠雷はベットに横たわつた。

お互いの時間が平行線で流れていく。あたりまえだけでももう二度とないんじゃないか。お互いにそう覚悟していたはずのことが覆された。約束は果たされた。

遙か昔の別れは、再開という形で巡り合えたのだ。

「彼には、悪いことをしたかな」

本当に申し訳なさそうな顔で彼は言う。

「僕という存在のせいで、本当の神依崎祠雷という人間の運命を塗り替えてしまった。なぜそんなことができたのかは僕にもわからない。そして僕は彼とともに歩むことになった、僕は彼のすべてである、彼は僕でもある。ただし、お互いに違う。僕は彼のすべてを知っているけれど彼は僕のことすら気づいていない。それだけなのさ」

物悲しそうな顔で、けれど淡々と話を続ける。一人語りが物語を飾る。

「僕は彼に才能と人超を与え、彼は努力をし、結果を身につけた。彼は僕も信じられないくらいに強さを、己の父親を超えるという気持ちだけで手に入れた。幻想郷に来る前から明らかに人間離れた強さを手に入れていた。そして僕の最大の力である紫電をも使いこなした。レイ＝シャドウとの戦いでは少しばかり手助けさせてもらったけどね」

紫も興味深そうに彼の話に耳を傾ける、話は続く、まるで自分を呪うかのように続けられる。本人はなにも感じないであくまで事実であることを話す。自分でも気づいていない気持ちを抱きながら。

「幻想郷という存在は彼を僕に大きく近づけた、時期に彼は僕に染まるだろう。僕の力を使いこなすであろう。精神的にも肉体的にも僕になってしまふ。身長も体格も性格も。これから僕という存在が彼の中から消えたら急速的にね。多分このしゃべり方もうつるんじゃないかな、一人称も僕に変わるだろう。それは運命を塗り替えてしまったからさ。そしてレイ＝シャドウ、僕を殺した張本人との戦いが。彼をも僕をも目覚めさせた。ただし、彼はおそらく僕に染まりて僕を超える。なぜなら彼には僕の与えた素質がある。彼は紫電だけではなく、光という僕には使えない力を持つ。紫色の光を一度見たかったけれどしばらくお預けになるのかな、自分で言うのもなんだけどきれいな光なんだろう」

語り終えた祠雷は満足しきった顔になった。まるで今にもどこかに消えてしまいそうな寂しくも清々しい顔である。

「けれどもあなたに似ていないところがあるわ」

紫はそう言って手で拳銃の形を作った。

「ああ、僕は二刀流だからね。けれども彼はサッカーをやっているし、かなり同じ年の中でも飛びぬけて上手みたいだ。どうせ僕の武器は大事に取ってあるんだろう、使わせてみればすぐになじむと思うよ、気に入るかは別だけど機会があれば試してみるといい」

彼は立ち上がり紫をそっと抱き締めた後、静かに窓の方に歩いて行った。

「そうそう、藍にも伝えておいてくれないかい。君との約束を果たせなかったことを謝っていたと。僕は彼の体から抜けて幻想郷を見守ろうと思う、彼女には申し訳ないけどね。まあ幻想郷の危機の時には僕も現われて力になろう。君が僕を幻想郷に縛り付けたんだからな、幻想郷のピンチには僕も出るしかないんでね。それが使命なんだから……まあとりあえず先に僕をあっちに送ってくれ。今彼と会うわけにはいかない」

「ええ、じゃあまた会いましょう。しばしの別れを営みましょう」
スキマが開く、彼は入る直前に振り返ってこう言う。

「ああ、最後に教えてあげよう。彼がなぜすぐに飛べなかったか教えてあげよう。それは僕が彼の霊力の器に住んでいたからさ。僕と同化していたから器の大きさは僕と同じだけあるし彼の分を足すとそれ以上だ。だから入れたんだけどね。つまり僕が抜けたら僕のように膨大な器が残る。特別に出ていく時に満たしてあげるからとんでもない量だ。霊夢も驚くに決まっている。それだけ伝えておこう。僕はもう彼に手助けはできないけれど、もう必要ないだろう。それじゃあまたの別れを」

そう言つて祠雷はスキマの中に消えていく、残されたのは紫と祠雷。紫はスキマから2本の剣を取り出し、両手でかざした。まるで面影と照らし合わせるように。

そこで紫は床に手紙が落ちていることに気がついた。拾つて内容を確認する。

『頼みなんだが、彼の勉強机の上から3番目の引き出しにひいてある紙をめくつたところに隠してある物を、せめてもの情けに処分しておいてやってくれ。灰になるまで燃やしてかまわない。中身は黒歴史と思春期の男の秘密が入っているから、中身は見ないでくれると助かるかもな』

……あなたの頼みを私が断るわけないじゃない。

紫は笑つてスキマに入つて行つた。

あれから一向に祠雷は目覚めなかつたので幻想郷に連れて帰られた。霊夢のところに運ばれて第一に放たれた言葉は「何!? こいつ本物の祠雷なの? とんでもない霊力なんだけど」だった、彼の予想

は当たっていたらしい。

それから1か月の間、目覚めることはなかった。彼が目を覚めたのは秋の時雨時だった。雑談中の4人の傍らで目覚めたのだ。

「あら、眠り姫が起きたわね」

「姫ではないんじゃないかしら」

この声は……霊夢の声が聞こえる、もう一人はアリスか。ここは博麗神社でいいのか？ しかし眠り姫って100年の眠りからとかじゃないんだから。その前に男だな。うん、それに最初に突っ込むべきだった。

目を開けた俺は驚きに目を見張った、なぜなのかって？俺は秋の初めでまだ紅葉が始まったぐらいで外の世界に行っただ。なのに落ち葉だらけで部屋の中にも落ちている始末なんだから。

「霊夢か、それに魔理沙と咲夜とアリスがいる」

「あんた1か月寝ておいて最初の一言がそれなわけ？ まあそれらしいんだけど」

「私はお嬢様に伝えてきますので失礼します」

咲夜が消えた。相変わらずの奴だ……おい待て、今1か月言ったよな1か月。マジでそんなに寝てたのか？
どおりで季節の変わり目なわけだ。

「じゃあ邪魔者は退散するぜ、それじゃあな」

「私もお邪魔するわね、上海、蓬萊、行くわよ」

邪魔者って、まるで俺らがそんな関係……いや、何か意識すると照れる。

俺はその考えを無理やりどこかに追いだした。

しかし起き上がると一つ思ったことがある、それは……

「霊夢、背とか縮んだ？」

「馬鹿なこと言ってるんじゃないわよ、そんなこと……」

お互いに立ってみると明らかに俺の背が伸びていることがわかった。

「あんた……いつそんなに伸びたの!？」

俺だってわからない、けれど明らかに今までより頭3分の1くらい目線が違う、霊夢より小さかったはずなのに背丈を抜かしているところに確実性があるんだろう。

「霊力もとんでもない量になってるし、背も伸びてるし、おまけに力が進化したですって？ 向こうでどんな体験してきたのよ」

ちょっと待て、明らかに俺の知らないことが混じってるぞ、霊力っ

て何だ霊力って。俺は少ない宣言されてんだぞ、他でもない霊夢に。しかも力の進化とか何ぞ？　もしかしてあの紫電のことか？

試しに携帯の充電をしようとするのとコートが脱がされていて服に仕込んである武器の類も全部ないことに気が付く。

「霊夢、俺のコートと武器は何処行っただ？」

「ああ、今持ってくるわね」

……しばらくするとかごに入れられたものを持ってきた。やっぱりこれがないとな。

俺に大量のEマークがついたあとに改めて能力を試す。

するとどうだろう、出るのは紫電ばかりで前の青白い電気が出せなくなってしまうた。

まあ携帯の充電ができるのは変わらないし。何かが変化しているのは確かだろうが。レイシヤドウとの戦いで分かったことは威力と綺麗なことくらいだからな。

「あんたの電気の色が変わってる」

「ああ、なんか突然出たと思ったら元に戻らなくなった。それよりも霊力って何だ、俺は少ないはずだろ？」

霊夢も少し困った顔をしていった。

「帰ってきたあんたの霊力の量が半端ないのよ、向こうで何かあつ

たの？」

そんなことは俺も知らない。何かあるとしたらレイ＝シャドウとの戦いだろっ、自分でも何が起きているのかわからないけれど。

そんなことより俺はレイ＝シャドウの言っている言葉の意味が気になる。

まるで紫のことを知っている口ぶりや俺についても知っているそぶりを見せている。

妖怪の一覧表でもあつたら便利なんだけどな、戸籍みたいに。

「なあ、妖怪の戸籍的なものってないのか？」

「妖怪の戸籍？ 幻想郷縁起でも見たらたいいのやつはわかると思うけど、それがどうしたの？」

「いや、ちょっとな」

まさか正直なことを霊夢に言っわけにもいくまい。

「まあいいわ、聞かないであげる。明日にでも案内してあげるから今日はゆっくり休みなさい」

「悪いな、そうさせてもらっつよ」

あいつについても何かわかるんだろうか。

ともかく明日にならなければ何もわからない。今は休んでおくか。とにかくそのなんちゃらとかを見たらわかることを信じるしかない

んだし。

「紫様、どうでしたか？」

紫はとてつもない笑顔になって言う。

「ええ、彼がそうだった。けれどもあなたにまた会うのは当分先になるわね」

「そうですか」

「まあ冬眠の前に全て話しておきたいわ、橙はどこかしら」

「今はチルノと遊びに行っています」

紫は居間に入ると黙ってついてこいの合図を出した。テーブルをはさんで向き合つと紫が口を動かし始めた。

「さてと、藍には彼の伝言からかしらね」

そのあとは夜まで話し続けたという……

悠久ぶりの再会（後書き）

どうも、この面倒な会話回を最後まで見てくださってありがとうございます。

お願いだからつまらないって切らないでくださいね（作者の結構必死のお願いです）

次回から普通になるので、いや本当ですって。

もう一人の祠雷もレイ＝シャドウとともに過去話で出すので「安心を？」

ではまた次回。

裏では動いているんですよ(前書き)

一応今回から日常編に入ろうと思っています。しばらくは原作キャラとの交流が続きます。

裏では動いているんですよ

俺は稗田家の中を案内されている。

霊夢に家の前まで案内してもらったのはいいけど立派な家にビビっていたところを使用人の人に見つかって今に至るわけである。

霊夢は案の定もつどっかに行っていたし、別によくよく考えたら妖怪だらけの屋敷に突入したんだからこれぐらいでビビっていたら話にならないわけである。

「こちらが阿求様のお部屋です……阿求様、お客様ですよ」

「はい、入っていいですよ」

ずいぶん丁寧な人だな、霊夢とは全然違う。こんな感じに教養があればいいんだけどな。

「では私はこれで」

おい、なんだか投げやりじゃねえかこの人。案内だけなのかよ。まあしてもらえただけありがたいのかもしれないけどさ。

まあ待たせるのもあれだしさっさと入ってしまおうか。

あれ、地味にドアが開きずらいなこれ。

約3秒間の格闘である。

「はじめまして、稗田家九代目当主の稗田阿求と申します」

「神依崎祠雷です、わざわざ丁寧にありがとうございます」

あれ？ 俺ってこんなキャラだったけ？

というか祠雷って言った瞬間この人がすげえ反応したんだけど大丈夫だろうか。

「失礼ですが祠雷とはこのような漢字を書くのではないのでしょうか？」

そうやって俺に紙に書いた文字を見せてくる、確かに俺の漢字はこう書くけれど……というか達筆だな。すんげえ立派な字をしてる。いやそんなことより何で俺の字をあてた？

「失礼ですが何で？」

「すみません、ただ祠雷という名前しかわからない謎の妖怪がいて……何でも八雲紫やレイ＝シャドウと並ぶ最古の妖怪である、ということは分かっているんですが。それ以上がわからない謎の妖怪です。一部では実は不老不死の人間であるとか神様だとか言われています」

そんな妖怪がいるのか……ただしもつと引っかかるところ、それはレイ＝シャドウ。紫と並ぶ最古の妖怪？ 今度紫にあつたら聞いてみなければならぬ。それよりも……

「レイ＝シャドウについての資料を見せてもらえませんか？」

「はい、構いませんけど。ちょうど1か月前に謎の男と名乗る人が色々と教えてくれたんです、そういえば声とかがあなたに似ているような……顔とかは隠していたのでよくわかりませんでしたけど骨格的には若い男の人ですね」

なんだかふざけた奴もいるもんだな、しかしこれは何かが起きている気がする。それこそ俺の知らないところで……杞憂に終わるに越したことはない予感だな。

そう言っているうちに出されたのは確かにレイ＝シャドウについてまとめられた資料である。

目を通してみると……

騎士道の暗殺者

レイ＝シャドウ - Re i S y a d o u -

能力 「曖昧に保つ程度の能力」

名前通り全てを曖昧にする能力で、探知の妨害や凶器を隠す、存在までもが曖昧になるらしい。

他人の血液を使い、その者の力を使うことができる。ただ効率が悪くほぼ使い捨て状態らしい。

幻想郷が誕生する前から存在する最古の妖怪で、力こそ強くないものの能力の使い方が飛び抜けて上手く、多くの大妖怪が彼の前に沈

んだ。

逃げる彼を捕まえるのは不可能であり、隠れる彼を見つけるのも不可能であり、彼の奇襲を見破るのも不可能とまで言われる隠密行動の天才。刃のついた車輪や細い針、小太刀などを使い、暗殺者のような戦い方をする。しかし標的に仕掛ける前に宣言を出す。気に入った相手ならば殺す前に一声かけるなど。しながら騎士のようなことをするためにこの二つ名がついた。

なかなかの戦略家で彼の考案するものはいたってシンプルなものからとてつもない数の歯車がかみ合うものまで幅が広く、利用できるものはすべて利用するために作戦を見破るのが難しい。

また、彼のことを妖怪のハサンと呼ぶ声もある。

幻想郷ができた後は移り住んできたものの博麗大結界が張られるとき、他の妖怪たちとともに反発組織を立上げ、副隊長として活躍。一部の妖怪を博麗大結界の外に逃がし。その後は生死不明で目撃情報も途絶えたがおそらくは外の世界へと出て行ったと思われる。

証言

八雲紫 一言で表すならば、まるで影のような奴。

八雲藍 ひどい目にあわされた、もう二度と戦いたくない。今生きているのが不思議だ。

などなど幻想郷の管理者からは散々な評価を受けているがそれだけの實力があると思っただろう。

よくよく考えるとすげえ奴と戦ってたんだな……よく生きて帰ってこれたと思う。

この藍って言う人は紫の関係者か？ ついでに聞いてみるか、らしいけど。

最古の妖怪だつて？ そんな昔から生きてる、いわば大妖怪に俺は勝ったわけか。

今考えるとおかしなことだらけの気もするけれど。とにかく今生きていることに変わりはない。

「ありがとうございます」

「もういいんですか、他に何かありませんか？」

「いえ、そろそろ失礼させてもらいます。帰りは案内も要りませんので」

さすがに行きも帰りもは気が引けるしなあ。

そして博麗神社へと飛び立った、それを見送るかのように表れたのは紫。

「阿求、もちろん私のことは言っていないでしょうね」

「はい、それで今日は何の用ですか？ あとここ1カ月きませんでしたけど何かあったんでしょうか？」

紫は何となく諦め顔をしてこういった。

「ええ、外で派手に暴れたから揉み消しとか色々大変だったのよ」

「ご愁傷様です。それで結局今日は？」

「ええ、祠雷について話そうと思ってね。後はレイ＝シャドウの最後を」

阿求は最後という言葉で少し驚いた顔をしたが、直ぐに平静を取り戻した。

「では祠雷については1から話してもらいますよ、彼については私も生死すら知らないんですから」

……暇だ。

どのくらい暇かというと、霊夢が帰ってくるまで何もせずに時間をつぶすしかない。

携帯のゲームとかは遊びつくしたし。ハイスコアがカンストしたゲームなんか誰が遊ぶか。

こういう時に限って魔理沙の襲撃もないし、誰か来ないかな……

……おい、ここは普通誰か来てどうしたの？ 的な感じだろ。ここまで何にもないと俺主人公の特権とかフラグ体質とか何一つ持っていないことになっちまう。いや、別に巻き込まれ体質とかもないんなら大歓迎なんだけどさ、それは作者的にも困るといふか物語的につまらないというか。しかし創作キャラはいいように使われるのも運命……おっとこれ以上はまずいかな。

俺は縁側に寝転がって思わず……

「しかし暇「お兄さんだあれ？」だ……」

本当に来たー！

目の前には真黒な塊が……これなあに？ 生き物？ いきなり襲いかかってきたりしない？

中に人がいるのか？ じゃなきゃこういう生き物という考え方も……待てよ、しゃべったんなら普通に聞けばいいじゃないか。なんでこんなに焦っているんだろう。

「え〜と、その影の中の人は誰だ？ できれば顔を見て話したいんだけど」

そう言うと黒い影は消えて全身が見えた。小さい女の子で黄色い髪

の女の子。黒い服なのは俺と同じだ。

「私はルーミア、お兄さんの名前は？」

「神依崎祠雷、普通は下の名前で呼び捨てされるけど、お兄さんはやめてほしいな」

傍から見たらただのロリコンだろうし、妹属性にそこまで萌えるわけでもないし。いや、もしそんなことがあったら主人公としてどうかと思うが。

「じゃあ祠雷って呼ぶよ、それよりもあなたは食べてもいい人間？」

いきなり食べてもいいですか宣言されたんだけど……気配的に妖怪なんだしそりゃあ人を食べると思うけどさ。

「お腹が減ったから霊夢のここに来たけど祠雷しかいないし、何か作ってくれるんらいいけど」

だからって俺を食べることはないような……けど勝手に材料使ったら怒られそうだけど、霊夢の知り合いみたいだな。

「俺は食べちゃだめ、まだ死にたくないし。霊夢が帰ってくるまで待てない？俺も勝手になんか作ったら怒られそうだし」

霊夢の分も作れば案外なんとかなると思うけど。

「うーん、そうだ。弾幕ごっこで勝ったら何か作って」

「いや、俺はそんな戦闘狂じゃないし、強さもわからない人に勝負

を挑むのは自滅と同じだろ」

それが俺のモットーである。

「でもそうしないなら押し込んで台所のものを……」

うう、かなり痛いところをついてくる。これはもう乗るしかないか、意地でも止めてもいいけど仮にも妖怪だし、それに神社の中で暴れたらそれこそ後が怖い。

「じゃあやるか、弾幕じっし」

「うん、じゃあ早速始めるよ」

裏では動いているんですよ(後書き)

実はあつきゅんは黒幕に味方しているのだ!!
立派な共犯関係を築いています。

幻想郷縁起の書き方はよくわからないんで適当にやりました、書き方とかあるんならごめんなさい。多分100%違うと思います。

ちなみにハサンとは……説明しようとするとかかなり長くなるので、とりあえずすごい人でいいです。暗殺者です。というかほかに思いつかなかったから名前を借りたので、深い意味ありませんし、というか覚える必要ありませんし。

今回はオリキャラのターンです。しばらくはレイ君も本格的には出てきません。

次回はバトル回、vsルーミアです。

異変の裏側

「どうしたの、もう終わり?」

ルーミアに攻め寄られる俺、しかしルーミアは少し前まで話していたルーミアとは全然違う。そう、明らかに体格も、しゃべり方も、能力の強さも。最初とは全然違う。

……どうしてこうなった。

最初は弾幕の色まで変わっていたことに驚いたことから始まった。いや、紫色になってきているのは予想もついたような気がするけど。そこで調子に乗ったのがいけなかったんだろうか。最初は俺の圧倒的な優勢だった。けれども俺の弾幕はルーミアの頭のリボンを弾き飛ばしてしまった。

それが封印になっていると本人の口から語られた時にはもう遅かった。

自分では外せないらしいけどその意味がわかったよ。

どこことなく大人の女性に早変わりしたルーミアは元のルーミアとは比べ物にならない強さであつという間に追い詰められて、ここに至るというわけだ。

現在位置は俺は神社の蔵の壁、ルーミアはそのすぐ近く。完全に袋の鼠になってしまった。

「やっぱり祠雷も食べちゃおうかな、どっちの意味かは教えてあげ

ないけど」

明らかに別人だろこれ！ 最後の抵抗の弾幕は……何かよくわからない得体の知れない黒い闇に吞まれた？ 良くわからない現象が起こっているようだ。

ハッ！こんなこと考えてる場合じゃない、なにか反撃の手はあるはずだ。何か……

「チエツクメイト」

ありませんでした。容赦なく叩き込まれました。

「おかわり！」

本当の本当にどうしてこうなった。

確かに弾幕ごっこで勝つたとは言ったが本当にそうなるか、いや、男に二言はないけどさ、この自分でも何が言いたいのかわくわからなくなる状況になっているのはなあ……

とりあえずご飯のおかわりを盛る、しかし良く食うな。

俺だって一応食ってるけど明らかに俺が満腹になった量の三倍は食ってやがる。

とうかきさっきまでの大人の女性のカリスマはどこにいった。

「いや、どっちかというときさっきのが作りものかな」

「人の心読むのはやめろ……あくまで台詞じゃないんだからな」

こっちにだっていろいろあるんだし。

しかし背の高くてすらっとしたスタイルはかなり美人なほうに入るのではないか。

腰まで伸びている金髪も綺麗にまとまっているし。なんだかんだいってモデルみたいな奴だな。ただ服まで比例して大きくなっているのはどういう理屈なのかよくわからない。

けれども封印されてあんな子供になっているのは驚きだ、その前に封印されるようなことをしたのか……けど悪さをする気には見えないな。

「そこにあるのは霊夢の分だから食べちゃだめだぞ」

しかし早めの昼食もいいものだな。以外に食が進むもので……この足音は霊夢か。

「あら、人の神社に昼間から女つれこむとはいい度胸じゃない」

「おいらミア、知り合いなんじゃないのか？」

もしかしてこの自然な演技力に今までだまされていたとか？

「いや、ただ単に封印が解けた私を見たことがないだけでちよくち飯貰いに来てるからなじみは深いと私は思ってる」

納得、封印だと聞かされた時に自分では外せないとも聞かされた。なら霊夢はわざわざ自分から外すようなことはしないだろう。

「もしかしてルーミア？ 封印が解けたってそんなになるわけ？」

「うん、知ってるのは紫くらいかな」

紫は知っているのか。

「けどまた封印するのとかはいいのか？」

「私はやり方知らないし、それにこいつは悪さする気なんかないんでしょ？ する必要がないわ」

「わたしは適当に迷い込んできた人を襲っていればもう満足かしらね」

それでも普通にアウトな気がするんだけど……霊夢は平気そうだから何かあるのかな？

「そう、でもまあ私の分があるのは気がきくじゃない」

そういつて霊夢も自分の分を食べ始めた、前後の話の流れるにもその流れはおかしいしまだ誰も霊夢の分だとは言っていないんだけどな。

「そうそう、私は異変解決に行くからもう出かけるわ、何でも川とか湖の水位が減っているらしくて、それも明らかに不自然なくらいね、私も行ってくるから。じゃあそう言うことだから留守番は頼むわよ」

ああ、俺が何も言わないうちに行ってしまった。まあどうせ俺の出番はないんだから変わらないんだけどさ。

しかし霊夢も異変解決を何回もしているんだろ？ 良く考えると俺に修羅場だって言えるほど平和な生活してないんじゃないか？

「しかし異変解決か、俺の出番はなさそうだな」

「あら、そうはならないわよ」

「っ紫か！」

いきなり現れるから心臓に悪い、それよりも俺は聞きたいことが……

「あなたに聞きたいことがあるのは分かっているわ、けれども今は答えられないことだから何がどう回ろうと答える気はないわね、それよりかは答えられないかしら。それよりも今はお願いがあなのよ」

「お願いって……」

こいつが答える気がないのなら絶対に答えないだろう、話せるときになったら話してくれる雰囲気なんだし、今問い詰めなければならぬわいわけでもないけど……

それよりもいまはお願いについてだ、要するにいやな予感しかしないわけだけど……

「そのまえに私についてはスルーなのね、久しぶりに元の姿で会えたというのに」

「まあ、久しぶりとはいってもねえ、たかだか300年ぶりくらいじゃない。あなたもそんなに気にしてはいないんだろうしね、まあ今は封印する気もないし。むしろあなたにも手伝ってもらおう予定だから」

300年でそれ俺から見たら途方もない話なんだけど。つーかルーミアに手伝ってもらってどういうことだ？

「今回の異変はいつもと少し趣旨が違うの、それは最初から博麗の巫女をはじめとした実力者たちに異変解決に行ってもらうこと、そうすればいくら人を襲おうとだれも止められる人はいなくなる。人里の守護者でも限界はあるでしょう。そこが狙いなわけよ。もともと人を自由に襲えなくなってから不満は少しずつだけ募ってはいたわ、それが爆発したわけね。一度占拠してしまえば私たちただでは済まないしね。それに過激派の連中が一網打尽できるいいチャンスでもあるし、見逃すわけにはいかないもの」

要約すれば妖怪たちが一致団結しているわけか。

「私も冬眠前の人仕事で手伝うつもりよ、けれども私は人里にいるから。あなたたちには人里を襲う予定の妖怪どもに2人で突っ込んでもらうわ。異変を起こしている連中も時間稼ぎのためにかなりの妖怪を集めているから、こちらの方に力をかけたいの。それに人里を留守にはできないわ。お願いだから2人で行って、ルーミアの実力を知っているからこそその頼みなの」

今回の紫の発言にはどこか本気で言っているように感じられる。やはり幻想郷のためならどこまでも本気になれるのだろうか。ちなみに異変解決には霊夢と魔理沙とアリスと咲夜と白玉楼？（最後はよくわからないけれど）の人たちがが行っているらしい。人里の方は知らない名前ばかりだ、藍という名前もあるが詳しくは後に話すらしい、こちらのことはお見通しなわけか。

ルーミアにも何故かしら俺の肉じゃがで協力を要請し、俺も幻想郷を守るためと言われれば手を貸すしかない。

時間があまりないらしいが詳しい場所が分かったらまた教えるらしい。その間に俺もやることがある。しばらく時間がもらえる方がありがたいかもしれない。

「まあ、あつて間もない関係だけどよろしくな、ルーミア」

「私も全力で戦うのは久しぶりだから、まあ噂になる程度の実力もあるんだし。気楽に行っても大丈夫だとは思っけども」

しかし最後に紫が言った異変には必ず裏側があるって、今回は俺たちが裏側なんだろうけども……過去にもこういうことが小規模ながらあつたってことか？

まあとりあえず俺は自分で使うものを整備しなければならぬ。ルーミアが不思議そうな目で見てくれるけれども無視する。もう自分の世界に入っているからな。

紫が来たのは40分後だった。場所は意外に神社から近いところだった。

もしかすると第一の狙いはここなのかもしれない。

とりあえず行くところも決まった、さあ、出発だ。

「一方そのころ人里では」

3人がテーブルを囲いお茶を飲んでいた。

「こうして集まったのはともかく、本当にここまで来ると思っ？
慧音」

「さあ、少なくとも妖怪の賢者が頑張っているうちは大丈夫だとは思っけど、秘策を用意してあるとも言っであつたし。妹紅も少しは信用したらどうだ？」

「紫様もいざここまで来られた時のためにも多分策は用意してあると思っますけど」

「藍は少し気を張りすぎだよ、永遠亭の連中もいるんだしなんとかなると思っわよ。ただ秘策とやらにどこまで期待していいのかわ分

からないのはこわいきもするけどね」

「あら、存分に期待してくれてかまわないわよ、最低でも半分は減らしてくれるんじゃないかしら」

「紫様、戻られましたか」

「ええ、私達はここで待っていれば大丈夫。時が来るまでゆっくりしておきましょう」

異変の裏側（後書き）

はい、vsルーミアとか言っておきながら即効負けてます。まあEXルーミアを出したいからだと思ってください。

ちなみにこの異変の間はEXルーミアのままです、終わったら紫が戻るのでご安心を？ してください。

結構軽く話してますけど下手したら人里が占拠されますからね、かなり大きなことなんですよ。

では次回からバトルパートです。

見当違い

相変わらずどうやって情報を掴んでいるのかわからないけれども、紫に言われた場所には確かに尋常ではないほどの妖怪が集まっていた。

盗み聞きの結果によると、やはり人里を襲うつもりらしい。紫にはできるだけ多くの妖怪を？殺して？と言われた。

一応彼女も妖怪のはずだけれども……やはりルールを守らなかったり、道を踏み外す連中には非情に当たるしかないだろう。それが幻想郷を守ることにつながるのだから。

しかし雰囲気的にはあまりおちおちしていられる状況ではない。明らかに今すぐにでも、という雰囲気がこちらまで漂っている。

俺はルーミアに合図を出す。

お互いに信用できると紫がすっかり言いきったんだから、何となく信頼感が出る。

それがいい方に働いているのか。俺の言いたいことをしっかり読み取ってくれた。

あいつらはおそらく人口の洞窟に根を張っている。入口は一つしかないらしいが短時間でここまで掘り進む技術があるらしいで油断は禁物のようだ。

入口には……やはり数が多い。確認できるだけでも13人いる。確認できるだけとは言っても奴らはここがばれていないと思っっているのだからわざわざ身を隠すような面倒なことはするまい。おそ

らくこれが全員であろう。できるだけ音を出さずにしとめたいわけだが……

ルーミアに手招きをするとこっちによってきた、そこで俺はこっく。

「できるだけ音を出さずにしとめられるか」

「大丈夫、まかせて」

そう言つてルーミアは黒い球を手に出すと、それを投げつけた。それは一瞬で広がり、見張りを飲み込んで縮んで消えた。

一瞬の出来事だった。ここまでできたなら俺はいらぬ気がするんだけどなあ。どうして俺の相手は規格外の連中ばかりなんだろう。

しかし大した騒ぎも出さずにしとめられたので良しとしよう。規格外でも味方なら怖くはない。

「突入したら騒ぎとかは考えるな、スピード勝負になるから、とにかく前に進む」

逃げられる前に全員潰す。それが一番の近道であろう。

「どちらかがやられても構わず進む。いや、戦力は取っておきたいな。助けられる範囲で助けるけど、どうしても無理だと悟ったら無視して突き進め。絶望に一筋の光を当てても暗闇は変わらない」

単純な作戦である。中はどうなっているのかはわからないが二手に分かれるようなことがあったならその時はその時である。けれども

短時間でつくられた、いわば即席の要塞なでもしかすると1本道なのも十分にありえる。

とにかくルーミアとともに突き進む。なんだかそう思うととたんに心強くなってくる。1人よりも2人のほうがいい。

さあ、つっぱしるぞ！ 今日の俺は情け容赦なんかない

中に入ると早速お出迎えがあるけども紫電で一掃する。前回の戦いに比べて今回の俺には強さがある。威力も飛ぶ早さも。全然ちがう。紫電になってからは、威力も早さも何もかもが以前の俺よりだんぜん高いのが自分でもわかる。

どうしてかはわからないけれど自分の力の使いかたが自然に頭に浮かんでくる。まるで誰かの知識が流れ込んでくるように。

前みたいに10人程度の小妖怪の集まりでも難なくけちらせる。霊夢曰く中級妖怪の中にはいつても力の強いほうには普通に入れるくらいにはなっているらしい。

ルーミアだって爪が伸びて妖怪を貫く、変な黒い球を飛ばして、当たったら重力でも発生しているのかというくらいの勢いで地面に引きずりおろしてそのまま潰してしまう（後から聞いた話なんだが実際に発生しているらしい。闇が重力を持っているようだ。理屈は分からないけれど）

突き進んでいくうちにわかったことは、やはり1本道であること。

これでやりやすくなった。

しばらく2人で協力しながら狭いトンネルを飛んでいると、ふと前方のルーミアが止まって、こちらに止まれる合図を出してきた。不思議に思っただけで良く前を見てみると。なにやら力の強いやつらがたまって出てきているようだ。

ルーミアは「闇を操る程度の能力」らしいから夜目はきくのだろうか？ 俺には分からないけども。

もし自分の作った暗闇でこけたりしたらかつこ悪いような……

しかし、なかなか力の強い連中がいる、俺のいつの間にか進化してきた探知能力がそう言っている。これは本気でかからないと

「えいつ！」

そんな一瞬で終わるわけですか、これは本格的に俺のいる意味がわからない。

一応大妖怪に入れる連中もいたつぽいんだけど……もしかして本格的にチートなのか？ ルーミアは。

一向に終わりが見えない。まるで同じところを回っている錯覚まで生まれてくる。

けれどもそう考えていると終わりは見えてくる。

「親玉はお前か？」

ひとときわ力の強めのやつがいる。やはりまとめ役にはそれ相応の力が求められているのか。

「とりあえずここをつぶせば終わりなんだ、さっさと終わらせてもらおう」

「それはどうかな？」

自信満々の返しが来る、どういうことだ？

「残念だけどここをつぶしても終わりなんかじゃないさ、ここその他にもまだ2か所ある。ここは一番最初に特攻する連中の集まりだ、戦力は欠けるだろうが攻めるには十分さ。ここまで来たんだから教えてやるう、あとの2つは守矢神社を乗っ取って人里に行く連中と後から反対側から直接攻める奴らだ、今頃守矢神社の連中が動きだすころだ、3人だけでどう守り切るのかな」

明らかにこちらを見下した笑みを浮かべる。

「ちなみにここは一番レベルが低いぞ、嘘かと思うかもしれないが本当だ」

こっちにとつては死刑宣告になるようなことをさらっと口にする。
じゃあとちらかだけでも応援に行った方がいいんじゃない……
しかし紫に見つからずにいるとは相変わらずどうやっていのかはわからん。

「多分妖怪の山のような紫が探しづらいところを選んでいるんじゃないよ」

「とりあえずここを早くかたづけなきゃはじまらねえ」

「あんたらの考え通りには行かせねえ、まず最後の全力でつぶさせてもらおう」

最後の全力……しかしまずと……たつてことはまだ策がある……
おそらくは合流でもするつもりだろうか。

そうこうしているうちに出口がいつの間にか塞がれている、もう逃げるところはない。

「ルーミア」

「うん」

ラストバトルは今まで以上につらいものになった

全方位から来る敵は、言葉だけ聞いたら大変かもしれないが。あまり連携の取れていない連中には逆に穴となりうる戦法だ。現に適当にばらまくだけで当たってくれるのだから逆にやりやすくなっている。けれどもこのままではじり貧だ、ルーミアの方は安定の殲滅力だがこちらはそうはいかない。

スペルカードは打ち切りだ、たった5枚しかないのだからすぐになくなってしまおう。

このままでは追い詰められるのが目に見えている。ひとつだけ頭の中に方法が浮かんでいる。

即席でスペルカードを作ること。

もともと耐久スペルというものの存在を聞かされた時に、どういうものが作れるかは考えてあった。いつでも作れるものは他にも用意してある。けれども後回しにしている作ってはいなかった。

ストック的には10枚越えである。

いまこの場で作ってしまったえば問題がない。

少し時間を作ればたやすいことだ、1から考えるのではなく、型にはまっている物を表現すればいいだけなら速攻で出来上がる。

少しの時間稼ぎ　とりあえず全力で放出すれば後が少し怖いけれどもスペルカードを2〜3枚作る余裕はあるわけだ。

そうときまれば話は早い。早速試してみよう。
力をためて……一気に放出する。

一瞬の出来事、すさまじい閃光とともに紫電が周りの物を例外なく飲み込んでいく。

その様子はまるで紫色の濁流のようで……

その間に確実にスペルカードを作り上げる、ルーミアの方は相変わ

らずだ。こつちに目くばせする余裕を見せているあたりにどことなくカリスマを感じる。向こうはスペルカードも強力なのがわんさか出てくるし、本格的に立場がもうやばい。

けれども調子に乗って4枚目を作ろうとしたら以外にギリギリだけど間に合ったので良しとしよう。では試し切りの相手はここにいる妖怪どもで。

『電幽「クルツクス・ザ・ルーム」』

巨大な紫色の球体が形成される。ルーミアが思わず驚いた顔して避難するレベルの球体である。

当然100を超える妖怪が閉じ込められる。下手をしたら200に届くかもしれない。自分では良くわからない。

俺の姿が消える、使用者の姿が消えるのは耐久スペルの特徴らしい。球の壁から壁へ電流が流れる、前から後ろからも横からも上からも下からも来る電流になすすべもなく刈り取られていく、壁自体にも電流を流してあるので下手に触ればやけどどころではない、すなわち下手に破ろうとすれば自分に返ってくる。

この檻の中ではいくら逃げ回ろうと逃げ場はない、これは俺の本気の自信作であるから。

その自信に比例しているのかはしらないけれどもどんどん撃ち落とすしていく、妖怪同士でぶつかって自滅するケースも多々ある。

まさに地獄絵図の中、スペルブレイクの時には中に誰も残っていなかった。

外の方にももう妖怪はいない。ルーミアがすべて片づけたらしい。
(後から聞いた話では俺の作った球体に巻き込まれた数は規模的に
100や200じゃ全然済まないらしい、驚きだ)

「とりあえずステージ1はクリアか」

「これからどうするの？ 手分けするとか」

「いや、守矢神社だっけ？ にいこう、人里は紫たちがいる、おそ
らく鉄壁とみていいだろう、紫が信用できるやつらしいしな。そ
れよりも守矢神社には3人しかいないんだろ？ ならすこしでも形
成を変えられる方がいい、特にルーミアは1人で戦況を変えられる。
俺だって多少の戦力にはなれるつもりだ」

妖怪の襲撃がないぶんだけ早く洞窟を抜けることができた。

「案内できるか？」

「うん、何回も行ってるとし、あそこの神様とはよく遊ぶから、まわ
りの地理も大丈夫」

「それは心強いな」

今度もスペカを使い切ることは予想済みだ、少し遅めに進行してで
も作りながらのほうがいいか。できるだけ弾は残しておきたい。
おそらく直接人里に行く連中は、最後に来るのだし、一番数も質も
あるだろう。できるだけ万全の状態で戦いたいのは数が少ない方だ。

さあ、ステージ2の大仕事に向けて、2度目の出発だ！

見当違い（後書き）

えーと、このバトルはまだ顔合わせが済んでないキャラとできるだけ顔を合わせさせようという魂胆の下作られています、まあチルノとかリグルとかみすちーとか妖怪の山の人たちとかいろいろ出てませんが、そのうち出します（一応考えてある

特に深い意味はない、ただの規模が大きい異変のようなものです。

EXルーミアはチート気味です、レベル85くらいです。ちなみに紫とかその辺が99です。主人公、残念ながら30くらいです。

（作者基準）まあそのうち強くなりますよ、伸びるのは遅いけど確実に。

新しいスペカは頑張っでできるだけ出そうと思ってますが、期待はしないでください。たぶんこの騒動の間に全部出すのは無理です。

まあ頑張っでいくので、次回は守矢神社です

守矢神社に飛び入り参戦

スペルカードを作りながら飛ぶのは思ったよりも簡単だった。

ただ念じれば形になるまでになっただけでいるためにできることなのだがまあ、それでも俺は自分の霊力が増えているのがようやく実感できた、こうやって霊力をフルで使うと今まではすぐに体力的にも限界が来てしまったが、もう大量に、複雑に使っても大丈夫。

まさに貯蔵庫といった感じだ、これなら霊力を攻撃にも使えそうだけど……素直にスペルカードに少しづつ込めるだけでいいかな。紫電もあるし、何より使い切ったら回復するまで待たなきゃならない身体的にもきついし、その分瞬発的な力はすごいらしいけど、まあ練習しておこう。無難な道を歩みたいのは全人類の望みだろうけど。

しかし今日だけでスペルカード11枚も作ってしまった。

懐が頼もしく感じるな、全部で16枚か……これだけあれば選択肢という面では全然困ることのない、心配なのはむしろ持て余すことだ。

使わないまま俺が死んだらかわいそうだしな。できるだけ考えたくはないけどリアルにいつ死ぬかわからない状況なんだし。

「ついた……けどひどい有様ね」

「けど……3人だけなのになんだよこのそこらじゅうの有様は」

明らかに3人だけでここまで耐えきったって言われても信じられないくらいの数が転がっている。

「まあ、ここの神様強いのが2人いるし、そこまで心配するほどでもないんだけど」

うらむ、この3人が常識外だとして4対1で俺が役立たずになる計算になっちまう、役に立てるとか宣言しちまったけど明らかに大丈夫かな。

「まあ、とにかく私たちは外側から攻めましょう、おそらく妖怪の山という隠れ蓑変わりの拠点、その勢力と挟撃されるのを防ぐためにここを狙っているはず、何としても阻止しなくちゃ」

ルーミアの考えた作戦内容を確認する。

たった5人（3人はそれすら知らない）の挟撃作戦が始まった。

最初はスピード重視で殿の連中をつぶそう。

『電子「ミクロスパーク」』

空气中にまかれた電子の残留、それに触ればあつという間に高圧電流が流れる、避けるには、電子からでる少しの霊力を感じ取り、なおかつそれと同時に俺の紫電を攻略しなければならぬ。ただ触れた時の一瞬のタイムラグについて避ける戦法もあるけれどお勧めはしない、ミスすれば気絶だ。

そしてそんなこと興奮している妖怪にわかるはずもなく、味方が謎

の墜落をしているようにしか見えないわけで……けれども立ち止まるうにももう遅い、残念だけれど運良くとまれても俺の紫電が来るんだ。

「恨むのなら自分が神様にしてくれ」

いや、一度でいいから言ってみたかったんだ。特に他意はない。

けれどもごっさり欠けた包囲網を見ると何だか爽快感というか達成感といふかなにかいろいろな気持ちが入かぶな。

「ようやくここに気づいても遅いんだよ」

『光熱「暖かい絶望の恵み」』

ただの光ではない、あらゆる物を溶かしながら貫通する熱を誇る殺人レーザーだ。

俺は包囲網をぐるりと回る、ルーミアとの作戦では、包囲網の周りを回って確実に薄くしていく作戦だ、こうすれば下手に挟まれることもないし、確実に、それでいて早さもかけ持つ、理想の削り方。守矢神社の3人はどうも並大抵のことじゃびくともしないそうなので大丈夫……だと信じたい。

とにかく殺人レーザーをばらまきながら移動すればどうなるか、包

罅網はバラバラになり、付け入る隙が大きくなるわけだ。空の連中も陸の連中も関係ない。とにかく壊して進む

しかし、まわっていてもルーミアのほうが早いから追いつかれるわけで、同時にそれが突入して中に加勢する合図だった。

「突っ切るぞ」

「うん」

俺たちばかりに気を配るわけにもいかず、どうしようもないまま数を減らされ、罅網はもはやざらだった。

俺たちはいとも簡単に侵入し、中にいる3人と合流することができた。

当然驚いた顔をするだろう、まあ攻撃されなかっただけでした、どうも2人はルーミアに真っ先に気がついたらしい。え〜としめ縄の人と、すごい帽子の人だ。緑色の巫女さんは驚いていたけど。

とりあえず名前もわからないまま共闘することになった。いや、情けないとか言うなよ、名乗ってる余裕なんてないさ。

神社中心になった5人の陣形は意外に自然に定まった、俺は人に会わせる力があるのだろうか？ いや、そしたら友達あんなに少ないはずがない。おそらく合わせてくれているのはあの二人だろう。ル

「ミア曰く神様らしいしそのくらいはお手の物なのかもしれない。

けれども俺だって背後を気にする必要もないわけだし。百単位で神社に詰め寄ってきている妖怪どもを返り討にすることに専念できるのはありがたい。

そして高々とスペルカードを掲げ

『雷符「雷槍の流星群」』

俺の目の前に高圧電流同士が流れあつてできた、いわば電気の壁（大きい球体の一部だけを出現させたような形）ができる。紫色の壁は何とも言えない美しさを誇る。

そこから電気を霊力で固めて細く鋭くした、いわば槍のようなものが生成されて、無鉄砲に飛んでいく。移動させるのは少し大変だが、敵の攻撃を相殺してくれるので動く必要はほぼ皆無。すなわちスペルカードを全力で保っていればいいわけだ。

前方に全力で攻撃する、背後が安心できるからこそできる芸当だ。そしてこのスペルの一番の特徴は……

「うわー、随分と綺麗だねえ、神奈子」

「あんまりそつちばつか見てると痛い目見るよ諏訪子、突然オンバシラが飛んでくるかもしれないしね」

「でも本当に綺麗だし、なにかの芸術みたいじゃん」

そう、普通の紫電を圧倒する美しさがあるのだ。さながら紫色に輝く流星群のように。

空へと舞い上がるその星は触れてはいけない儂き美しさ。手が決して届くことはない。

どうやら終わったらしい、またもや予想外の数を持って行った俺のスペルカードはこちらの防衛成功に大きく貢献したらしい。

改めて、若干崩れている居間に集まり、テーブルを囲む5人。

「しかしルーミアがそんな風になるなんてねえ」

「まったく、あの子供っぽいルーミアの面影もない」

「それあんたが言っちゃいけないだろうよ」

しかし、さすがに疲れたので休ませてもらってはいるけれど、人里の方は大丈夫なんだろうか？

俺は一言断ると、WA2000を持って人里の方にスコープを向ける、どうやら気を張った様子ではあるけれども争いは起きていない様子、少し休んでも罰は当たらない。

しかしそこにタイミングが悪く、早苗がお茶を持ってきてしまった悲鳴を上げたのは別の話。

そりゃあいきなり家の中でライフル銃持ってる奴がいたら驚きだけどさ。気持ちにはわかるんだけど……

しかし神様も案外フランクなもんなんだな、こうして話していると人間と変わらない。

相変わらず俺の銃、今回はVz・61に目を向けている人がいるけども。そんなに珍しいのかな？

「あの、それって本物ですか？」

「え？ 本物じゃなかったらわざわざ持ち歩かないよ」

そのあと俺を見る目が少し変わってしまった、諏訪子に外の世界から来た、と言われた瞬間に納得がいったけど、たしかに現代っ子はみんな刃物とか銃器とかは苦手な人も多いのかな？ クラスの連中もみんなそうだったし。

「つか神様とまで呼び捨て関係になってるし、いつの間にかおれはフレンドリースキルを身につけたというのか？」

「けどまあ、あんたのことはいろいろ聞いているよ、天狗の新聞にも乗ってるし、結構噂話としては広まってる方だからね」

「そんなに広まるようなことした覚えはないんだけどな」

「まあ、文さんも結構話題にしていますけどね、取材相手に困らないとかなんとか」

……そのうち俺の根も葉もないうわさが幻想郷を覆い尽くすんじゃないか？

どこ行っても覚えのないことばかり言われるようになったりとか。

「けどまあ、そろそろ行かないとまずいし。ここら辺で失礼します」

「あれ、もういつちゃうの？ まあ、頑張ってるね。こっちは神社も色々大変なことになってるからいけるか分かんないけど」

まあ、ここまでひどい有様なんだから、戦力としてはあまり期待しないほうがよろしいか。けどまあ、里の方にはここよりも十分な戦力があるともみていいだろう。

俺とルーミアは人里へと飛び立った。

しかし守矢神社で襲撃が始まっているのにあつちでは何もなしなのは不気味だな、何か裏があるのか、それとも人里での戦の始まりが合図なんだろうか、定かではないけれど後者であってほしい、それならば目論見をつぶしたただけではなく、こちらに有利な状況であることになるからだ。どちらかわからない分、不確定要素となるのは仕方がないことっただけど、これでは相手に主導権があるのと変わらない。

たとえ狙っていないくても優位に立つことができるのだから、せめて

一人ぐらい尋問しておけばよかったと今になって後悔している。

とりあえず紫たちと合流するのが先だ、そうしなければなにも始まらない。

「少し急いでおくか」

「まあ、早く着くことに悪いことはないものね」

紫曰く、弾は河童に頼めば作ってくれるらしいので、少しの出費は覚悟してでも、消費は大丈夫かな。幸い手元には里で出せば皆が一瞬顔が引きつるくらいの額が入っているので問題はないだろう。

ゲームオーバー（死）よりは絶対にましなのでね。

人里についたら、案の定少しばかりピリピリした雰囲気があるけれども、別に気になるほどではない。

まずは紫を探さなくては……待てよ、紫のことだから。

「紫、見てるのか？」

と呼べば……ほら、案の定出てきてくれた。

「あなたも鋭くなったのね、まあとりあえずみんなのところ以案内するわ、早くスキマに入りなさい。ほら、ルーミアも」

「うん」

落とされるよりも自分から入って行った方が気分はいいけども……
あまりよろしくないことには変わりはない。出口が見えたらすこ
しばかり早足になってしまう。

スキマを抜けたら、会ったことがない人たちがテーブルを囲んでい
た、地味にお茶がなくなっているあたりに優雅さというか、余裕を
感じるな。

しかし俺が気になるのはその人たちよりも紫の言葉だった。

「さあ、この二人が私の秘策よ」

守矢神社に飛び入り参戦（後書き）

完全下校さんはとてもゆっくりできるね！

Vz・61については次回に説明が入ります、決して説明してないわけじゃありません。使うしね。

守矢一家とはずいぶんあっさりしてると思うんですけど、うがちゃんと書いてないだけで自己紹介からいろいろしてるので、ただ雰囲気的にうまく入れられないだけで……

次回もバトル回です。

人里防衛線

「おいちよつと待て、今聞き捨てならない言葉を聞いたぞ、秘策とは何だ秘策とは」

「私たちはそんな扱いだっただの？」

完璧俺たちのほうを指さして秘策とか言い切りやがった、

もしかしてこの流れは全部紫のシナリオ？ はさすがにないか、こんなにも不確定要素が多い中で俺たちという、いわばイレギュラーをつまく使えるはずがない、おそらくは紫が示したところを殲滅するだけだったはずだ。

「秘策なんだか言ってるけどなあ、俺たちはあそこ他にも守矢神社防衛線にも参加して、そのほかにここにも出るんだぜ、こんだけ人数いるなら、紫も来てくれてよかったんだじゃないのか？」

というと、紫は不思議そうな顔をする、紫もあそこまでつかめていなかったからであろう、事情を話した時には、完全にやられたという顔をしていた。

ともかくここに最後の悪あがきが来るといつのを伝えると、この場の雰囲気が変わる。

簡単な自己紹介が済むと紫が早速動きだした。

「祠雷はとりあえず見張りに回って、おそらく一番適役なはずよ。慧音と妹紅はここにおいて、藍、行くわよ」

「はい」

紫と、あの人が藍か、尻尾が九本ある、狐？ かな、尻尾が九本と
いうことは九尾であろうか、その辺はよくわからない。

「しかしあのルーミアがこんなになるなんてねえ、世の中不思議な
ことばかりね」

「まあ、この際は猫の手も借りたいんだ。ルーミアでも十分な戦力
になる、え〜と、祠雷といったかな？ 見張りといったがどうする
んだ？」

「え〜と、とりあえず全方位を見渡せて、なおかつ高いところなら」

「だったらここの屋根の上で大丈夫だろう、飛べるか？」

「はい」

「よろしく頼む」

俺は言われたとおりに屋根の上へと飛び立った。

「けどさ、どこから来るのかもわからないのに見張りはきついよね」

「その前に秘策とはいっても実力のほうが心配だ」

「それなら大丈夫だよ、1000人2000人くらいを相手にしても逆

にやりやすいで済ませられる実力はあるから」

「そうか、それなら安心だ」

見張りとは言ってみても、どの方角から来るのかもわからないのに見張るのは、やはり精神的にはきついものなのだ。

せめてわかりやすく動いてくれるといいんだけどなあ、さすがにそうはいかないか。

「調子はどつ??」

この声は……永琳か。

「来てたんだ、まあどこにいるかわからないし、こっちから見つけるのは難しいかな」

「まあ、怪我をしてもすぐに助けてあげるから安心しなさい」

「案外永遠亭のほうにいたりしてな」

このときは冗談半分だったんだけど。

.....

「どつしたの??」

「見つけた、すごい数がいる」

こちらから攻めるといふ風に決まったのはすぐだった、里の守りをおろそかにするつもりはないので、何となく予想はしていたが俺はそっちに行くことになった、ルーミアは戦力的にも残っていた方がいいので、妹紅という人と組むことになった、けどなんだかんだいってルーミアと色々やっているうちに自然に動きが合うようになっていたし、俺としてはルーミアのほうがいいんだが、文句は言ってもらえない。

紫は案の定どこかに消えたし。

人里から少し離れた所でいったん落ち合う。

「とりあえず、一人でも多く潰そう。それしか道はない。後ろは信頼できるから俺たちはそれでいい」

あくまで事務的になってしまふ、今日初めて会って、しかも一回も話したことないんだし、こうなってしまわない方がおかしいような気がするけど。

「細かいことは考えないでとりあえず暴れるように言われてるんだし、私たちがどれだけ減らせるかで向こうの状況は変わるんだから、まあこっちは好きにに暴れるわよ」

会話が途切れたのが合図だった、同時に飛び出して翔けていく。

しよっぱなは俺のスペルカードだ！

『電雷「ビットバキューム」』

あたりに無数のビットが飛び出す。それぞれが電気を放出するため、俺だけではなく、ビットも壊さないとじり貧になる。

こつちが手を加える方法は2つ、1つ目は放出した電気を集める場所を指定すること、もう一つはビットを指定した場所に集めること。複数の場所に一度に集めさせれば少しの間気を引くことができる。俺の安全と攻撃をどちらも行えるわけだ。

早速放出した電気を集める場所を決める、これは適当にちりばめたらいいだろう、そして念じればこの通り、そこからも自在に変化させることができるため、使い勝手は場所を選ばず、非常にいいものとなっている。

そして巻き込まれて落ちていく、次々とリタイアしていく妖怪たちにとことなく優越感を感じる、けれども耐久スペルではないので、完全にリラックスしているわけにもいかない。

妹紅のほうを見てみると、炎属性らしい、炎の翼やそこらじゅうが燃えていることからかなり高出力なんだろう、あの火力がうらやましい。

次はあそこに集めよう、ビットの編成も組み替えてみよう、次はあややって……

選択肢は多大にある、どう使うかは俺次第であるけども。

けれども同じスペルカードをずっと使えるわけではないので、スペルブレイクが来る、そこで矢継ぎ早に次のスペルを宣言する。

『雷符「レイン・クラッシュ・ライトニング」』

音が鳴りやまないほどに降り続ける雷は聴覚を狂わせ、光により距離感を狂わせる。

その中で自分に降り注ぐ驚異に気づかないまま生を終える者、気付けば手遅れなもの。とにかく終わりが近い。

妹紅も頑張ってくれているおかげで、ここら辺の妖怪は人里に特攻を仕掛けた奴ら以外はもういない。

「急いで戻ろう、人里に大きな被害が出る前に」

「わかった」

こうして2人は人里へと急ぐ。

〜そのころ人里では〜

人里はすでに混乱に満ち溢れていた、中にはただの陰陽師の人も交

じっているんで、死傷者0人には絶対的な壁がある。けれどもできるだけ損害を減らさなくてはならないために大規模な破壊を行うことはできず、妖怪側のほうは攻め入る時点で半分以上が削られている状況でもなかなか守り切れずにいた。

「ルーミア、里の入り口に回ってくれ」

ルーミアができるだけ食い止めるものの、中で暴れるのが目的（一度占拠してしまえばある程度の損傷など関係がない）の連中をすべて引き留めるのは無理があった、すでに人妖問わずに多くの死が満ち溢れている。

「紫もなにか企んではいるんでしょうけどね」

一人でつぶやくルーミア。紫のことをどう見ているのかはわからない。

俺と妹紅は人里にもどる最中に、非常にうれしい人たちと合流できた。そう。

「霊夢、ちょうどいいところに」

「あら、こんなところで何をしてるの？」

異変解決のメンバーらしい。

「人里のピンチなんだぞ」

キョトンとした顔の霊夢、そうか、紫にこの異変の本当の意味を聞かされていないのか。

「詳しいことは飛びながら話すから、え」と

白髪の女の子と頭に@みたいなしがある女の人の名前がわからない。

「え」と、そちらの二人は？」

「それよりも早く、妖怪は待つてはくれないよ」

「妹紅……とりあえず話しながら郁からついてきて！」

2人以外は状況がつかめていないまま進軍を開始する。

「……なるほど、要するにこの異変は全部仕組みられたものだったってわけね」

自己紹介も終わり、今までの流れを説明するとみんなは理解してくれたいらしい。

みんながスピードを上げたため、思ったよりも早くつけたようだ。

人里につくと慧音が出迎えてくれた。

「とりあえず、まだ中にそこそこの数が残っているんだ、それを全

部退治するから手伝ってほしい」

短いやり取りがされた後、それぞれ別の方向に駆けだした。

俺はVZ・61を取り出す、できるだけ被害は出さないように言われているから狭いところではこれが一番いいだろう。

別名「スコープオン」であるこのサブマシンガンの売りは、何といつても小ささである。

どのぐらいかというところ、旅行するとき洗面道具をまとめるポーチがあるだろう、それに入ってしまう大きさだと考えてもらいたい。威力的には少々心細いが、フルオートなものもあり、扱いやすさはかなり高いものとなっている。

なぜスコープオンと呼ばれるのかはストックを前方にたたむ動作が、サソリ野動きに似ていることからついた。

本来の装弾数は30発ではあるけれども、そんなんじや俺が満足出来ねえために売りである？小ささ？をあえて少し捨てることで、装弾数を増やしてある。けれどもこれでも普通の拳銃と変わらないのだけだ。

ともあれ俺には片手撃ちするくらいの技術はある、能力と併用してやっていけるだろう。

何とも言えない気分で路地裏を走る。

1 人目と鉢合わせした、けれども速効八千の巢にする。

2 人目は紫電を込めて蹴りつけた。

3人目は遠くにいたので能力を使って撃ち落とす。

こうしているうちにだんだん騒ぎが小さくなってくる。もう抵抗する力もないのだろうか。

……後ろか！

かろうじて避けるけれども追撃が来るそれをくぐってよけようとしたが背中に一発貫ってしまふ。

「カハアツ！ 痛っ」

霊力で爆発を起こし、撃退するもの。かなりの衝撃が俺を襲ってくる。

近くの壁に身を預け、痛みが和らぐのを待つ。

「祠雷避ける！」

この声は魔理沙か？ いったい何が……

背後で爆音がする、振り向けば黒こげの何かが転がっていた。

「気をつけないと、こんな変な所で死ぬ羽目になるよ」

「妹紅か、悪い。助かった」

後ろに迫る妖怪に気がつかなかったらしい、妹紅に借り1だな。

「少し休ませて、全身が痛い」

「そう、気をつけてね」

俺がまともにも動けるようになるころにはすべてが終わっていた、この後は博麗神社で異変解決の宴会らしい。

いつの間にか封印されて元に戻ったルーミアと紫が迎えに来てくれた。

「さあ、今日はみんなで宴会よ。行きましょう」

俺はスキマに入って博麗神社へと向かった。

すでに宴会は始まっていて、かなりカオスという言葉がふさわしい状況になっていた。

長い間続き、俺も飲むだけ飲んで食べるだけ食べて寝てしまった

目が覚めると紫と藍と神社の中の部屋にいた。

「寝起きのところ悪いけれど、私たちから話があるわ」

その一言で言いたいことを読み取った俺は少々真剣な顔つきになる。

「あなたは私たちに聞きたいことがあるでしょう、けれども私たちは答えを知っていながらも言うことはできない。私も、藍も。けれども言うべき時になったらあなたはもう既に答えを掴んでいるの、この意味が分かったらおそらく私たちから教えることはないでしょう」

「つまり、要約すると今は言えないわけがあるけど、いずれ絶対にわかる時が来るんだな」

「そう言うことね」

「だったら今知る必要もない、いつかわかる話を今無理やり聞きだす必要もないしな」

何となくは今紫が話したような状況になるとは予想はついていた。本当に知られたくないなら、紫は証拠を隠すくらいのはするだろう、それをしないのは、今知っていいことがそれしかないからだ。いずれわかるというのもそう言うことであろう。

短い話は終わりだ。

「じゃあお休みなさい、いい夜を」

「紫様、私は少し用があるので先にお帰り下さい」

そう言って藍が飛び立ち、紫がスキマに消えた。

ここは幻想郷のはるか上空、雲の上の家。幻想郷のすべてを見渡せる場所。
存在を知っているのは2人しかない、そこには2人の人影があった。

「まさか、こんなに早く藍が僕の存在に気がついてくれるとは思わなかった」

「ええ、この混沌の中にあなたの気配を見つけられたのは奇跡でした……祠雷」

祠雷であり、祠雷なその人は、藍に向ってこういった。

「僕の伝言は聞いてくれたよね？ 本当にすまなかった、君が一人前の式になるのを見届けると約束しておきながら先に死んでしまった」

雲の上を歩き、藍のもとへ寄って行く。

「僕はここから離れるだけで大変でね、彼という縛りがなくなったら、かなり困難なことになっている。だから君の方が合いに来られると助かるよ」

「ええ、いつでも会いに来ますよ」

優雅に微笑む、すると突然祠雷は虚空を見つめてそう言った。

「紫、のぞき見はよくないぞ」

「あら、ばれてしまったわ」

「ここは僕の城だからね、君がここに縛り付けたんじゃないか」

3人は神々しい雰囲気の中、話を終わらせに行ったのは祠雷だった。

「さあ、あまりここにいと良くない、今日はもうお帰り」

「そうさせてもらっわ、藍、帰るわよ」

そしてスキマへと消えていく、一人は未練がましいようだが従った。
一人残った祠雷はこう囁く。

「本当に、幻想郷は楽しいところだ」

人里防衛線（後書き）

今日中にまた投稿できました。

かなり詰め込みすぎて急展開になってしまいましたが、この話題はもう終わりです。

次回はもう別の内容になります。

次回は主人公がある大きなものを手に入れます。

フリーターというわけではないけど家を賣う

祠雷はとある決心をした、このままではだめだ、早くなんとかしなければならぬ。
そう。

「霊夢、俺も家を建てて自立しようと思う」

昼の神社に響き渡る宣言である。

本当はこのままこき使われていたら本当に将来どうなるかわからない、そういう考えからここまで至った。自立すればもうこんなこき使われる必要もない、それだけではなく自分のために使える時間が増える。

もう、前みたいに霊夢に守ってもらわなきゃだめだ、というほど弱くもない、スペルカードだって枚数も増えて人並みにできてきている。能力だって武器だってある。つまりここまで来たのだから次は自立をすべきである。

金銭面にも俺ならバイトくらい何でもなし、家だって空家の一つや二つくらい幻想郷銃を探せばあるだろう。衣食住をそろえる力もあるのだし大丈夫。

もう、のところから実際に力説を始めた、けれど帰ってきたのは話の軸を少し外れる返答だった。

「あんだスペルカードなんていつ増やしたの？」

という答えだった。

しかも俺が新しいスペルを作るきっかけを話すと、なんだか悲しい答えが返ってきた。

「あんたがやってるのはスペルカードルールを無視した戦いなの、だから枚数制限なんてものはもちろんないし、別に同じカードを使っても問題はないのよ。それに本当に適応されるなら作っちゃったらルール違反じゃない」

……もしかして俺のあの努力と緊張感はすべて無駄だったのか？と本気で思ってしまう返答でした。

そりゃあ知らない俺が悪いんだけどさ、スペルカードルールについては弾幕ごっこのルールしか教えてもらってないんだから。そこから辺詳しく教えてもらわないと困るんだけど

その前にいつの間にかはぐらかされるところだった。

「そのまえに俺の自立の話だよ！」

「あら、それならいい話があるわよ」

突然現れた紫に思わず変な声をあげてしまつても聞きなおす。

「いい話？」

〈紫視点〉

博麗神社に遊びに行ったら面白い話をしていた。
祠雷がついに自立を決意したなんて、こんな面白い話なかなかないわ。

そこで私はその一步に貢献してあげようと思ったの。
まずは彼のところに行かなきゃ。

紫は昨日訪れたばかりの場所にもう一度足を踏み入れた。

「やあ紫、また来たのかい。まあ僕も見てたから大体分かるんだけどね」

丁度いいわね、ならなおさらお願いしやすいわ。

「あなたが死ぬ前に住んでいた家をあげちゃっていいかしら」

「構わないよ」

あっさり交渉成立、さすが潔いわね。

「あんなぼろい家で満足するのならいくらでもあげよう、一つしかないけどね」

「そう、だったらあげるから。あなたも見ていたら面白いかもね」

少しだけ笑った祠雷を見つめながらスキマに消えていく紫、行先は

博麗神社だ。

「どうも掃除も済ませてくれたみたいだし、どうせ紫にあげるつもりだったんだけどな」

空に向かってふと言い放った。

「その前に俺の自立の話だよ！」

「あら、それならいい話があるわよ」

ここから近くなのだから、歩いて行きましょうか。

（祠雷視点）

山の中を歩いている、話によるとだれも住んでいないけれど、決して荒らされたことのない空き家があるらしい。何でも博麗大結界ができる前からだとか。

そんなすごい家に住めるのなら万歳三唱だ、けれどもそこまで広くなくていいから普通の家に住みたいっていうのが俺の理想なんだけ

ど……なんとなくすげえ家が待っている気がする。

そしてそんなこと思っていると本当に待っているわけで。

「すごい……神社の近くにこんな大きな家があるなんて」

「もはや広さは神社と変わらないんじゃないか？ しかも2階建てだぜ」

「あら、屋根裏まであるわよ」

……結論、外見的には俺には十分もったいない。

中は若干埃がたまっているものの綺麗なものだった、本当に空き家なのかとってしまう。

しかも全部屋見渡してみても本当にあらあされた形跡もなく、まるで前の所有者の性格を表しているような感じがする。

食べ物とかは置いていないみたいだけど、服とかはそのまま残っていた。

どことなく俺とセンスが似ているかもしれない、もしかしてこの持ち主と俺は以外に似た者同士なのかもしれないな。

ともあれ家のつくりはこうだ、一階は玄関と居間があって、そこから和室とキッチンと……岩風呂まである、よく見るとこっちは檜風呂か？ これはすごいな。

風呂はかなり立派だ、でもこんな古い家になんでこんな立派な設備があるんだろう。

紫だからで片付けようとしていた自分が怖い、慣れとは恐ろしいも

のだ。

二階は寝室と他にも書斎にほど、こちらは木が何も隠されずに出ているけども、それがどこもなく優しい雰囲気を作り出している。ただ書斎はパチユリーが喜びそうな本しか置いていない、まあ空いているスペースに俺のものを置くくらいでいいだろう。

ベランダまであるのだから驚きだ。

けれどもやっぱり大昔の家に書斎やベランダがあるのかが不思議だ。あとで紫から聞きだしてやろう。

屋根裏は普通に階段がついていたので登って行った。けれども90%物置で机と椅子があつてその周りだけが片付いている感じだ。

霊夢は途中で飽きて帰ってしまったが、別に住みたいのなら住めばいいとのこと。

宿主の許可が下りたし、住まわせてもらうかな。

紫はベランダにいた。

「紫、なんでここはかなり古い家のはずなのにこんなに立派なんだ？」

「ええ、それは最近外の世界から物をたくさん持ってきたからよ、無駄になっちゃうかと思っただけれど、あなたが住むのならば別に心配する必要もなかったみたい。電化製品とかはないけれど、結構外の世界に近いものになっているはずよ」

……何でもってきたのかは聞いちゃいけない雰囲気だな、紫が聞い

てほしくないオーラを出している。おそらくはこれも知ってはいけないことに入っているんだろう。けれどもそう言われると、確かにここに置いてある鉄製のテーブルも幻想郷にあるものじゃないよな。本当に外の世界から物を持ってきたのだろう。

「最近の大掃除も済ませたばかりだから、このままでも住めると思うわ。あなたの好きなように過ごしなさい」

そういつて紫はスキマに消えてしまった、何となくだけど、何か遠いものを見る目つきをしていた。

さて、もっと詳しく探検するか。

「気に入ってもらえてよかったよ」

「ええ、けれども思い出すわね、あなたがまだあそこに住んでいたときを」

「ああ、けれども今の僕にはここがあるしね」

「そうね」

静かに話す二人であった。

けれども、こんな現代風の家とはいっても限度はあるけれども。まあ外の世界の家に近い所に住むことになるとは思わなかった。

地味に庭まであるんだな、ベランダの下のスペースは妙に丈夫な柵で囲まれた庭がある、けれどもおそらく元はそうであったであろう植物らの残骸しかなかった。

植物などまわりの木々で間に合っている、何か使い方を考えないとな。

しかしまあ、居間の空間の居心地の良さはかなりいい。どのくらいかというと、夏場のクーラーのきいた部屋と同じくらいいい。

しかしまあ、新しい住居がただで手に入るとは思わなかった、これも日頃の行いがいいからかな？

とにかく、これだけ立派なら台風が来ても倒れないだろ、そもそも紫が紹介した家ならばろい小屋でも何かありそうで怖い気もするけど、実は幽霊が……いや、妖怪が普通に生活している社会にそんなへったくれもないか。

けれども一人暮らしには少しばかり広いかもしれないな、まあどうせ押しかけてくる連中も大勢いるんだろうし、ある意味ここで宴会

とかも開けたりするかもな。

「祠雷く遊びに来たよ〜」

ほら、押しかけてきた。この声はルーミアか。

「なんだ、咲夜もいるじゃないか」

「いては不満かしら？」

玄関を開けると、そこにはルーミアと、かごを持った咲夜がいた。

「ほら、お嬢様から新築……ではないけれど祝い品よ」

「紅魔館にまで伝わってるのか、それにルーミアまで知っているのは何とも……まあ情報が早いと褒めるべきところなのかな？」

祝い品は食べ物類だ、ちょうど食べ物もないし助かった。

「ちょうど昼時だし、俺が料理するから食べていくか？」

こんな食材貰いっぱなしというわけにもいくまい。

「ならご馳走になるうかしら、少しくらいプライベートな時間を楽しむように言われていたし」

「食べる〜」

一名はご飯目当てのようだが、まあルーミアにもこないだのことが

あるし、作ってやるか。

「居間のテーブルで待ってて」

そしてしばらくの間なかなか見られないメンバーでの食事兼雑談会が開かれましたとき。

（霊夢視点）

あいつがいなくなった瞬間に、面倒事を押し付ける奴がいなくて大変だわ。

元は全部一人でやっていたことではあるんだけど、やっぱりしばらく楽すると面倒な事に早変わりするわね。

「おっす霊夢、祠雷がいなくなって寂しいか？」

魔理沙が早速来たわね、まあいつかネタにされるとかは思っていたけど、今日いきなり伝わってるとは思わなかったわ、ここにはどういふネットワークが構築されてるのかしら。

「馬鹿言ってるんじゃないわよ、むしろ静かになっていい感じだわ、ただ雑用係がいなくなったのは惜しいわね」

「そう言って寂しいのを隠すと、逆にばれればだぜ」

こいつは断りもなしに人の家に入ってきて、私をからかいに来たのかしら。

とはいいつつも追い返さない私も私よね、まあ昔からのことだしもう慣れちゃったけど。

そう言えばこいつはあいつのところに行かないのかしら？

「あんたはあいつの家に行かないの？」

「場所までは分かんないんだ、案内してくれ」

案内ねえ……図々しい奴だわ、まあ何となく今行けばいいことが起こりそうな気がするのよね、しかも本能がなにかしらの食材を持って行けと訴えているわ。

適当にかごに詰めていきましょう、そうね、奮発して秋刀魚でも持って行こうかしら、海がないのにどうやって仕入れているのかは地味な長年の疑問なだけけど……まあ紫が一枚噛んでいるんですよ。

もうすぐ冬だし、これが最後になるかもしれないわね。いつ雪が降ってきてもおかしくない気温だし。雪が降らないうちにたかっときましよう。

魔理沙にもついでに案内すればいいでしょうし、わたしもどんなふうになったか気になるところもあるし。でも飽きてすぐ帰ったのはまずかったかしらね？

「まあいいわ、行きましよう」

「センキュー 霊夢、その籠の中身を見るとさすがだと思っぜ」

「あら、もしかするとお祝いかもしれないじゃない」

「霊夢がそんなことするはずないぜ」

わかってんじゃない。

（祠雷視点）

ん？ またお客さんじゃないか、今度は誰だろう？

玄関を開けると霊夢と魔理沙が立っていた、なぜか霊夢がかごを持っている、まさかお祝い……いや、霊夢がこんなことするはずもない。おそらく料理を作っただろう、匂い的に料理中なのはばれてい
るはずだ。

「これで料理を作ればいいんだろう？」

「わかってるじゃない」

「お邪魔するぜ」

俺の許可が出る前にずかずか入り込む2人、まあそれらしいと言
えばそれらしいけどな。

けどまあ早速初日からお客さんが多いな

結局咲夜と霊夢の差し入れ（霊夢のは差し入れではない気がするけれど）でかなり豪華な昼ごはんになった、ルーミアなんか一心不乱に食べてるし、そんなにおいしいのだろうか？

「あら、うちで雇いたいくらいのおいしさね。今度本格的にバイトでもしてみない？」

「機会があつたらな、それに心を読むな」

なんだかんだいって俺はこれが楽しいんだってわかる、外の世界では絶対になかった日常を俺は手に入れたんだから。そう、こうやってみんなでわいわい騒ぐなんて想像したことなかったからな……

「なに辛気臭い顔してるのよ」

「なんでもないよ」

5人で騒いでいていつの間にか夜になっていて咲夜が慌てて帰ったのは別の話。

一人帰るとみんな帰る法則が本当にあることを学んだあと、よくわからないけれど法則を無視して残ったルーミアと話し込んでいた。

「これからもご飯食べに来るからね」

「お前はご飯目当てだろ、まあ作ってやるけどさ。明日の予定は大買い出し祭りの予定だし」

本当に食料的にも色々やばい。衣食住の食が抜けている状況だ、まあ金銭的に余裕があるので十分やっていけるのだが。

まあ今までも半分独り暮らしのようなものだったので、家事全般はできるし、やりくりもできるつもりだ、これからなんとかやっていけるだけの余力はあるだろう。

「こないだは助かったよ、ルーミアがいなかったら一人で突っ込むことになって間違いなく死んでたと思う」

「気にしてないよ、私だっておいしいものの為にかんばってるんだから。祠雷は食べないって決めたしね」

まあ結局食べ物目当てなんだな。

「それにこの生活も気に入ったし」

「そうか、それは俺もだよ。みんなで騒いで暮らすことってこんなに楽しいものだったんだな、いままで損してたかもしれない。友達がいないくらい、なんともないと思ってたけど、一匹狼は孤独なものだったんだな」

そういうとルーミアは若干恥ずかしそうに……

「だったら友達になってあげる、これでこれから寂しくないでしょ」

「ああ、ありがとうな」

まだまだ夜は長い、別に変なことをするつもりはないけれど、このまま夜が続けばいいな……なんて少し思ってしまった。
いや、決してルーミアのことが好きだからとかじゃあない、なんとなくこの雰囲気がいいんだよ。

「それに、俺にも今は友達がたくさんできたしな」

あつ、雪が降ってきた。初雪だな

フリーターというわけではないけど家を賣う（後書き）

なんだかんだいってちょっとしんみりムードな終わり方。

今回は少し時間を飛ばして雪が降り積もったあたりにしようと思います。

そうですね、だいたい2週間くらい飛ばそうかと。

誤解されそうなので書きますが、祠雷はルーミアのことが恋愛的に好きというわけではありませんので、そんなロリコンではありません。

まあ今度からはちよくちよく〇〇視点〇〇という感じで入ってきますので。

ただそれがなくても他の人の視点に変わることもあります。それは作者がそのほうが味が出ると思ってる程度の認識で構いません。とくにもう一人の祠雷や紫に移るときに多いと思います。

バトルはしばらくなしの予定です。

ではまた次回。

ある冬の日の幻想郷

念願？ のマイホームを手に入れて、あれから2週間がたった。特に異変も起きずに、平和な毎日だった、あれから雪がつもって、幻想郷は白一面に覆われた。

しかし、そんな中でも俺自身は確実に成長したつもりだ。まず能力、いままでの使い方のほかに2つの使い方が増えた。

1つ目は周囲の物体同士がほんのわずかで、意識しないと感じとれないような静電気を発生させるようにして、その動きを読み取るもの。風などで木々がこすれあってもまばらにしか発生しないが、規則的に動くように発生すればそれは生き物だとわかる。

まあまだそれだけで確実に何かわかるわけじゃない、あくまで生き物が近くにいたのがわかる程度だ。

更にもう一つは、これは直接手で触れなければ効果はないけれど。触れた部分に電気信号を一時的に流れなくすることができる。

一番効果があるのは首である。どんなふうになるかというところ、首がすわらなくなつて、全身が？ガクツ？という効果音がふさわしい崩れ方をする。

しばらく立ち上がることもできなくなるらしい、魔理沙いわくいきなりされたら何が起きたかわからないとのこと。

だから実験台になってやるなんて言った時、止めた方がいいって言ったのに。

霊力に関しても、そこそこの進歩があった。

まず、霊力を使ってスペルカードを強力にする（弾幕ごっこ以外仕様するとき）こと。

霊力を使って爆発を起こしたり、空を飛ぶことに関しても効率はかなり良くなった。

特に飛ぶときなんかブースターのように使える、一時的に魔法沙を抜かせるほどだ、あまり連続では使えないので競争したとして勝てるのは短距離走だけだが。

それでも生活はかなり便利になった。ことには変わりはない。

俺自身の生活で言えば、香霖堂でバイトを始めた、内容は月1で香霖堂の電化製品（ほとんど新しく入荷したもの、どこから取ってきているんだろう？）を動かす俺にとっては簡単な作業、けれども電気を扱えない霖之助にとってはかなりすごい事らしい。

月1だけ一回の給料がすごいのであまり変わらない。

まあ個人的に寄った時にも同じことをしているので、実際には月に4回くらいか。

それでも十分すごいことなのだろうが。

この間魔理沙に案内されて河童のにとりに会った時に有料でマガジンごと作ってくれる約束をしたので、出費自体はあまり贅沢をしなくても異変が起これば出るかもしれないという、まさに不確定要素がある中で。このまとまった収入は大きい。

そして非常に個人的なことだが……

「祠雷、今日も来たよ」

我が家にはルーミアが入り浸っている、他の妖怪とかとは夜に遊ぶため、昼間はここに来るらしいけど……いつ寝てるんだ？ そして毎回俺が食事を作る、ルーミア曰くなんだかまた食べたくなるらしい、なんだその麻薬もどきは？

「今日は何食べる？」

「祠雷のお昼ごはん！」

最初は今日も来たのか、とか言っていたんだけど、いつしか今日は何食べる？ に変わって行った。もう諦めているのかもしれない、まあ楽しいのは大歓迎なんだけど。

おれの財布も少しは気にしてくれ、このまま異変が続かなかつたらいいけど、もし頻繁に起こるようなことがあつたら地味に辛いんだから。

まあ作っちゃ俺も俺なんだけどさ。

ルーミアとテーブルをはさんでの朝食、これで10日連続か。

しかしルーミアも本当に大食いだ、この小さい体にどうやって入っているのか気になる。

しかし封印されているルーミアとされてないルーミア、たったそれだけ……たったと言えるのかはわからないけれど、それだけの違いでここまで変わるのか、なんだか考えれば考えるほど幻想郷は不思議なことであふれている、いや、だから幻想なのかもしれないな。

「何見てるの？」

「いや、なんでも」

そして来客によって2人の時間は終わる。

この声はおそらく霊夢だろう、こんな中にわざわざ来るんだから重要なことなんだろうか。

「どつした霊夢」

「寒い！ 早く入れなさい」

霊夢が震えながら立っていた、ドアが開けばすぐにさ俺の声も聞かずに走っていくのはさすがだぜ。

霊夢に暖かい飲み物を出して、とりあえず要件を行ってもらおう、この家の温かさが良くわかるよ。

「どつした？ 今日は何があるのか？」

「ええ、たまには神社以外で宴会をやることになってね、今日は紅魔館で宴会よ」

紅魔館か……今思うと行くのは久しぶりだな、いつも宴会は神社だし、わざわざ近くまで寄らないし。

けどあそこの宴会ねえ、確かに食べ物とかはおいしいと思うけど、どうせどんちゃん騒ぎなのは変わらないんだろうな。まあ集まるよいうな連中は幻想郷のどこでやっても同じように騒ぐんだろうな、なんせ神様まで一緒にいなくて騒ぐくらいなんだから。

まあ俺が行かない理由もないし、今日は紅魔館かな？

「ルーミアも来るか？　ここよりは絶対うまいものが食えるぞ」

「そーなのかー」

「あら、久しぶりに聞いたわね、そーなのかーって最近言わなくなっただと思ったのに」

……もしかしてルーミアの本当のキャラはこんな感じなのかもしれない、俺が封印解いたから言わなくなったとか……なんてないよな
(いいえ、事実です)

「とりあえずルーミアも行くんだな？」

「うん」

「ということだ」

「そう、ならもう帰るわね、夜7時からだから。じゃあね」

食べるだけ帰ってすぐ帰るのかよ……まあどうせすぐに会うことになるんだけどさ。

「どつせなら、うちに夜までいるか？ 暇つぶしくらいはできるだろ」

「そうしようかな」

俺は暇つぶしのために、部屋まで走って行った。

2階にある部屋の一つは俺の部屋になっている、まあ寝室と書斎を自室として使うのは何となく嫌だしな……特に書斎。まあとりあえず自分の部屋があることはいいことだ、文句は言ってもらえない。

適当に香霖堂でもらった（強奪したわけではなく、ただの新住居のお祝いとして外の世界のボードゲームをくれた）トランプを持っていく、これならルーミアもルールがわかるし、途中でだれか乱入してきて人数が増えても大丈夫。

ちなみにUNOとかオセロに将棋にチェスなど、本当にたくさんくれた、客とバイトには優しい人だ。

居間に戻ってテーブルにトランプを置く。

「何する、大富豪とかには少ないし……スピードとか？」

「うん、それでいいよ」

とりあえず地味に白熱した戦いが始まる

勝負はいつの間にか二人ババ抜きになっていた、スピードでは勝率60%というそこまできいいわけでもないけど好成绩を残した、最初は2人ババ抜きとかはつまらないだろうとか思っていた、けれども最初にどばつとカードを捨てる時の何とも言えない気持ちや、さつさかさつさかやり取りできるため、なんとも言えない爽快感がある。まあそれも3人目が来れば終わるわけだけれど……

ババ抜き2回目の間に、魔理沙とアリスがやってきた、最初に今日の宴会について聞かされて、霊夢に聞いたといったら魔理沙は少し悔しそうな顔をした。

まあ本題はアリスを連れてくることだったらしい、アリスも最初は家について触れるあたりに何となく他のメンツとは少しばかり違う雰囲気というかそれらしいものがある。

まあ結局はトランプ大会に参加するんだけどさ。

「さて、4人になったために改めて何をやりたいか聞こうと思う。俺はアウトブレイク」

「私は大富豪だぜ」

「ダウトがいいわ」

「このままババ抜きでいい」

さてさて綺麗に意見が分かれたけれども……ここはやはりあの方法

で決めよう。さあ皆さん準備はいいか？

「最初はグー、じゃんけんポン！」

困った時のじゃんけんだよな、ちなみに勝者は俺で、アウトブレイクになりました。

「7が3枚、これはもらった」

「げっ、4点カードが最高だ……」

「日頃の行いかしらね」

「わはー」

なんてやっているうちにもう5時になるわけで……

「ちょっと早いけど行くのが、あんまりギリギリになるのも悪いし、それにどうせみんなが集まれば時間なんてどんどん速くなる」

「そうね、もうここを出ましょうか」

俺たちはまだ日が沈みきらないうちに紅魔館へ向かった。

「しかしお嬢様、本当に祠雷は来るのでしょうか？」

「来るわ、彼が来る運命になっているのは確かだもの、ただ選択によつてはひどい目にあうみたいね」

他人事のように聞こえるけれど、実は心配しているレミリアである。これもカリスマ？ であろうか。

「今日は彼の運命をもう一度近くで見るとするために開くんですから、初めて見た時に少しだけ違和感を感じた、その意味がようやくわかったのだからね、彼は運命を何者かに塗り替えられた。私はその真相が知りたいわ。彼の友人としても、運命が見える者としての立場から」

レミリアは、窓の外を眺めて。

「ほら、噂をすればなんとやら」

「一番乗りでしたね」

「準備を急ぎなさい、来客をあまり待たせるのはよろしくないわよ」

「はい」

咲夜は準備のためにどこかに消えた。紅魔館の主としてもこういうときくらいは威厳を保っていたところではあるため、できるだけ準備する姿を見せるのはよろしくない。

まああくまでも準備は人間と妖精がやるのだが。

「あなたの運命、近くでゆっくり見せてもらおうよ」

屋敷の中に迎え入れられる祠雷御一行をみながら、誰につぶやいたのかわからないような風に言い放った。

ただ……寝起きなために少しばかり眠そうな顔をしているので若干カリスマブレイクはしているが。

「まだ準備中みたいだな、さすがに1時間半も早く来るのは早すぎたか。かえって忙しい時間に来ちゃって迷惑かな、これじゃあ」

時間までは適当に敷地内を見学していいとのことなので、まあ図書館に向かう。

図書館に入るとちょうどパチュリーがいた。

「あら、随分と早いよね、宴会はまだまだでしょう」

「だからここで時間を潰そうと思ってね」

「そう、なら好きに見て言っていていいわ。どこかの白黒みたいなお話をしないのならね」

パチュリーはどこか疲れているのか足取りがおぼつかない、そのまま倒れて行きそうな勢いでどこかに行ってしまった。

何日か徹夜を続けたのだろうか？ けど魔女はそれくらいでへばらないって聞いたしな。まあ個人差があるのだろうか。

「まあ好きなように回ればいいか、適当に外の世界の本でも読みあさるかな」

前案内された場所は覚えていて、俺は若干戸惑いながらもたどり着き、何故かしらあったちようど幻想入りする前に読んでいた小説の最新刊（確か俺がこっちに来た2日後の発売されたはず、なぜ幻想入りしているのかはわからないけれども）に手をつける。

120ページくらいの所で突然後ろで足音が聞こえた。小悪魔か？

振り向くと小悪魔ではなくいろいろな色をしている翼の女の子がいた、レミリアとどことなく似ている気がする。そして俺の目を見て言った。

「ねえ、あなたはだあれ？」

ある冬の日の幻想郷（後書き）

まあ、わかるとおもいますけど最後はフランです。

ネタばれ関係なしに先に言いますが、バトルは本当に当分ありません、もしあっても雑魚妖怪などが相手なのでストーリーにほぼ100%関係ないものです。

この雰囲気でなんとなくバトルを連想させてしまおうと思うので一応。

しかし最近思うのが、感想とか活動報告でアンケートを募集しても人が集まらないであろう、ということですね。

出してほしいキャラのアンケートとかもやってみたいんですけど…
…もう少し知名度が上がったらにしようと思います。それまでは…
…できるだけマンネリ化しないように頑張っていこうと思います。
けれどもどのくらいの知名度があればいいんでしょう？ できれば
教えていただけると助かります。

ではまた次回。

自分の運命と交差する因果

「俺はこの宴会に参加しに来たんだよ」

「そう、ならお客さんなんだ」

お客さん？ となるとこの住人になるのだろうか、けれども前来た時にはいなかったし、偶然であろうか。まあまだわからないけれども。

まあ、とりあえず背中がレミリアに似て……はいないような、けどまあ同じ感じはするし俺は吸血鬼と見た。

「ところで何か用？」

「ううん、普段はいない人だったから」

やっぱりここに住んでるのか、普段はつて言えるくらいなんだから、それがそのくらいここに入り浸ってるのか……まあそれは考えずらいかな。

しかし見れば見るほどレミリアにどこか似ている気がする、何でだろう？

「私は咲夜に呼ばれてるから、じゃあね」

なんだか寝起きの雰囲気がある、まあ咲夜に呼ばれてるってことはやっぱりここに住んではあるんだろう、あんなに気軽に言っているんだし。

今夜の宴会、思ったんだけどここで開かれんならパーティーの方が俺的にしっくりくるなあ、こんな西洋式の館で宴会はどうもイメー

ジが……

まあ騒げればどうでもいいんだろつけど。そんなこと気にしてたらやっつけていけないな。

「まあ、そのうちわかるだろう」

再び本に目を通す、けれども……閉じちゃった、どこまで読んだっけ？

けれども楽しい時間は流れるのが早いもので、1時間程度ならすぐに来てしまう。

「ああ、もうこんな時間か。もうそろそろ集まるころかな」

本を置いてふわりと飛んだ、そのまま図書館から出ていく。そう言えは小悪魔を見なかったな、彼女は彼女で忙しいんだろつが。

図書館を出ると、もう既に騒ぎ声が聞こえてくる、30分前には半分以上は集まるし、ここまで騒ぎが聞こえるくらい的人数はもう来ているのだろつ。

これは少し急がないと、いつ始まってしまってもおかしくはない。少し速めに飛ぶ、一番乗りしておいておいてけぼりはかなわん、それにルーミアが暴走（手当たり次第に食べちゃう的な意味で）しないようにするのはいつの間にか俺の役目だ、みんなが必要としてくるのかは謎だけど、ないよりはましなはず。

パーティー会場に着くと、そこにはたくさんの人……というか俺の知ってる人ばかりではある、これは偶然か？ まあ面識のない人もいるし、人に限ったことではないみたいだけど、まあ吸血鬼主催だし、妖怪とかがいてもおかしくはないか、博麗神社にも堂々と来るくらいなんだから。

なんてことを考えているとレミリアの登場である。これは案外危なかったのかもしれない。

もしかすると本当に一番乗りが遅刻……これはなんか全員が遅刻したみたいだな。

まあ、こうして間に合っているんだし、少し早く始まるのもいつものことだし、気にするほどではないか。

それにもう食べ始めてる人（妖怪その他）もいるのだし。レミリアが宣言するまでもない気がするけど。

「さあみんな、夜が明けるまで楽しみましょう」

カリスマがすごい、これが本気のレミリアなのか。俺もあのくらいの威厳をもってみたい、あの普通のセリフでカリスマが出るようになっていけば、俺も成長したってことか。まあせいぜいそんなのを目指してみるかね。

さて、この盛り上がった空気の中で一人でいるのも何か悪いし、適当なところに混ざるか、まずはルーミアでも探るか……「祠雷様、少しばかりお時間をよろしいですか？」

……咲夜か。

丁寧なのは、おそらく仕事の顔とやらであろう。深く頭を下げるその姿は、なんだか美しいという言葉が一番合うような美を持っている。

「わざわざどうした？」

「いえ、お嬢様が呼んでおりまして」

レミリアが？ いったい何の用だろう、まあ行けば分かるか。

「わかった、案内して」

レミリアは2階のブランドの所で待っていた。

咲夜が俺を連れてきたというと、空を眺めるのをやめて、こっちを向いた。

「ありがとう咲夜、下がっていいわよ」

そして音もなく消える咲夜、こんな時まで気を使っているのはさすがであろう。

「ここに来てもらったのはね、あなたの運命を近くでよく見たいからなの」

「運命を。確かにレミリアは運命が見れるけど、何で俺を？」

レミリアがわざわざ呼び出してまで俺の運命を見たがる理由が見つからない。ただの興味本意ではないだろう。何か理由があるはずだ。

「それは、あなたが運命を塗り替えられているから」

……一言で表そう、意味がわからない。運命が塗り替えられた？
それって簡単にいえば上書きみたいなものだよな？

「どういうことだ？」

「そのままの意味よ、あなたの本当の運命は今のあなたの運命に塗り替えられた。これが事実なの。今、あなたの運命をもう一回見直したわ、けれどもほとんどんんん確信に変わっていくのだもの、そして運命が塗り替えられたのは、本人も周りの人も、気付けない。私のように運命が見えなければね」

言っていることは理解した、要するに自分の運命が変わっているけれど、皆気づけていないんだな、というより気付けない。どうやって証明しているのかは……レミリアしかわからないだろう。俺に理解できる代物じゃないことくらいはわかる。

「それに何の意味がある？」

「本当は歩むはずのない道を辿ることになるわ、それだけじゃない、その塗り替えられた運命に少しずつ、少しずつ染まっていく、それはあなたを変えるわ。どうなるのかは私にも具体的にはわからないけれども何かが変わるのは事実。とりあえずはあなたの普段の姿を見ておきたい、私にとっては2つの意味でね、運命という面だと、あなた自身という面で」

……正直わかった気になってだけかもしれないけれど、言いたいことはわかる、おそらくはこの宴会も俺の観察のためと見ていいだろう、気分は悪いけどやらなきゃならないことなのはわかっ

ている。なぜ話したのかはわからないけどな。
要するに俺のいつも通りを見ておきたいのだから。ならば俺は何も
気にする必要はにわけか。

「じゃあこれからは普通に楽しんできなさい、帰りにもう一度寄っ
てもらっけれど」

「なら、これからは楽しませてもらよ、実は今も空腹で死にそうな
んだ」

何となく悪いから言わなかったけれど。

とりあえず俺はさっき案内された通路を歩いて戻ろうとすると……
部屋を出た瞬間に誰かとぶつかった。
ずいぶん背が低いな、と思いながら下を見ると……

「あつ、さっきの女の子（お兄さん）」

「あらフランクじゃない。どうしたの？」

「あのね、服の背中が破れちゃって」

良く見ると右肩のあたりが少し破けている、何かに引っかけた跡だ
な。

けどそれよりも……

「なあレミリア、その子誰だ？」

「あら、そういえば紹介していなかったわね。この子はフランドー
ル、長いからフランクって言う人が多いわね、私と同じ吸血鬼で、私

の妹よ」

妹さんか！ どうりでどこか似ていると思ったら、まあ吸血鬼だっ
ていうのは当たっていたし、俺の観察力も腐ってはいないというこ
とか。

「ところで、さっきのって言ったわよね。どこかで会ったの？」

「ああ、図書館だね。すぐに咲夜が呼んでいるからと行っちゃった
けど」

双方疑問は解決、するとレミリアがポケットからベルを取り出して
鳴らす、すると音もなく咲夜が替えの服を持って現れた。

「いいでしょう、このベルは持っているものがお互いにどちらかが
鳴ったのかわかる魔法のベルよ」

いいなそれ、インターホン代わりに使えて便利だ。

咲夜がフランをどこかに連れていく。

「まあとにかく、これからは好きにしていいわ私も参加するつもり
だし。行きましょう」

そういうと、レミリアはすたすた歩いて行った、俺も置いて行かれ
ないようについて行く。

会場に行ったら若干飲みすぎて脱落实味のやつもいる、俺はそこま
で飲まないし、ワイングラスでそんなたくさんがぶ飲みできるわけ
でもないけど。

すると魔理沙に声をかけられた。

「こっちで飲み比べがあるから、全員強制参加だぜ」

若干ろれつが回らない声でそう言われた。

飲み比べとはいっても俺はそんなに飲めない………というかまだ食べてない。

けどまあ全員参加というし、直ぐに皆つぶれるだろう。俺も参加するか。

そして、結局優勝も何も決まらないまま全員グロッキーになって中断。結局は普通に戻ったけれど。

「魔理沙、少し外に行ってくる。風に当たりたい」

「そうか、気をつけるよ」

とりあえずたくさん腹の中にも入れたし、夜風に当たりたい、この酒臭いのはまだ慣れないな。

外に出ると、そこにはフランがいた。さっきとは違う服を着ている。

「どうしたの？ こんな所で」

思わず声をかける。

「ああ、さっきのお兄さん」

「祠雷でいいよ、俺の名前だ」

「なら祠雷って呼ぶよ」

ああ、お兄さんより名前のほうが俺にとっても気が楽だ。

しかし何でこんな所に一人でいるのだろう、皆が騒いでいるなかに入りずらいわけでもあるのだろうか、ここに一人でいたら、寂しいだけだと思うんだけどなあ。

何か理由があるとしても聞いておきたい、もし仲間に入りずらい、とかだったら気まずいしな。

「あのね、どうしても皆の中に入りずらいの。私は少し前までこういうところに出なかつたからあんまり話したことがある人もいなくて、魔理沙に誘ってもらつたけど断つちやつた」

……なるほど。俺と同じことをやっているのか、一人のほうがいい、という理由ではないけれど、輪に入れなくて困っている。

俺がこうしているんだから、フランにもできるはずなんだけどな。なら……少し恥ずかしい気もするけど。

「なら俺と一緒に回らない？」

「えっ」

「俺だって少し前までは一人だった、けどこうして皆とばかり騒ぎしてる誰でも簡単になじめちゃうものなんだよ、この宴会に集まって

いる人たちに、細かいことを気にして誰かをのけ者にしようなんて考える人なんていないさ、俺だってもとぼっちなんだし、最初は仲間同士仲良くやろう」

ああ、何か言いきったけれどこのセリフすんげえ恥ずかしい。

まあ、これで何とかなるのならお安い御用だけだな、何となくこういうことは放っておけないし。

「なら、一緒に行ってもいい？」

「ああいいぞ」

何かを決心したかのような顔つきになり、俺に近付いてきた。

俺がなかに歩きだすついてくる、二人でなかに入って行った。

しばらくするとすぐになじんでくれた、やはり食わず嫌いだったの
だろう。

元気いっぱいに魔理沙のところに行ってくると走って行った、魔理
沙とは仲がいいのだろうか。

けどまあ、そろそろ宴会自体も終わりか。もう日付が変わっている
し。咲夜たちが片付けを始めた。

おっと、レミリアのところに行かなくては……と思つとこちらに手を振るレミリアを見つけた、おそらくはついてこいだろう。そちらの方に走っていく。

案内されたのは先ほどのベランダであった、レミリアはゆっくりと椅子に腰かけた。

「フランのことは感謝しているわ、今日、あなたが少し関与するだけでこんなにもなじんだ。もう少し早く私もあしていれば、と思うと何とも言えないけどね」

俺はただ当然のことをした、というよりは自分のためにした、の方が大きいのかな。

「まあ本題に入りましょう、あなたの今の状態は大体覚えたわ、明日後日にどのようになるか、というわけではなく。おそらくゆっくりと変わっていくでしょう。まあ、少しずつ変わっていくのは私が見ているから安心しなさい、おそらくは少しだけなら気づく人もいますでしょう。極端に体格が変わったり、しゃべり方や性格が変わったり。現にあなたも背がかなり伸びているわ。まあこれはさすがに気づいているでしょう。とにかく、あなたは今は何も気にしないでいいわ」

俺の急成長の原因はそれが、納得……はあんまり行かないけれども事実なんだろう。

「とりあえず、今日はもう遅いし帰らせてもらう。今度会った時に

は頼むよ」

「ええ、今度来る時も私に顔を見せてね。一念には念を入れておこうというわけよ。まあそれがわかったとしても止める方法は私にはない、まあ探すのには協力させてもらおうわ」

「そうか、ありがとう」

そう言うってから、俺はもう既に真っ暗な空に飛び出した。
ルーミアは……一人で帰れるだろう。

郷の話については、とにかく今は深く考えないようにしよう。ここは専門家に任せておけばいい。レミアが専門家かどうかは知らないが。

なんてことを考えながら、夜の冷たい空気を突っ切る。それには何とも言えない心地よさがあった。

自分の運命と交差する因果（後書き）

えーと、いまさらですがレミリアは運命を見ることができると設定でまあ都合がいいですけど、何が起ころかは具体的にはわからないです。

フランは出歩くようになったけれど、あまり紅魔館の外とは交流がなかった設定です。

紅魔館勢は主人公側（真相を知らない側）です。

まあ知っている側は人数がかなり少ないですけど。

他にはどっちつかず、もありますね。

とにかくまた次回。

偶然ではない既視感

「あの二人の居場所が分かったわ」

紫は突然現れてそう言った。祠雷には紫の笑顔の奥にある嬉しさが伝わった、それはそうだろう。僕と同じでもう二度と会えないと思っていたはずだ、それならば僕と同じリアクションをしたっておかしくはない。

「そうか、会いに行くのか？」

「ええ、だから今日の夜までに準備しておいて。あなたも連れていくから」

さらりと僕にとっての死刑宣告を言うなあ、ここから離れるのも辛いつてのに。

「まあ頑張るよ」

その言葉を聞くとすぐにどこかに行ってしまった、相変わらず気が早い。まあそれが彼女であるのは出会ってすぐにわかったことだし、それよりも今は自分のことを考えないといけない、断ったとしても連れて行かれるだろうし。少しばかり張りきらないといけないな。

大きく伸びをすると、あくびが出た。

〈幽々子視点〉

私は長年疑問に思っていることがあるわ、それは幻想郷ではトランプがはやっているけど、一番強いのは誰なのか？
紫が昨日心当たりができたって言うていたけど、誰なのかしら？
今度こそ外れじゃないことを祈るわ。

「幽々子様、朝ごはんですよ」

まあお腹もすいたし、あとで考えましようか。

〈祠雷視点〉

……今の状態を一言で表すと、特に何もすることがない状態である。
こういう時に限ってルーミアも来ないし、平和なのはいいことなんだけどな。

「はあ、こういう時に限って誰も来ないんだからなあ。どうせなら
霊夢とか魔理沙の襲撃もこういう時ならいいのに、大歓迎だよ」

「なら私の襲撃も大歓迎なのかしら？」

……聞かなかったことにしよう。

「あら、つれないわね。今日は一緒に白玉楼へ行くお誘いですので」「白玉楼、たしかこの前の異変の時に妖夢と幽々子が住んでいるって言っていたな。」

確か冥界にあるらしい、居るだけで死に近づくらしいけど、別に俺が行っても大丈夫とのこと。なんでもみんな普通に宴会とかしてるらしい、けどまあ長くいないほうがいいのは確かだろう。

「宴会でもあるのか？」

「いいえ、あなた個人がお呼びなのですわ。おもに私が。詳しい事情は今から話しますので」

そついうと紫の説明が始まった。

ことの発端は幽々子と妖夢と紫と藍でトランプをしていらことらしい、そこから幻想郷で一番トランプがうまいのは誰かってことになった。

そこである程度上手そうな人を呼んだけれど、みんなそれなりだった。

そこで紫が目をつけたのは俺らしい、なんでもこの間のルーミアと魔理沙とアリスと4人でやったアウトブレイクで俺が8戦8勝だったのを見ていたらしい。

どうして見ていたのかは聞かないでおくけど、とりあえず俺も候補に入ったと。

まあ、俺は昔からアウトブレイクをすると、かなりすげえ幸運になつて。ブレイク宣言とかがバンバン当たる、もちろん家族3人でやつたんですよ。悲しい事に。

まあとりあえず俺はあのゲームだけ異常なほど運がいいのだ。おそらくそれは幻想郷でも変わらないのだろう。

「なるほど、そういうのなら別に行ってもいいけど。暇だし」

「そうと決まれば一名様ご案内ね」

まさかいきなりスキム……はい、そのまさかでした。落ちながらも冷静に考える俺でした。

スキマから落ちた先は白玉楼だった……ついでにもっとくわしく言えば縁側の幽々子の隣で、お茶とお饅頭を持ってきていた妖夢の目の前、要するに絶妙な間のスペースに頭から落ちて絶妙な雰囲気ブレイクをしたわけだ。

「え〜と、祠堂です、ご無沙汰しています」

そこで現れた紫の存在で、ようやく何が起きたか理解したらしい。

なんだかんだで事情の説明があり、いま俺たちはテーブルを俺、紫、

藍、妖夢、幽々子の5人でテーブルを囲むことになった。

どうしてこうなった……というわけではないな、俺も納得の上だ。

「早く配って〜」

おっといけない、そう言われてちゃっっちゃかトランプを配る。

順番はさっき説明した順、いつの間に藍が来たの？ という方、俺と同じ方法で連れてこられました。実は苦勞人らしい。見ていてわかる。

数合わせのカードを抜いた、さて全員分配り終えたぞ。

「さて、始めましょうか」

とりあえず全力で行く。

「ブレイクするから」

そういつて引いたカードは1、7、9、Q。ブレイク成功のためにQと場の7を入れ替える。

「なかなかやるじゃない、私は無難にするわ」

「くっ、やっぱり4枚はやめるべきだった、紫様の2枚の意味が今頃……」

カードを引くとかなりつらそうな顔をする、紫は上がって、藍は逆に下がったか。

「これは……」

妖夢はどっちとも取れるが……若干笑顔になっているな、7でも引いたか。

「あら、私もブレイク成功ね」

そういつて藍のスペアと交換する、おい、さすがに可愛いそうだからかなり引き運が悪い……

「4、5、5、6、6、7、7、7、8、J、俺が1番だろこれは」

「なんなのよその7が3枚って」

第一回戦は俺の圧勝であった。まあ引き運がいただけなんだけどな。

その後もとりあえず4連勝させてもらった。

藍なんか意気消沈してるし、紫も信じられないという顔をしている、妖夢もおんなじような顔で、普通なのは幽々子だけだ。まあ一番信じられないのは俺だよ、なんでってこんなに勝てる理由が自分でもわからないんだから、まあいつか品切れになられるのもいやだけど、だって自分でも楽しいんだし。もしかして俺って隠れS!？なんてことはないか。

「とりあえず、彼が間違いなく幻想郷最強なのは確かね、他にもこ

んなに強いのがいたらわたしでもやっつてられないわ」

「そうね、本当にすごい心当たりを連れてきたみたいね」

なんだかんだいってもみんな楽しければ結果オーライらしい、約1人戻ってこれてないのがあるけど。藍はずっと最下位だったからなあ。シヨックくらいは受けるだろうが。

「しかしまあ、今度もまた暇になっちまったな」

結局皆嫌になってトランプはやめたし、こればかりはどうしようもない、負けようと思わない限りは負けられないんだから。これが弾幕ごっこだったらどんなにいいことかわからない。まあ紫あたりにはそのくらいの余裕があるだろう。俺とは全然違うんだから。

けどさつきから気になるのが妖夢の腰の2本の剣のことだ、二刀流というものだろうが、どうしてもどこかで見た気がしてならない。うくんこの妙な既視感、絶対にどこかで見たことが……いや、むしろなんかでやった気がする、なぜだろう。

「祠雷、何を見ているのかしら？　もしかして妖夢に一目ぼれしちゃった？」

紫はさらりと誤解されそうな発言をする、いまなんかどっかからみよんって聞こえてきた気がするなあ。気のせいだろうか。

まあ気のせいだろう、けれども……

「なんか二刀流にすごい既視感があるんだけど、何でだろう？」

「実際にやってみればわかるんじゃないかしら？　妖夢くちよつと

来て〜」

なるほど実際に……ってちょっと待て！ そんなことしたらとんでもないことになる。

俺がいきなりそんなことできるわけないだろう、幽々子さんもいきなり話に入ってきて変なこと言わない。

「なんでしょうか幽々子様」

「ほら、訓練用の木刀あつたでしょ、あれで勝負して」

「幽々子様とですか？」

そんなわけないじゃないと首を振る幽々子、そして俺の方を指さした。

「祠雷さんとですか……別にいいですけど大丈夫なんですか？」

「祠雷なら大丈夫よ、伊達に私と組んでないわ」

あの、組んだの一回だけですよね。しかも大丈夫の根拠はどこから出てくるの？ ついでにその黙ってなさいオーラはどこから出てくるの？ 地味に怖いんですけど。

しかもうなずいちゃったし今、ほんと怖い。楽しむためなら俺がどうなってもいいのか？

ほら取りに行っちゃった、もう戻れないよこれ……ほら持って来ちゃった、はいどうぞじゃないでしょ、しかも俺の顔が引きつってるのに気がついてない。

もうこの流れを変えることはできないだろう、いや、俺だって空気をぶっ壊すのは少し後が怖いし。もうやるしかないのだろうか……
さてよ、これは前にもこんなことがあったような。いや、あった。
2回ほどあった。一応切り抜けてきたんだから今回も何とかなるはずだ、と信じたい。

「じゃあはじめますよ」

庭で向き合った俺と妖夢、こうなったら何とか切り抜けるしかない、たぶん今回は無理だけど。

「なあ、何で俺は長いのが2本なんだ？」

「短いのがいつの間になくなっていました」

理解した。

とりあえずそれらしく構えてみると……俺を不思議な感覚が襲った。前にもこんなことをしたことがあったかもしれない、また既視感だ、それもさつきよりも全然強い。

「いきますよ！」

妖夢が切りかかってくる俺はそれを……

受け止めて、手首を返すことにより受け流した。

今どうやってやったのか自分でもわからない、けれども体は何故かしら勝手に反応した……いや、反射的に動いたという感じだろう。
妖夢も驚くレベルの絶妙な手の返し方、残念だが俺の方がびっくり

だ。

（藍、計画道理ね。私の読みは当たっていたわ）

（はい、ですがここまできれいなものとは思いませんでした。やはり元が元なんでしょうかね）

こっそり顔を合わせてささやきあう式と主であった。

そのあとも打ち合いが続き、しばらくしたらはじかれた。

しかし、本当に不思議だ……これがレミリアの言っていた運命なのだろうか？

謎ばかりではあるけれど、いつかはわかるようになるのだろうか……

（しかし紫も変な頼みしてきたわね、木刀の数を長い3本、短い1本にしるなんて。妖夢にも言うっちゃいけないって言うし。また何かやってるのかしら。まあ今回同様手伝ってあげましょうか）

紫と藍はあのあと帰ってしまった、今日の夜に重要な用事があるらしい。まあまた明日も来るそうだけど。

妖夢とのもはや少し打ち合っただけのほとんど一方的な勝負も終わったし

そのあとは適当に雑談をしていた、俺も家に帰っても暇なだけだし。できるだけ時間を潰せる、それに楽しい。

しかし、そうやっていても夜は来るわけで、そろそろ帰ろうかと思
った矢先に……

「あつ、帰り道分かんねえ」

行きは紫に無理やり連れられてきた、当然ここがどこかもわからな
いし、どっちに帰ればいいのかもわからない。
下手に飛び出して迷ったらそれこそアウトだ。

「だったら泊っていけばいいじゃない、別にこっちはいいわよ」

「幽々子様、勝手に決めないで下さいよ。まあ私も別にいいですけ
ど」

「けど、いきなり泊っていくのは迷惑だろ」

仮にも女の人の2人暮しなんだし、少しばかりは恥じらいを見せて
も……いや、ここ（幻想郷）ではそんな細かいこと気にしてたらや
つてられないか。

まあ今日一日くらいお世話になろうかな、明日また紫も来るみたい
だし。その時に送ってもらおう。

「だったらお願いできますか、あつせめて夕飯くらいは作らせて下
さいね。ただ飯は気が引けるので」

「わかったわく妖夢、今日はお休みね」

「ええ！ さすがにお夕飯くらいどうってことないですよ。私が作
ります」

「けど、俺だってただ飯はやりたくない」

さすがに少しくらいは何か手伝わないとダメ人間になっちまう。

「わかりました、けども覚悟しておいて下さいね」

……その言葉の意味は、夕食を作る最中にわかった。なんで3人しかいないのに10人前も作らなあかんのだ、妖夢に聞いたところ、出費は9割以上が食事らしい。同情するよ。

しかもいざテーブルに出すと、けるっと平らげてお代りの要請をしってくるし、ルーミアよりたくさん食べる。

妖夢もこれを毎日やっているのか、大変だな。それよりもどこに入っているのが気になるところだけど。

まあそんな一日も終わる、今俺は布団の中だ。

明日は妖夢が朝食を作ってくれる（これだけは譲らなかつた）らしいので、俺は普通の時間に起きていいだろう。

まあ今日はもう暗いし寝よう。細かいことは明日考えればいい。

「迎えに来たわよ」

「ああ、一応準備OKさ。ただ1時間が限界かな」

「それだけあればいいわ、じゃあ行くわよ」

2人の足元にスキマが開いた。

偶然ではない既視感（後書き）

幽々子は紫の協力者！ けどまあ事情は知りません。
まあ、紫はまたいろいろやっています。

次回も白玉楼スタートです。

また二人が加わった

生き物という生き物がいない、そんな所で2人の男女が立っている。幻想郷の中でも知られていない場所で。2人はお互いの成果を称え合うように。

景色が動いた、もう一度言う景色が動いたのだ。さらに細かく言うと、二人の目の前の、まるで何かが祭られているような雰囲気さえ出すその場所が動いた。

そして崩れた。2人は4人になった。そして2人はこういった。

「おかえり、待ってたよ（おかえりなさい、待ってたわよ）」

それだけで残りの二人はこの状況を理解した。

「詳しい事情は僕の家でどうだい、さすがにこれ以上はきついんだ」

「なら、私は少し寄るところがあるから、すぐに終わるし先に行っている」

1人がスキマに消える。

改めて1人が手招きをしてから、夜の闇に、はるか上空に向けて優雅に飛び立った。それを追って残りも空に飛び出した。

同時刻、祠雷が何かに共鳴するかのように目を覚ました。

ふと、どこかで何かが起きたかのような感覚がして目が覚めた、随分とあいまいな感覚だけれども。確かにそう感じた。

まだ夜中だというのに、少し体を起こす。どうやら一気に目が覚めてしまったらしい、このまま布団にもぐってもまたすぐに寝つけるか？ 否、それはないだろう。なぜだか知らないけれどわかる。

その辺でも散歩しよう、外の世界でもよくやっていたことだし。気分転換にもなる。

外に足を踏み出した。

最初に目に入ったのは西行妖、ついさっきどういうものか幽々子に話してもらった。

要約すれば、その桜の木の下には誰かが封印されていて、桜を満開にすれば何者かよみがえるとのこと、そんな話があっというのかと思うが、幽々子も亡霊なんだと思うと不思議と当たり前のように思えてしまう。

俺もこのまま幻想郷の色に染まるのか、なんだか怖い気が……しなくもないな。

俺は少しばかり西行妖に手を触れてみる、触った限りでは普通の桜だが……何か少し感じないわけでもないな。まあこれが普通なんだろうが、さてよ、ここにいる時点で十分普通じゃない気がする。もう手遅れか……？

しかし妖の名にふさわしいといえはそうなのかなあ。威厳というものはやはり……

「それが気になるのかしら？」

「紫か、本当に神出鬼没なんだな」

もうたいして驚かなくなってしまった、これも慣れなのか。あんまり慣れたくないような事に慣れてしまったな。

「まあ気になるのは確かだ、幽々子も詳しいことは何も知らないって言っていたしな」

住んでいる本人が知らないことを、紫は知っている……いや、知っていてもおかしくはないな。だって紫だから。

「まあ、少しばかり長くなるけどね」

そうして紫は話し始めた、生前の幽々子のこと、西行妖のこと、幽々子の能力のこと、自害のこと、封印されたのが実は幽々子だということ、冥界の管理を閻魔に任されたこと、そして今に至る。聞けば聞くほど重くなる話である。

けれども、幽々子はこの西行妖の面満開を見ることはできない、それだけでなにか物悲しく感じる。

となると、異変がもし成功していたら……今幽々子はいないというわけか。

「なあ、紫は嬉しかったか。幽々子がいまこうしてここにいられることが」

「嬉しいに決まっているじゃない、あたりまえのことを聞かないで」

「そうか、だったら幽々子は全然一人じゃないじゃないか、まあ俺

とは似た者同士なのかな？」

「ええ、そうかもしれないわね」

初めて、紫があひの胡散臭い仮面をつけていない表情を見たかもしれない。

そのくらい、今の紫は純粋な笑顔をした。

「じゃあ私はもう行くわ、このことは誰にも話しちゃだめよ」

言われなくてもだれにも話さないよ。

「ちょっと待て、明日ここに……」

「わかっているわ、道がわからないのでしょう」

わかっているのなら俺を連れて行ってくればいいのに、というか何で知っているんだ？

それが一番問題な気がするんだけど……まあ、いつものことと言えばいつものことか。

「じゃあね」

紫がスキマに消えて行った、そのあとも、少しの間西行妖を見つめていた。すると後ろから声をかけられた。

「あれ？ こんな夜中にどうしたんですか？」

「いや、少しばかり寝られなくて。もう布団にもどるかな、寒くな

ってきたし」

妖夢が起きてきたらしい。

「そうですか、ではこれで」

すると部屋のなかに戻って行った。話は聞かれていないらしい。それだけでも安心だ。

眠そうな目をこすっている、もしかして起こしてしまったかな。それだったらかなり悪いことをしたな……

まあ、そんなに深く気にすることでもないか……さて、もう寝るか。明日起きれなくなるしな。

「やあ、随分と早かったじゃないか、紫」

スキマからで終わらないうちに声がかかってきた。やっぱり長年一緒にいるだけあって、私の気配を探すのはお手の物らしいわね。今度本気で隠れてみようかしら、見つかりそうだけれどもね。

「まあ、全員揃ったことだし、再開の宴でも始めようじゃないか、君たちがいなくなつて。いや、おそらく封印か……うん、その反応ならあっているのだろう。ともかくそれから後のことは紫が説明してくれるからね」

雲の上の家の中は、完全に祠雷の世界となっていた。彼の個性がに

じみ出る作りとなっており、インテリア的にも彼のためと云ってもいいようなつくりだ。

その中で、中央のテーブルの四方にそれぞれ陣取る4人は異常なまでの存在感を誇る4人であった。それぞれが己の力を隠さずにいるのだから、それも当り前なのかもしれないが。

いや、ここではそんなことする必要もないのだけれど。いまだ自力でたどり着いたのは1人しかないのだから。

「さて、始めましょうか。あなた方の因縁の相手の最後と、幻想郷について」

3人は口を食するために、紫だけは話すために動かした

長い話が終わり、気付けばもう夜明け。草木が目覚め始めるころだ。

「まあ、今の通りね。この後はどうしましょうか。あまり人目につかないようにしてくれるとありがたいのだけれど。住居はこちらが提供するわ。とは言ってもうち（マヨヒガ）に住んでもらうことになるんだけどね」

さらっと同居宣言、もちろん藍には許可など貰っていない。

しかも相手方も特にリアクションはない、封印が解けた直後なのでしゃべるのもいつもより労力を使うとのこと。

「まあ、1日くらい幻想郷を自由に見て回るといい。君たちが守った場所は君たちが命をかける価値があったのかね。僕は最低でも自

分が死んだ価値のある世界だとは思う。きつと楽しめると思うから…… ああそうそう、2人に言っておこうか。永琳はご健在だよ場所はずつと変わらない、永遠亭だ。姫さまもいるみたいだね」

「そう、結局誰にもわからずじまいだったけど。まあ頑張ってくれたしね。行っておこうかな」

「そうか……世話になったのは確かだし礼の一つは言っておくか。まあ俺は長くなりそうだ。先に行け。日が傾き始めるころに俺が行く」

一言で終わる味気のない会話、昔から変わらない二人のやり取りである。それはお互いに相棒の言いたいことがわかっていているからできる技ではあるが。

「気をつけるんだよ、風花にシェイド。日が落ちたらここに再集合だ」

2人は飛び立ち、2人は残された。

しばらくの間静寂が包むが、すぐにそれも終わる。そう、朝を伝える小鳥たちが来たからだ。ここはいくら気配を察知されないとは言っていない、やみくもに飛び回り、隠蔽のからの中まで入ってこられることもしょっちゅうある。

もちろん完全に隠さずにそうしていることにも意味があるのだが。

「さて、君も戻った方がいいんじゃないかい？」

「そうね、少しでも多く寝ておきましょうか」

スキマに1人消えた、残った1人は……

「さて、僕もひと眠りするかな」

小鳥の鳴き声が響き渡る

朝は自然に日が昇るころに目が覚めた、こんな早くから台所の方で音が聞こえるのは、おそらく妖夢だろう。こんな朝早くからつぐらないと間に合わないのか……まあ納得できるけど。実際に昨日体験したんだし。

台所をのぞくとこっちに気づかないくらい忙しいらしい。邪魔をするのも悪いかな。いまはそっとしておこう。

和室には、昨日のランプが置いてあった。これ持って帰るの忘れそうだな。ここに忘れたらそう簡単に取りにこれないし。そう思っただけなのに、今更けにポケットに入れておく。

しかし冥界の眺めも悪くないな、幻想郷の自然とはまた違う美しさがある。

いま都会のビルだらけの街並みを見たら目が詰まってしまうそうだな。まあ、もうそう簡単には戻ることもない、この間がむしろ例外なんだから……まあ、こう思うとなんだか懐かしく感じるな、もし生まれ変わるのならおそらく幻想郷で生まれることを望むだろう、けれども選択肢としては悪くはないかな。

冥界にいるから考え付いた？ 考え事をしながら、縁側に出て座っている。幽々子が起きてきたようだ。反対側から足音が聞こえる。

「おはよう幽々子」

「あら早いよね。それならご飯も早くしちゃいませうか」

「今作ってますから、あんまりせかさないほうがいいですよ」

あれ以上働かせたらただでさえ労働基準法無視してる状態なのに、かわいそうすぎるだろ……とか言いつつも噂をすれば何とやらだ。

「ご飯ですよ早く来て下さい」

「はい」

これがここの日常なのかそう思うと夜に聞いたあの暗い話が嘘みただいな。

まあそれがいいことなんだろうが、毎日が楽しいのはいいことだ。なんで昨日俺に紫があんな話をしたのかわからないけども、何か考えがあつてのことなんだろう。

さて、食事は冗談抜きで待ってくれないからな。急ぐか。

食事中に紫が乱入してきて、祠雷をスキマ送りにして食事の横どりをしたのは別の話。

なんでも何も言わずに朝帰りしたから藍が寝落ちしていたらしい。自宅に落とされた祠雷は仕方なく自分の料理を作る。

そんな一部が騒がしい朝、永遠亭にとある客人が来た。

鈴仙は最初は治療に来たのかと勘違いした、けれどもいたって健康そうな風に見えたので違うのは一目瞭然であろう。そこでその客人はそう言った。

「永琳の知り合い？ いや、明らかに年下だし子供……いや弟子かな。まあいいや、永琳のところに案内して、風花が来たって言えば通じるから」

突然現れた図々しい客である。

また二人が加わった（後書き）

新オリキャラ2人登場です。まあ次回はこの二人のターンかな。

西行妖については本格的に書くとは長くなりますし、今のところは要
点整理だけにさせていただきます。もう少し後になりますけど、ゆ
かりのことをよく知ってる第三者から説明がありますので。

それはともかく本格的に過去回をいつ入れるか考えなきゃならない。
タイミングとかどうしよう。

まあいつか絶対に入ります。真相がわからないまま終わらせられな
いもんね。

次回、若干永琳のターン含みます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6838x/>

俺と雷と幻想郷!?

2011年12月11日18時46分発行